ノ之部

乃村正清

正清は縫殿助と稱す、生駒親正に仕へ祿三千石を食む、其の先代は豊島友重と云ひ其子正長、乃生村に住するを以て姓を乃村と改む、文祿元年征韓の役及び慶長五年關ヶ原の役に方り、一正に從ひ殊勳を樹つ、元和六年一正幕府の命を受け大阪城を修するに當り、正清又派遣されて其の工を監す、竣工の後幕府より褒賞を賜ふ、されど此件に關し、同役前野助左衛門の讒するころとなりて禁錮せられ幽憤自殺す。子友正、香川郡山崎村に住し、英公の時より代々里正となり永續せり。（豊島友重を見よ）

縫殿助功績

天正十四年十一月秀吉の命を受け島津征討軍に參加し、讃岐軍人輸送の任務を帶び九州に出張せしが、讃岐軍豊後戸次川に於て敗績せしを以て其殘兵を收容し無事歸國したり。天正十五年八月生駒正規に祿千五百石を以て召抱へらる、高麗陣の船大將として渡韓し軍人輸送上功績多かりしを以て、歸國後一千五百石を加增し都合三千石を給され、家老職に加へられたり。

乃村重秀

乃村家の子孫新左衛門と稱す、別業を香川郡山崎に營み、老後蘭堂と號し、俳歌を能くす、寶曆三年十一月二十一日歿す。

乃村重該

通稱新左衛門、乃村氏の末孫、香川郡山崎村の里正、壯年失明し、性俳諧を嗜み、吟詠自ら嬉しみ、蘭亭と號し、寛政四年十二月四日歿す。

乃村重矩

○稱伊太夫、重行の子、老後別業を營み芳山と號し、俳歌を好み、文化九年九月歿す年五十八。

乃村家の末裔

乃村家は後阿部良山の家と親族關係が出來て今の香西寺乃村龍澄氏は其末裔なりと。

乃生村孫兵衞元忠

香川郡上多肥村高木城主なり、天正頃の人。

能勢大内藏

仲多度郡神野村大字五條にありし本庄城の城主にして、文明二年頃の人なり。

能代傳吉

は大川郡三本松町角屋儀助の子にして文政三年四月八日生る、性機敏任俠の氣慨あり八歳にして同町河内屋傳兵衞に養はる、長じて百石積の船を買入れ廻漕業を營み、北國廻りの海運に從事し航海を繼續しつゝありしが、時恰も明治の聖代となり、明治元年三月十五日千四百石積の山王丸に白砂糖、食鹽等を積み馬關を經て同年五月二日出羽國能代港に入り、積載の貨物を賣捌き返り荷に菜種杉材を買入れ歸航せんと準備中會々在越後の官軍糧食欠乏の報に接し、參謀大山格之助に賴まれ食料を積み込み六月七日越後の出雲崎に着し手渡し、其後同地附近に滯在し官軍の爲に身命を賭し、粉骨碎身盡す所あり、歸國せり後藩廳より帶刀を許され、金貳百兩と終身五人扶持を給されれ爾後功成り名遂げ悠々自適せしが、明治十七年五月十日沒す、年六十七。

野代廣助（來寓人）

は上總國市原郡市原村山田橋庄屋、野城良右衛門の養子にて、有名なる國學者權田直助の門人なり、夙に勤王に志し師直助の意を受け、同志を糾合せんとして文久三年六月九日丸龜に來り、村岡方に潛み小橋日柳等に會し國事に盡し居りしに、時恰も同年八月十八日御親征の擧あるを聞き、是に會せんと同志と俱に上阪せしが形勢一度御親征は中止となりしを以て、同志と歸國の途に就き船中に於て熱病に罹り歸つて療養せしも藥石効なく同年九月十七日歿す、年二十一歳、墓は琴平廣谷にあり、題して野廣の墓とあり、是親友君田の書する所なりと云ふ。

野村盛芳

又十郎と稱す、宮本某（權大夫と云ふ江都の士秩二百石）の弟なり、如何なる故にや野村を以て氏とせり、寶曆十三年始て徵俸を賜りて徒士となり、安永五年清操太夫人の奥番となり、七年總領組並に轉じ、八年文學を能くするを以て、中寄合に進み月俸二十口を賜はり、是より儒官に列す、天明元年三月九日定公周閑の御忌なりけるに、三

木毅（後に宗太夫と稱す、雲門と號す、義賢が先師華陰先生の父なり）と共に靈嶺塔に遊びて、酒を飲み歡呼せしことありければ儒臣として、特に大不敬に坐せられて月俸及び士籍を除かる、盛芳此年始めて公駕に從つて讃に來りしなり、移つて江都に歸りけれども、藩邸に入ることを許されず、自責の詩を作り、いくばくもなくして、身まかりしと聞く。（綾野義賢の記に據る）

野村眞疇

名正之、號眞疇、又一瓢、丸龜人、○英の門人、人物を畫く、明治四十四年二月歿す年七十七。

野村蘭陵

號蘭陵、文化頃西讃人、○詩畫を能す、文化九年竹石展觀錄に淡彩赤壁圖をかけり。

野田藻浦

名基資、號藻浦、通稱直衛、左近君附、香川郡宮脇住、○松浦に學び書を能す、晩年楷益佳なり、明治三十年六月四日歿す、年六十七。

軒原庄藏

は大川郡富田村の庄屋にして土木家なり、同村大字富田中太田免數十町歩は水利不便にて旱魃を免がる能はざるを以て、安政年間古大池の源泉より三ッ石山溪に至る山底を堀る事百五十間晝夜三年の工事を經營し、水道所用の鐵砲穴を全通し、此穴中より水流池上に灌くことを得て、其の水掛の田地爾來年々豊作することを得て、地方人民の幸福を受くるに至り、後人其の德を傳へて止まず、万延頃の人。

○オ之部

弟橘姫（貞姫）

弟橘姫は日本武尊の妾にして、忍山宿禰の女なり、尊蝦夷を征し相模より上總に航する際、暴風起りて船將に覆らんとす。姫の身を海身に捧げて投死し、尊の身代りに立たせられた。姫の父忍山氏は當國と關係あるものゝ如し、日本書紀に因れば弟橘姫は「穂積氏、忍山宿禰之女」とあり。而して善通寺町大字大麻鄉社大麻神社紀に、神櫛王當國に下り給ひし時大麻神を崇め奉り、忍山彦根に其の祭を掌らしむ云々、之は天武天皇の白鳳十一年に至り、彦根の裔穂積鵜麿、瓊々杵尊及供奉の三十一神像を刻して合祀せりとあり。されば忍山宿禰、穂積氏の族夙に仲多度郡内に住せしこと明にして媛は、大社神社の社人穂積氏の出ならんと云ふ、說有力なるに似たり、一說として爰に收錄す。

（仲多度郡史）

凡直千繼（オホシノアタヘチツギ）

正六位凡直千繼は寒川郡の人なり、續日本紀に曰く先き星直に紗拔大押直（サヌキオホオシノアタヘ）の姓を賜ひて、庚午年の籍に大押の字を改めて凡直と注す、是を以て星直の裔或は讃岐の直或は凡直たり、先祖の業により讃岐公の姓を賜へと勅して、千繼等が戸二十一烟に請に依り之を賜ふ。

凡直春宗（オホシノアタヘハルムネ）

春宗は千繼の裔にして寒川郡の人なり、幼より學を好み長じて京師に行き大學に遊び讃岐朝臣の永直に從ひ法律を受く、陽成天皇の元慶中擢られて右少史明法博士に任せらる、仁和元年改て左京三條坊に轉籍す。

大谷川左近太夫

鵜足郡炭所東に在りし大谷城の城主なり、其來歷左の如し

（參照）

大谷城は炭所東にあり、往昔より大谷川左近太夫橘光兼之に居る、南北朝兩立に及び細川管領に屬し其城邑を保つ、子四人あり、長を六郎左衛門光邦と云ひ、次を太右衛門光盛と云ひ、次を左近左衛門盛國と云ひ、季を三郎兵衛光高と云ふ、貞治元

年細川清氏及中院源少將南帝の勅を奉じて來る大谷川光兼其族を以て之に歸す、同年七月清氏高屋に亡ぶ、盛國光高之に死す、同九月賴之西長尾を攻む、大軍拒み難く源少將自殺す、光邦光盛、父光兼と奮激し衆を麾き力戰して死す、天正年間に至り左近兵衛元國なる者あり、土佐元親に降る、其子菖蒲之助頗る勇名あり。（讃）

大野新太夫

香川郡大野の城主なり、壽永二年に鎌倉御家人となりて、代々新太夫と稱して當城を居城とす。

小野權左衛門

本名を景光と云ひ香川郡河邊城主、天正年前の人。

太田六兵衛兼久同兼氏

香西氏の部下にして鷲田村坂田の城主なり。年代は天正前後の人。

大川小太郎平政時

善通寺町大字大麻にありし内山城の城主なり、文明三年何人と戰しにや軍敗れて自殺すとあり。（西讃府志）

大平伊賀守國祐

大平氏先々代は國隆、國房、國秀と云ひ、初め南北朝時代に東國駿河より來りて多度郡仲村及三豊郡財田の諸邑を領し居れり、國祐の時に至り三豊郡和田村に移轉し城を築き大平城と稱せり、而して國祐は慶長八年に沒せりと云ふ、南海通記に左の記事あり、此れも國祐の事ならんか。

大平は本細川氏なりし國祐寺は國祐の建つる處なりしが、故ありて大平と改め大比羅伊賀守たりと。天正十四年十二月秀吉の命を受け、九州島津征討軍に參加し豊後戸次川に於て苦戰せしも、身命を全ふして歸りたりと云ふ。

大河内十郎左衛門吉隆

十郎左衛門吉隆は三豊郡財田村大河内城主たり。

（參照）　大河内城は本篠を距ること西八丁許にあり、城山と呼べり城趾一段餘大河内十郎左衛門吉隆の祖居れりと云ふ。（西）

大西上野介

阿波の人天正十年八月五日土佐軍香西へ進入の時、旗頭として兵三千人を率ゐて來りし人。

大熊備前守と其子善兵衛

大熊氏は宮脇氏と同姓にして、熊野別當湛增が遠裔なり、天文頃出でて大熊邑龜田池の邊を領す。備前守の子を善兵衛と云ふ、此人大兵にして武藝に長じ、尋常の人品にてはなかりし由。大日記には元山に土居搆にて居る十河麾下とあり。

大林四郎左衛門

羽床伊豆守が同姓の臣、天正七年春土佐元親羽床氏を攻めし時、謀議に與り善後策を講ぜし人。

大森八左衛門

實名忠政と云ひ、剛直勇敢の人にて東照公及威公に歷仕し、英公の讃岐へ封ぜられし時家老となり祿千石を給され、明暦七年六月歿す。

大西權兵衛

は三豊郡笠田村の人にして七義士の首唱者なり、其來歷を記さんに寛延二年七月大洪水あり、穀物實らず百姓困究せしを以て權兵衛、彌市郎、嘉兵衛、大野村兵次郎、那珂郡帆の山金右衛門及多度郡稗殿村甚左衛門、三井村金右衛門等先導者となり、數萬の農民を糾合し、租稅減免の歎願書を時の丸龜領主京極高矩に提出し、願意は聽許されしも徒黨强訴の罪に座し、七人は皆金倉川原に於て斬罪に處せられたり、後此等七人の靈を弔ふべく、七義士神社として笠田村に於て神とあがめられ、今に至る迄香華絶へず。

權兵衛辭世

此世をば、泡と見て來し我心、民にかはりて、今日ぞ嬉しき

奥村無我

諱は重舊、字は無我、權左衛門と稱す、曾祖藻相市内浮田直家に仕へ備前八濱の戰に父子皆死し、祖父九平次氏を改めて奥村と云ふ、播磨侯源利隆に仕へ臣たることを致

し、去て作州に之く父諱は正吉備前侯源光政に仕ふ、二子を生む、無我は其第二子なり、容貌魁偉少ふして擊劍を好み、落合、坂口、吉川、鈴木の諸士を師とし妙技に達し、技成て近傍諸國に客游す、士人爭ふて之を師とす、自以爲らく己れに若くものなしと偶田神無外なるもの江戸より來り備中に遊ぶ、無我時に作州に在り之を聞て袂を振ふて起つ雨甚し往て相擊つ其技敵すべからず、終に節を屈し弟子となり、爾來遍く關西諸國を巡游し頗る得る所あり、其術は常州筑波山東軍寺の僧より出づ、因て東軍流と云ふ、元祿十三年高松藩に仕ふ、無我に從て學ぶ者五百餘人其中巨擘と稱するものは赤穗の老臣大石良雄及大石信清、潮田高敎等あり、元祿十三年高松藩主松平頼常に仕へ享保十九年五月十七日病で歿す、享年七十六、墓は西方寺に在り。

權左衛門は大石良雄の軍法の師なりしかば、左の起請文を持ち居りしが本書今は見性寺の什物となれり。

起請文前書之事

一東軍流の兵法就御相傳無免已前聊他見他言申間敷事

一免以後交他流別一流立申間敷事

一免以後無誓紙而太刀見勢申間敷事

右之條々於相背者

梵天帝釋四大天王伊豆箱根三嶋大明神八幡大菩薩天滿大自在天神摩利支尊天惣而日本國中大小神祇罰可蒙者也仍起請文如件

元祿五年申六月廿日　　大石內藏助　良雄花押

奥村權左衛門殿

奥村鹿江

名知周、字義年、通稱忠左衛門、號初鹿谷、友松園後鹿江、高松商家(醬油業明石屋)明人瑞圖の書風を學ぶ、嘉永六年十二月歿す、年八十四、○書譜に字道渦とあり、此字猶後考を俟つ、

奥村景武

名景武、通稱治兵衛、高松藩儒、○延享二年九月屋島記を作る、圖會に載す、

奥村宗弼

名宗弼又定賢、通稱與一郎、高松藩儒、○寛政十一年四月歿す、私諡魯清といふ。

奥村淡齋

名强、字子毅、通稱忠一郎、號淡齋、隱居して松窓と號す、實は寒川郡神崎村醫柳甫の子、寛政十一年三月定賢の養子となる、幼より學を好み、京阪及江戸に留學數年、歸りて講道館儒員となる、天保八年十月歿す、年五十六、○昌平黌より歸る時、同窓薩摩人石塚等數人送序を作る一卷あり。

奥村松宇

名弘又宗觀、字子訓、通稱善藏、號松宇、實は三本松眞部置助(沖助ともあり)の弟、淡齋の養子、○講道館儒員となる、文久二年十二月四日歿す、年五十一。

奥村學山

名巽、號學山、松宇の子、○漢學を修む、明治十八年大川郡長となる、明治四十四年五月歿す、年七十。

奥村琛齋

名祇頭、號琛齋、瀧宮人、○書を能す、文化頃の人、○祇頭此名如何なれども姑く畫譜に依る。

奥田林水

名景之、號林水、通稱茂左衛門、高松馬場に住す、○古行流の俳句を能す、嘉永頃の人。

奥田文兵衛

文兵衛は天保年間、郡家村字領家に生る、文兵衛夙に醫業に志あり、遂に隣村(今の南村)の三井鴻景に就きて醫學を修め、傍ら書を林田の富家松浦に學び、運筆の妙極に達せり。晩年醫業を執らず、村内に家塾を設けて、鄉土の志學者數十人を集めて教授せりと云ふ、明治十一年某月病歿す、年四十四歳。

大久保公敦

名初正眞、後公敦、通稱初主計後飛驒、高松老臣、○詩を能す、亭を綠波亭と名く、青葉士弘記を作る、○次韻、潮見阪頭行色閑。西風吹雨函過千山。誰知長路旅情切。

斷腸鄉關雲霧間。○落欵或は保公敦とあり

官歷、享保十七年三月十二日大老となる、家祿三千石を給され後飛驛を襲稱す、延享元年七月廿五日歿す、住邸は今の高松公會堂の所にありしなり。

大久保主計

大久保飛驛の子、諱は賴均、家祿三千石を與へられ大老となる、慶應元年正月五日協と改む。明治元年二月廿日土軍の將深尾丹波より城地人民還賜の勅命を受け傳達す。明治二年十月廿八日高松藩大參事に任せらる。

大久保賴暉

初實名賴暉、弘化二年九月廿七日祿三千石を給され、賴胤公の大老となる、後飛驛と改む。慶應元年二月朔日致仕。

大久保飛驛歌道に達し、公卿御點削の內二首絕唱なるよし此歌

鵜舟

さしつとふ鵜舟の數のおゝい川すへはかつらにかゝるいさり火

須磨

戰しよを弓はりに引かへて月にや遊ぶすまの浦人

大久保來

名來、翠窩と號す、好んで漆器細工を爲す、高松藩士、○歌を中村氏に學ぶ、明治卅九年三月廿五日歿す、年七十四、○畫馬、治まれる御世に生るゝ駒なれや荒れすさむともせずかへりともせず

大久保直子

名直子（タヽコ）、高松藩老大久保飛驛の室、本京都華族萩原氏の女、○初京にて歌を學び、又友安三冬を師とす、明治九年六月歿す、年七十九、○古柳、春くれば大河のべの古柳絲も絕へず幾世へにけむ

大久保諶之丞

三豐郡財田村大字財田上の農、嘉永二年八月十六日生る、父を森治と云ひ祖父を與三治とす、祖父の代より世々殖產興業に盡力す、諶之丞人となり儉素にして品行方正、父母に孝順、淡泊にして磊落、常に空談を廢して淳々として實務を談ず、最初糖業の

發展に力を注ぎ、又は灌漑水のため坡池を設く等頗る殖產上に意を用ひしも、後讃岐より阿波に通ずる完全なる道路なきを遺憾とし、百方遊說拮据勉勵、四方に奔走して七年の日子を費し新四國街道を開鑿す。又學事の奬勵に救貧の設備に多度津軍港設備に、其の他北海道移民の便を開きし等公共事業に心血を傾注せること等枚擧に遑あらず、後縣會議長となり、明治廿四年十二月縣會開會中俄然發病し天遽に彼が壽を奪ふ時は明治二十五年十二月十一日なり、享年四十二。

大久保彥三郎

剛石又は在我堂と號す、四國新道を開きし大久保諶之丞の弟にして、有名な敎育家なり。幼より穎悟小學敎育を了りし後高松中學校に入り、傍ら香川甚平、黑木茂矩、桑門觀照等に就き國漢學を學び、明治十一年京都市にいたり、三國幽眠、松岡芦村に從ひ國漢學を修め、明治十二年東京に至り、二松學舍に入り三島中洲の敎を受け、三年にして病のため歸鄕し、同十七年忠誠塾を開き、同二十年此れを京都に移し生徒に授く、同二十五年病氣再發のため閉舍して歸鄕し、同二十八年四條村稻生に校舍を新築し盡誠社を再興し、同三十二年之を善通寺に移し、中學制度となし許多の生徒を敎育し、四十年歿するまで其の敎養を受けし者無慮四千名に達せりと云ふ、又一面敎育事業の傍ら縣會副議長となり縣政に盡瘁せし事あり。爲に香川郡敎育會は木杯を、仲多度郡長は銀杯を贈りて其の功績を謝せり。明治四十年七月十九日病歿す、年四十七。碑文は其師三島中洲撰す。

大原東野

は名民聲、字不樂、號を東野、本奈良の人、山水花鳥人物皆妙なり、大阪に寓し晩年苗田村に來り字中森の地をトし、琴平街道の傍に畫室を構へ、昆虫を蒐集して門人と共に又庭內に藤を植え常に之を愛し、隨時樹下に遊ぶを以て樂みとす、是によりて藤の棚の名高かりしが後年高燈籠の傍に移植し、今尙繁茂せり、又樹下に蟲塚あり嘗つて東野が昆虫を埋めし塚ありしを藤と共に今の地に移せしものなりと云ふ。天保十一年七月歿す、年七十、文政七年名數畫譜を著す、此書は畫題の名數に關する者を集む例へば一笑圖、五岳圖、名花十友圖の如し、卷末に書畫篆刻等せし讃人の名を附錄す備後福山の畫家藤井松林とは嘗て、同窓の友たりしかば頻りに往來して互に其の技能を硏磨し遂に一機軸を出す、就中人物畫は翁の最も得意とせし所なり。

大原萬年

名紳、字萬年、號香山、東野の子、父の畫風を傳へ、鹿を描く最も妙なり、然れど惜哉早く歿す、○畫譜に出づ。

大内岩太郎

盥谷と號す、大川郡譽水村大字水主祠官の家に生る、世々水主祠官として敬神を以て顯る、氏は幼より穎敏夙に祖先の風を紹いで尊神の念篤く、初め皇典學會明道學校に學び亞いで皇典講究香川分所に於て、三等假合格證を受け又松岡調氏に國典學を修め或は文學博士小杉榲村氏或は文學博士井上頼圀等に國典考古學を從學して識る處多し水主祠官となるや境域の擴張に本殿其他の改築に、又は中絶した祭典の復興に或は氏子に對する尊神の念涵養等その職に盡力せるところ頗る多し。氏又考古學に造詣深く津田及其附近の考古史を調査し、香川紙上に發表せし事あり、惜哉大正十二年三月六日歿す、年四十六。

大場長平

木田郡林村里正吉次郎の次男なり、義氣あり奉公の念に富み明治十七年縣會議員に選ばれ、次で常置委員に擧げられ、明治三十五年衆議院議員に選ばれ、國政に盡す所あり、又農工銀行並に東讃電氣軌道株式會社の重役たりしが、大正五年八月十日歿す、年五十九、氏又餘技として圍棋を能くし(初段格)當時縣下にては敵する者なかりしと云ふ。

大塚梅里

名長敏、字修甫、通稱八郎左衛門、號梅里、齋號夢鶴齋、丸龜藩士、父は安達正智、大塚氏を嗣ぐ、○正明館に經史を學び、傍詩文を作る、藩仕四十餘年、維新の際參政後大參事となる、明治八年九月歿す、年七十三、○曾て西讃府志編纂の事に幹たり。

大島甘泉

通稱民之助、諱は延年、字は居仁、號甘泉、居號悠然堂、高松の人、本姓宮内と云ひしも明治維新の際大島と改む、舊高松藩の會計吏たり、明の胡兆新の書風を學んで能くす、明治年間の人子、明德ありまた書を能くす。

大岡多内

丸龜藩の軍學者にして元文頃の人なり、元文五年五月に畫ける神文を同地藤田氏もて

るが其れを見ると其文中に記名せる門人百餘名あり、以て其當時の權威者なりしを察知すべきなり。

大平　秀

名秀、綾歌郡小川人、○醫にて書畫を能す、明治二十六年五月歿す、年七十六。

大平節山

名均、字子維、通稱周禎、號節山、綾歌郡小川人、○陸軍軍醫正たり、詩畫を能す、明治中歿す。

大川亘及環

亘名は宣重、號を蘭皐又鷺彦と稱す、父を大川齋と云ふ、小豆郡草壁村の人、應神天皇本郡遊幸の當時草壁郷の地頭にして、苗羽村に居を占め、奉迎御饗に奔走せし大川某の後裔たり、安永二年神懸山下に生る、幼より學を好み、和漢の書に通じ書を能くし文に長ず、現今内海八幡宮に藏する「草加部八幡社傳記」は嘉永二年六月同氏七十七歳のとき手寫せしものにして頗る詳細なり、又享和元年四月二十一日植松に於て田畑地神祭を行ひ、同三年同地に五神の神號を石に彫刻して安置し、春秋社日に捧幣祝詞相勤めざることとなし、次で文化三年七月星か峯兩社を再興せし等同家の舊記にあり環は宣重の子にして、字は子連、號は星峯、一に其樂と云ふ、文化二年に生る、學才あり、殊に繪畫を能くす、上村天津神社横堂の押し上げ戸に揮毫を遺せり。

大森辨藏

土庄町の人にして龜太郎の長男なり、家世々商業を營み本町の重鎮たり、今其業績の一班を擧げるに、明治廿一年小豆島醬油株式會社を創立せしを始め、小豆島紡績株式會社及小豆島銀行を設立し、各其の社長となる。同廿七年香川縣會議員に選はれ尋いて議長に推され、郡制の實施あるや郡會議長となり。香川縣農會の設立あるや副會長に擧げられ、其他醬油同業組合長小豆郡教育會長等に推擧せらる、資性溫厚頭腦明晰事を處する深重なり。是を以て各般の事績擧らさるものなし且つ屢貧困者を救恤し、軍人遺族を犒ひ凱旋軍士を歡迎する等の擧あり、品性高く人望博く將來圓熟を期せしに齡知命に達せす多大の前途を殘して病歿す、時に明治四十二年六月五日なり。

（小豆郡史）

大橋四作

幼名與市後に助市郎、明治二年更に四作と改む、小豆郡草壁村上村大橋市右衛門の長男にして、文化三年神懸山麓に生る、資性率直上村の組頭として年寄村上幾郎を助け大いに村民に重せらる。八幡寺老僧佛朔道人に就いて俳諧を學び、其の號を子朔と稱す、好んで淨瑠璃を語り、又演劇に巧にして當時兩藝共島中第一として、衆の歡迎を受けしと云ふ、明治九年五月四日老衰を以て逝く、年七十二。

辭世　死ぬまでも月雲花や郭公

大熊小石

名實導、號小石、山田郡下林村眞宗僧○畵を馬嶺に學んで能す明治七年六月歿す年六十

太田秋滿

秋滿は小豆郡大鐸村肥土山の人、父を宗義と云ふ、夙に古學を修め、國學三大人の遺風を欽す、明治五年池田龜山神社詞官兼教職となり、超えて權少教正に進み、廿七年土庄八幡神社々司、兼福田、豐島、大鐸三村社務を掌る、襟度高邁にして風丰脫塵和歌を善くし、古調を尙ぶ、當時四方の名流小豆島を訪ねるもの必ず氏を訪ねざるはなし。晚年黃薇樂を樂み、園族をして學習せしむと云ふ。又近鄕に重きをなし事あれば常に參劃せざるなしと、明治三十二年四月十八日壽八十を以て長逝す。

太田文友

名文友、香川郡坂田人醫業、○歌を能くす、寛政元年西行六百年追善集に歌六十首入れり。

太田眄柯

名政張、字子弛、通稱新五左衞門、老後改稱意平、號眄柯、本江戸人、高松藩士となる、○馬術に長じ、博學にして、詩書畵を能す、天保三年九月歿す、年六十餘、○齋號五樂齋、同僚島默齋其記文を作る、又書齋に決死の二字額あり、藩の大事に奮然として當る、○莊禪に得意なり、嘗て淇園に研究せし事あり。

太田正德

名正德、高松人、年代明治十年頃の人、○詩を能す。

太田資邦

名資邦、通稱次郎、號如雲、三木郡田中人、敬輔の次男、○小橋安藏と勤王に奔走す明治二十九年七月歿す、年五十九、時時歌を詠ず、○大御世のみよの靜けさほの〳〵と朝日に勾ふ富士の雪のね。

次郎妻は、犀といひ木内龍山の女なり、子深藏あり、丸龜に住す。

太田彦郎

諱は秋豊、小豆郡大鐸村の人、弘化二年十月本村肥土山に生る、太田秋滿の長子なり少壯にして氣節を貴ひ、勇氣群を拔く王政維新に際し、夙に尊王攘夷の說を唱へ家を出て丶常に四方の志士と交る、其の國事に奔走するに當りてや、時に熱誠の迸る所言行自ら過激に涉るを以て間々反感を免れざるものありき。一時備中倉敷縣に出仕して名を土岐一郎と改めしが、後明治二年兵庫に遊ひ一日外人の跳梁跋扈するの狀態を目擊し大に憤慨に堪へず、頗る激烈なる言動に出でたり、其夜某樓に上り津山藩士數名と置酒會談大に本藩の措置を批議し、尊王攘夷の正義を唱道せしに藩士等詐術を以て和田岬に連行一遂に慘殺せり、時に同年二月二十日にして月始めて東天に上る頃なりしと云ふ後ち土人此地に一基の墓表を建て殘念樣と稱して尊崇怠らす、香花常に絶へずと云ふ。墓面に土岐一郎秋豊と刻し、墓陰に左の如き自作の國詩あり、以て其意氣の壯なるを見るへし。

敷島の大和武夫の佩く太刀は醜の夷を斬り攘ふらん。

（小豆郡史）

太田典德

小豆郡大鐸村の人、通稱伊左衞門と云ひ本村庄屋の長男なり、天和年間肥土山村に於ける田拾町五段歩高百四十石餘を養ふに河水のみに依り、屢旱魃の害を蒙りしを歎き土庄淵崎等と協議し、其の筋の許可を得て蛭子池を創鑿し、三歲を閱して竣成を告く實に貞享三年なり。肥土山黑岩上庄北山平木赤穗屋淵崎の里民永く其の恩澤を受く、明治十一年關係村協議し離宮八幡神社內に一祠を建立して其の靈を祭り稱して豊水靈社と云ふ、每年六月七日例祭を行ふ、尙ほ同廿六年碑を池畔に建て以て其の功を表す○延寶七年四月十日歿す。

（小豆郡史）

太田琴山

通稱源太郎、琴山と號す、三豊郡和田濱の人、太田清平の男にして文久三年十二月生

る、幼より繪畫を好み明治九年より畫を名草逸峯に學ひ、畿内中國九州等を遊歴し技倍進む、爾後大阪に移居し揮毫の需に應し居りしか、大正九年六月六日寒冒に罹り沒せり、年五十八、子琴岳大阪に於て父の跡を繼く。

太田耕治

小豆郡大鐸村の人、實は土庄町三枝兵藏の二男にして出でゝ大鐸村太田秋滿の養子となり、太田氏第九世の嗣となる、人と爲り篤實にして一鄕善士と稱され、村長となり郡會副議長となり又縣會議員に選はれ、日露戰役の功により、白色桐葉章を賜はり明治四十二年十一月十一日歿す、年五十六。

大石幹

名良弼、後改名幹、通稱平内又彌平、號潤齋、高松藩士、舍名敲金戛玉舍と云ふ、○詩歌を能す、晩年好んで竹を種う、種類多し、明治三十七年四月歿す、年七十三、○寄書懷書、藻鹽草かき殘したる跡見れば海人ならぬ身も袖ぬらしけり

大西雪溪

源七は通稱にして仲多郡郡家村の人、大西金治の男にして文化十年九月十五日の生れ畫を京都の中島來章に學ひ善くす特に人物に長す、嘗て宮内省の命を蒙り畫を献せし事ありしと云ふ、備後福山の畫家藤井松林とは嘗て同窓の友たりしかは頻りに往來して互に其の技能を研磨して、遂に一機軸を出し就中人物畫は翁の最も得意とせし所なり、明治二十三年八月十五日沒す、年七十九。

大西行彰

禮藏と稱す、字有常、行禮の子、寒川郡氷上村の人、藤川三溪に學んで詩文を能くす安政頃の人。

大西雪村

通稱量平、諱直美、字善卿、雪村又は寧處と號す、三野郡本山村の人、初め香川克齋に學び後大阪に至り藤澤東畡に學び學大に進む。後歸鄕して私塾を開き徒に授く、來學者數百人に達す、大正十三年八月十九日歿す、年八十七、子學軒あり家を嗣く。

大谷竹齋

通稱定平、號竹齋、香川郡一宮人、○九州人帆足萬里に漢學を受く、明治中歿す、年七十餘。

大鐘冬海

名冬海、通稱要人、本は山本半三郎と稱す、高松藩士、○歌を能す、天保頃の人。○木村重成、君が爲心とぎつる白玉は碎けても猶光失せめや

オ號索引

應岸（三好）　應登（柴野）　大足（阿刀）
乙生（山田）　應祥（黑田）　乙井（日下）

○ク之部

空海（弘法大師）

は寶龜五年六月十五日多度郡屏風浦（今の善通寺町）に生る、父を佐伯直田公と云ふ、幼名眞魚（マラ）得度して敎海次に如空後空海と號す、歳甫て十三歳、敏己に人を兼ぬ、舅父阿刀宿禰大足に從ひ書を讀み文を學ぶ、歳十五頗る頭角を見はす、十八の時大學に入る一日大安寺の沙門勤操を見て求聞持呪を受け、之を修る甚た勉む。年十八にて孔子老子釋迦の三敎に就て研究し、三敎指揮三卷を著はし儒佛道其の歸する所一なりと說けり、延曆二十二年遣唐大使藤原葛野麿に從つて入唐するに決し、同七月六日肥前松浦郡田浦を發し同八月十日福州に着し、同十二月二十二日大使と共に長安に到着せり夫れより青龍寺東塔院の慧果阿闍梨に就き秘密敎を受け、又天竺の僧般若三藏より華嚴六波羅密經等を授けられ、在唐三年、大同元年に歸朝せり、嵯峨天皇は召して厚く禮せられ、大同上皇亦其道を悅ばせられ灌頂の法を受け給ふた。弘仁元年十月廿七日國家の爲に高雄山で法を修し、弘仁七年歳四十三、高野山に登つて金剛峯寺を建て眞

言宗を天下に弘めたり。承和二年三月廿一日高野山に於て歳六十二歳で入定した。法臘四十一、延喜二十一年十月二十七日諡を弘法大師と賜ふ。

詩書畫

大師は詩文書畫に達し就中書は實に一世に卓越し、日本三筆の隨一として又大師流の祖として仰かれた書は初め在唐の時、韓方明に就て學び彼の地で已に能書の譽れ高く五筆和尚の名があつた、當時王羲之の書いた唐朝宮殿の一間が破損して其の儘になつて居たのを、憲宗が勅して之を空海に書かしめたとの逸話もある。大師の筆蹟として社會に殘存してゐるものは、石刻では大和の益田池碑(天長二年撰書)がある、肉筆としては風信帖、請來目錄(以上東寺藏)寶龜院坐右銘即身義、聾瞽指揮(以上高野山藏)灌頂人名錄(高尾山藏)綜藝種智院式(米澤、上杉神社藏)三十帖冊子中の數帖十如是、東寺七祖畫像の名號及贊辭書訣、嵯峨帝に奉る時藥、與二越州節度使一書の類其眞面目也又福岡縣の東長寺には珍しくも大師の千字文が藏されて居ると。其他本縣にては急就章(三豊郡萩原寺藏)がある。大正五年五月國寶に編入された。又大川郡志度町多和文庫には最澄に與る尺牘があつた。因に飛白と稱しカスリの樣な書方は空海の始めしものなりと。

空海文冊

醍醐天皇延喜十九年空海の文冊を以て、詔して經藏を置く。

空海の門弟　(○點の六人は讃人)

○實慧　○道昌　○知泉　○道雄　○眞雅
○眞体　圓明　眞紹　眞濟　泰範
眞如親王　忠延　杲範　圓行　常曉

寺院建立

讃岐に於ける大師の建立にかゝるものは左の如し。

大川郡　長尾寺
木田郡　八栗寺　眞行寺　白峰寺　摩尼珠院　遍照院　鄕照寺
綾歌郡　藥師寺　高照院
島田寺　法樂寺
仲多度郡　淨願寺　善通寺　甲山寺　曼荼羅寺　出釋迦寺　海岸寺
三豊郡　鷺城院　金光寺　持寶院　興昌寺　興隆寺　大興寺
雲邊寺

著書

三敎指揮、性靈集、住心論、文鏡秘府論の外佛敎に關する著作甚た多し、近時弘法

大師全集出版されたり、大師また和歌をよくし新勅撰續千載風雅諸集の作家なり。

萬農池の築造

大師はまた一面大土功家でありしなり、頃は今より一千有餘年前の弘仁十年以來我が讃岐は大旱に際し、此池の築造に着手せしに同十二年五月に至るも成功せざるを以て、民皆空海を慕ひ師歸り來らば陂忽ち成らんと有司此旨を時の帝(嵯峨帝)に奏す、同六月空海勅を奉して歸り來り築造工事を監督す、民大に喜び子來して土功に從ひ日ならずして成る、同十三年勅して空海に新錢貳万貫を賜ふて之を賞す、此を以て見ると空海は非常な土功家でありしなり。

大師の詩歌

後夜聞佛法僧鳥

間林獨坐草堂曉、三寶之聲聞一鳥、一鳥有聲人有心、聲心雲水俱了々

土佐國室戸といふ所にて

法性の室戸といへどわがすめば有爲の浪風よせぬ日ぞなき

高野の奥の院へ參る道に、玉川といふ河の水上に毒虫の多かりければ、

此の流を飲むまじき由を示し置きて後よみ侍りける

忘れても汲みやしつらむ旅人の高野のおくの玉川の水　(風雅集)

菅公

(菅原道眞を見よ)

空鉢惠海律師

釋慧雲、號空盛、唐國人、孝謙帝の御代天平勝寶六年鑑眞に隨ひ來朝し、東大寺に住す後屋島に來り普賢堂を建て同寺を開基し第一代となり四方に敎授す、空海初慧雲に就き毘尼を學びしと云ふ、天平勝寶頃の人ならん、屋島寺開基に關し左の記事あり。

天平勝寶六年鑑眞唐より來朝の時海上より屋島山の靈なるを見て、船を寄せ山上に攀上り其形勢を觀察す、時に彼山の仙人出向て揖禮す、仙人の曰く我山はいまだ人間の栖にあらず仙界也此山を和尙に授くへし、佛法を興隆して人間界の患難を救へしと也、和尙悅服して約諾し鉢を此山に遺て上京す、時の帝鑑眞を崇信して戒壇を東大寺に築て律を行はしむ、其時屋島の仙人に會して約することを帝に奏す、帝詔して屋島山を鑑眞に授け戒律の彊とす、鑑眞即ち我弟子空鉢惠海律師に授け開基せしむ云々。

(南海通記)

觀賢

觀賢俗姓秦氏、仁壽三年癸酉香東郡坂田村北山浦に於て生る、父は秦道興と云、幼より顯悟、才氣自ら眉目に見はる、理源大師の行化の節見出されて無量壽院に於て薙髪す、長ずるに及んで博聞强記顯密の奥義を究め三論の精を研く、寛平七年金剛胎藏の灌頂を受け二相の玄旨を得て小野流の第二祖となる、後和州般若寺を創立す。興福寺の維摩會講師となりては盛名を振ひ、大旱魃に際しては膏雨を降らしめ、東寺の長者となりては高野山の坐主を兼ね弘法大師の靈夢によりては、奏して紫花を乞ひ以て醍醐天皇により弘法大師の諡號を贈るなど功績頗る多し、延長三年僧正に任ぜられ、同六月十一日遷化す、享年七十三。著述に大日經疏抄等あり。

國利

讃岐の刀工、高市住藤五郎と云ふ、業宗の四代目越前の子、今より（七〇〇年前）の人。

久利長門守

香川郡圓座村山崎北岡城主にして香西氏の部將なり、二子あり、長を又四郎と云ひ次を彦四郎と云ふ、天正十年十二月長曾我部氏十河城を攻むるの役、其軍に參加し戰沒す。長門守は中間鄕の押領使として、延喜の昔菅原道眞公に仕へし秦久利の後なりと云ふ。

久利三郎四郎

は久利長門守の子なり、天正十年八月五日香西伊勢馬塲合戰に先鋒として參加す、同日銃彈に中つて戰死せり。

久利又四郎

長門守の長子なり、天正十三年五月香西氏香西を引揚げ長尾へ移る時、謀議に參加し善後策を爲せし人なり。

觀音寺景全

香川信景の弟觀音寺村を領し之に城て居る、因て觀音寺景全と云ふ。景全は天正十年十月中旬土佐元親の軍に加はり十河存保を攻めし時其軍に參加す。

晃全

名晃全、號野水、讃人、曹洞僧、永平寺三十二世、○延寶四年誓を立てゝ高僧傳を編輯す、十年にして百五十卷を成す、即ち僧譜冠字韻類百五十卷あり。元祿元年刻成る同六年二月廿四日沒す、年六十七。

廣育

名廣育、號佛朔又朔道人、小豆島僧本八幡寺住僧○京師に遊び書を以て宮家に仕へ又俳を能す、天保十四年十二月沒す、○碑陰の句、山陰や續く聲なき小夜千鳥

觀辨

名觀辨、香川郡觀興寺僧、○歌を能す、寛正元年西行六百年忌追善集に八十首入る。

頑石

は姓矢野德巖和尙の從子なり、木田郡三谷村犬馬塲の人、幼にして德巖に從ひ修學し一宗の奥義を究む、見性寺第十八世の住職となり、後辭して享保十年十月二十八日龜山自性庵に閑居す、延享三年三月十七日同庵にて遷化す。書畫に巧みなりき。後人寸紙の書畫と雖も尊ぶ。

鶴嶺

號鶴嶺又梁山、文化頃高松僧、○畫を能す、畫譜に出づ。

鶴州

土佐派の畫家なり、住吉廣道の次男、通稱內藏允、初名廣次後に釋門に入り法名を鶴州(靈芝)と號す、元祿元年英公に招かれ高松に來り自性院に住し、享保三年祥福寺に住す、甚た聾なり、父の畫風を慕ひて佛像人物花鳥等を能くす、就中鶉をよく畫けり享保十六年正月元日沒年八十二(扶桑畫人傳)同十五年正月寂す、年九十餘。(一說)

久米榮左衛門

久米通賢は通稱を榮左衛門と云ひ、其祖市郎太夫は生駒壹岐守の與力を勤めて居たが生駒氏滅亡の後降つて農となり、數代を經て今を去る百四十餘年前榮左衛門大川郡相生村馬宿に生れたが幼にして、奇才を抱き粘土を以て禽獸虫魚の形を製し、人々を驚

嘆せしめ獅子及熊の製作に至つては其技神に入り、時の人呼んで獅子熊と稱するに至つた、七歳の時水夫に伴はれて大阪に遊び間五郎兵衛重富に從ひ曆算學を究む、藩主松平頼襄公は早くも其の才を奇とし命じて土偶を製作せしめたが、深くも其數學的奇才を愛で江戸に派遣し數學の研究に從事せしめたり、享和二年通賢二十三才に達したれば家名を相續し直に舵師となつて長崎に航し、蘭人某に就て蘭學を修め、寛政年間數種の望遠鏡を製作し觀測に要する各種の器械を作り、鋭意觀測に從事し遂に渾天機測午中密器を製作して藩主に献じたを手初めに當時西洋の發明家と雖も未だ其理を究めざる時辰機納凉機地球機等を發明したが、後文化二年幕府より四國海陸測量の命を受け明細なる地圖を製して之を獻じ、次で又蘭法の砲術を極め各種の銃砲を製作したが、尚これに滿足せず文政十年地雷火及水雷火を發明して世人を驚嘆せしめた。其他文學の素養深く彼の天文數理兵器に關する著書あり。彼の事業の主なるものは坂出鹽田の開墾にして、當時坂出は芦荻茫々の一閑村たりしを藩主頼恕公に献言して、文政九年三月より同十二年八月に至る四ヶ年間を費して約二百五十町餘の鹽田を造り、國富を增すこと夥し、爲めに藩主より二百石の祿を賜はりしことあり。天保十二年五月七日沒す、年六十二、著書今切港再築始末覺書等あり、雅號を一器と云ひ餘技墨竹を能くす、大正十三年二月十一日正五位を贈らる。

久保蟲齋

名泰亨、字仲通、號蟲齋（チウサイ）、通稱二郎右衛門、讃人、父は大倫、○芝山に學ぶ又江戸昌平黌に入り安永八年一橋儒員となる、詩文に長ず、天明五年十月十九日歿す、年五十六、私謚正敬、墓は江戸千駄谷瑞圓寺にあり、學友栗山之に銘す、○栗山集に、仲通保都講とあるは此人也。

久保城山

名嚴、字伯容、又字有翼、通稱初直助、後左輔、號城山又白鹿山人、堂號從容堂、高松人、○安永八年講道館儒員、寛政二年八月歿す、○栗山の友にて牢村の師なり、牢村集に先師城山とあり、○子熊次郎裕といふ。

久保世擇

名世撰、字子善、通稱富三郎、高松藩士、○高尾竹溪同時人、小橋道寧の親友。

久保大倫

名大倫、通稱嘉七郎、高松藩の時金藏手代を勤む、盡齋の父なり、○詩文を能す、安永四年八月歿す。

久保蕺谷

名世篤、字忠貞、通稱直躬（タヽミ）、號蕺谷、高松人、○沖堂に學び詩文を能す、講道館儒員後師範學校教諭となる、明治三十四年十二月十二日歿す、年六十二、○牽牛花を植ゑ園を日新園と號す、○著書、快適樓詩文鈔、○白峰途上、松間一徑帝陵賒。倦脚遲遲日欲斜　誰道山鵑默無語。滿山鮮血杜鵑花。

久保桑閑

名方穀、號初得水後桑閑、通稱專右衛門、宜彥の子、古高松人、○和漢學に通じ詩文書俳を能す、天明二年十月七日歿す、年七十三、墓は碧海撰文、○山田郡古高松津村鑒（スキ）塚銘は桑閑の撰。

久保清保

名清保、通稱齋兵衛、後改稱新八郎、古高松人、○歌を友部氏に學ぶ、明治十八年一月歿す、年八十九。

久保梅亭

名盛仁、通稱仲三郎、號梅亭又晩年梅翁と改む、山田郡古高松醫　○經史を東畯絹洲に、書を馬嶺に學ぶ、明治十六年九月歿す、年六十三。

久保太郎右衛門（事業家）

久保氏は阿野郡萱原村（綾歌郡瀧宮村大字萱原）の人、諱は太郎右衛門と稱す、延寶四年二月二十四日同村に生る、稟性聰敏、沈勇仁慈行爲頗る多し、殊に公共事業に熱中し爲めに業半にして縲絏囹圄の身となりしことなるも堅忍不拔、遂に克くその大業を成就せり、是れ萱原村、瀧宮村、陶村に跨がる五百有町歩の灌漑水堀鑿のときにして實に水道三里十八町その間峻岳溪谷を開きし一大水利事業のときなりき、之の事業を初むるや擧けて私財を投せるのみならず、妻子又四里の間を金比羅宮に幼兒を携へて日參成功を神明に祈願する等の辛苦を經て竣功せるものにして、其の間高松藩家老大久保氏の力も與りて功ありしも氏の熱誠一貫の結果たるや論なし、之の他吉野川の氾濫を防ぎ又は川内原村に新池を築造し、香東川の水源を決して、高松城の東に流通せ

しむる等功績極めて多し、正德元年七月二十二日天年を卒ふ。鄉民その靈を大羽茂池頭に大久保大老と共に合祀し永く報恩德謝を爲す。

久保皓々

通稱辨二郎、月窓庵と號し俳句を能す、讃岐人にして、德島に住し明治十三年十二月歿す、年六十二。

久保精一

高松百間町の商賈にして號三醉々史、九岳、九老と號し詩書を克くす、明治維新前勤王に志し香水の子分となり運動せり、明治二年松崎澁右衛門の害さるゝや直に京都彈正臺に密告せし一人なり、後丸龜に於て印刷業に從事せしが大正七八年頃に歿せり、年七十餘才、晩年風雅の道に入り九忘醒一の名を以て揮毫せり。

久保利作

利作は中笠居村香西の人、現今村長縣會議員久保桑吉氏の父なり、利作、天性淸廉潔白、公共的事業に力を致す。嘗つて直島の一漁人、利作より網を借り一網數千万魚巨利を得たり因つて、貸料の他に千金を添へて返納せんとす、利作受けるを肯せずその金を香西小學校の基本金に寄附せしむ、其の子孫人望を受け囑望厚きは之れ祖先の遺德と云ふも過言ならざるへし。明治三十九年十二月十五日歿す、年六十六。

久保一簣

通稱始め孫三郎、後六兵衛と改む、大川郡相生村大字馬宿の人、○畫を好み初め加藤畔溪に學び後淡路靜村の人楳谷に學び能くす、○慈善を好み揮毫を需むるものあれば無料にて與へしと云ふ。明治廿六年十月七日歿す、年七十九、法名高勝院離塵一簣居士。

久保祖舜

通稱駒吉香西町久保泰助の末子なり、幼より穎悟嶄然頭角を顯はし和漢の學に通し、書は王右軍の筆法を學んで能くす、明治三年高松藩議事局へ召出され士籍に列せられ同十年香川郡笠居村中山校敎員となり、同二十年香川郡勸業委員となり農事改良に盡瘁す、氏は天性器用はだにて詩歌俳句繪畫等も能くするを以て、明治卅八年頃より高松市濱の丁に工場を設け、我が獨得の技術を以て寒霞溪燒なる陶器を製し後之を屋島

燒と稱せり、本品は高麗燒の光澤と交趾燒の雅致あり、世に珍賞せられ縣特產品の一つとなり、今に至る迄屋島土產として盛に賣出され居れり、氏も本器の製造に熱心に從事しつゝありしが、大正十年四月二十七日八十の高齡を以て逝けり。

久保不如歸

通稱財三郎、初め月麿後不如歸庵不如歸と號す、木田郡古高松村の人、壯時は板垣伯の自由民權說に共鳴し活動せしが、後ち心機一變俳道に心を寄せ、初め尾張の黑田甫に師事し故貴族院議員森山鳳羽(茂)とは俳道の親友として、時々俳諧を贈答せり、往々佳句尠なからす屋島惣門の碑に左の句あり。大正三年八月三十一日歿す、年六十六。

幸かさね、南山曲、山里百韻、壽永等の著書あり。

夏草やこゝにも一つ髑髏(どくろ)

久丸富久一郎

小豆郡四海村の人、幼名常次郎、錦水と號す、土庄村大森伊左衛門の二男なり。來つて本村小江九富久兵衛を襲名し、銳意父業の素麵問屋を經營せしが後ち醬油釀造業に轉す。明治三年久一郎と改名し、七年郵便事務の開始に際し其取扱を命せられ、同十九年更に小江郵便局長に任せらる。勤續すること殆んど三十年其の間愛媛縣會議員に當選するあり、小江村戶長に任命せらるるあり、其他種々の名譽職に推選され終始勤勉誠實にして克く衆望に負かさりき。同卅七年郵便局長辭任繼嗣之れに代りたるを以て悠々自適晩年を樂しみしに、同卅八年九月廿三日永眠す。年六十七。(小豆郡史)

國方柴溪

名春熙、字世華、號柴溪、津田人、○文化頃詩書を能す、○書譜に國春熙とあり。又同譜注に紫溪とあるは柴溪の誤

國方賢近

名賢近、文化頃東讃人、○歌を能す。

國方魯齋

名文啓、通稱逸民、號魯齋、屋號出羽屋、高松人、○小笠原流禮式、又習字を敎へ、歌を詠ず、安政五年七月歿す、年七十九。

國方長村

名義全、通稱清平、號長村、寒川郡長尾人、○書を能し、風流篤實にして篁山と交る明治二十六年十二月歿す。

國方直綱

字は子直、寒水と號す、寒川郡津田町の人、藤川三溪に學んで詩文を能くす、安政頃の人。

庫本惠範

小豆郡草壁村久右衛門の五男にして、文化十三年四月十日年十三にして本郡二面村誓願寺法印玄叡に師事して授戒す。年十九歳にして隣村吉野村正法寺住職となる後ち學に志し、同寺を去つて決然高野山に登り大に勉勵す。院主亦之を重用し漸次職を進めて遂に庫藏院に迎へられて之が住職となり。六人の徒弟を養育するに至れり、明治十二年三月廿一日一躍して寺務檢校法印大和尙の榮位に昇進す。明治廿一年十二月廿五日病を以て卒す。行年八十五。

（小豆郡史）

日下乙井

名奉演、通稱義左衛門、號屏山又乙井、高松藩勘定奉行を勤む、漢詩及俳句を能くす安政三年二月廿日沒す。

日下桐齋

名奉仲、通稱義平、號桐齋又梧竹又石崖、又石洞、高松藩士、○木内翠亭に學び山水蘭竹に長ず、明治二十九年六月歿す、年四十九。

日下好子

翠月と號す高松の人、桐齋の第一女なり、岡田玉翠に學んで書を能くす又和歌は有岡赤松の二師に學び調舍會員たり、大正十二年十月十五日歿す、年五十九。

日下聖洲

諱は逸、字季休、通稱如平、聖洲又は老梅とも號す、小豆郡草壁鄕片城村の產にして恕伯翁の第四子なり。故ありて箕裘を繼ぐ、性頗る風流にして詩書を能くし、その人

となり正道質實たり、京都川越佐洲の門に入つて醫を學び後國に歸り醫道を行ふ、村民の請により里正となりしこともありしが、明治四年季冬十日卒す、享年七十四、土之庄村村崎氏を娶りて男賴太郎ありしも性來多病にして夭折せしかば、神浦大奥氏の嫡孫を養ふて嗣となす。

辭世

修レ家附二天命一　那慕浮雲榮　不レ忘二生前苦一　豈留二身後名一
將レ終人言善　臨レ死鳥哀鳴　經濟無二功業一　魂還元氣清

日柳燕石

名は政章、字は士煥、通稱長次郎又赤松劍吾、又日柳浩吉とも稱す、燕石は其號なり又三白、半樂、入獄しては安樂居とも號す、又別に柳東と號す、那珂郡榎井村に生る父を總兵衛と云、故草薙を氏とす父に至り日柳と改む、初叔父石崎近潔に從ひ後三井雪航に就き經史詩文を學ひ又紅洲に書を學ひ四君子を能くす、人と爲り氣節を貴ひ然諾を重んず、人の緩急に赴く己の死生を顧みず常に壯夫を養ひ、自ら棟梁と爲り樗浦を事とす、蓋其跡を晦すなり米艦の浦賀に來りしより海內漸く騷擾す、是に於て切齒扼腕して曰く皇室陵夷幕府驕肆外夷其隙に乘す、是志士身を殺し仁を爲すの秋なりと萬延元年三月水藩十七士の井伊大老を櫻田門外に刺し、尋て安藤閣老亦刺客に坂下門に遇ふや是より佐幕開港尊王攘夷の說兩々相軋り天下愈々鼎沸す、是時に當て尊攘の志士桂小五郎、谷潛藏、吉田寅次郎、日下部伊三次、伊藤俊輔、井上聞多、西鄕吉之助、小松帶刀、大久保市藏等と東西奔走沈謀潛略する所あり、其後谷潛藏、桂小五郎品川彌次郎等各藩の容れさる所となり來て燕石に倚る、是を以て幕府の嫌疑を受け慶應元年五月高松藩の獄に下り幽囚四年なるも敢て其操を變せず、獄中に在て常に時事を痛論す、皇運中興に際し明治元年正月出獄することを得たり、明治元年五月京都に入るや朝廷優詔を以て天杯を賜ふ、乃ち徵士木戸孝允と共に命を受け、鎭西に赴く當時北越の賊軍勢最猖獗なれは大將軍仁和王勅を奉し之を討つ、乃ち其記室と爲り同年六月京師を發し越後國柏崎驛に滯陣す、同年八月病て陣中に沒す、享年五十三、絕命の詩あり曰く、錦旗已移新瀉東。病夫一枕臥二秋風一。朝來嗽レ口遙相拜。只禱吾王早立レ功。仁和王之を憫み諡を賜ひ大櫻定居彥と云ふ。明治二十四年九月靖國神社に合祀せられ、同三十六年十一月正五位を贈らる。

（香川縣史）

著書

象山雜詞、十春詞、柳東詩話、雜話、呑象樓雜纂、金鄕春夕榮、柳東略稿、山陽詩註、捫蝨餘話、皇國千字文（以上二書獄中作）、柳東遺稿（出獄後晚年作）呑象樓遺稿

等あり、日柳燕石全集、梶原竹軒以上の諸書を蒐集し附するに傳記を以てし、大正十二年八月出版したり。贈從四位日柳君追思碑、榎井町有志篠原幸吉等相謀り大正十年十月同碑を同町春日神社境内に建設したり。

日柳三舟

名は政愬、字は終吉、通稱道之助、號を三舟又玉城と云ふ、燕石の子なり、天保十年七月十四日榎井に生る。幼より穎悟初め富山凌雲に就き詩文及醫業を學び、後京都に至り醫學の傍ら詩文書畫を學び皆能くす、元治頃歸りて榎井に於て醫を開きしが明治維新の際陸軍省に召され屬官となり、後大阪府學務課長に轉じ師範學校長を兼ね教育興隆に盡す所あり、後退て府下北桃谷町に住し浪華文會を興し、教科書を刊行し又一面候鯖詩話なる雜誌を發行し、詩學の發展に資し花月を友とし悠々風雅の道に遊び居りしが、明治三十六年七月廿三日歿す、年六十五、著書覆甕小稿等あり。

政愬

述懷（明治元年京都にての作なり）

としのうちに、雪降さとへ、かへらむと、おもふたひちに、はるは立けり。

栗原連峰

號連峰又鶴山、天保頃高松人、○歌を能す、○木村重成、白玉は碎けて失せぬれど光は世々に消せざりけり。

熊岡員美

名員美（カズヨシ）、通稱新六、高松藩士、竹内與四郎の弟、熊岡氏を嗣ぐ、○歌を能す、文久二年閏八月歿す、年五十。

窪川春林

號春林、高松藩儒臣、○元祿頃、十河順安雨森三哲等と同時に仕し人なり、○江戸にて林家に學ぶ、林信充、林信言詩序に載せられたり。

窪田白山

本名祚連、名瑛、號白山又蕉堂、亭號松岡亭と稱し、文政頃高松人、○書を能す、書譜に見ゆ、竹石門人ならん。

熊野篤次

は高松市の人、雅號を竹迺下馬彦又拾伍軒と云ひ、幼より穎悟にして文學を好み常に稗史小說を繙き居りしが、長じて琴平明道館に入り和漢文學を研究し得る所あり。雅號を又叫猿舍巴峽とも云ひ軟文學を能くし、石清尾神社を始め各社祭典の囃し歌などは大半氏の筆になる者多かりしと、後香川新報記者となり文筆を以て世を指導し、操觚界のため盡す事多年なりしが可惜大正十三年五月八日病歿せり、享年六十四。

菅原道

小豆郡下村の人、家もと草壁鄉の大里正たり、夙に中桐星城に從ひて學を修め、天才の發露同輩を拔く明治十年に草加部村長に推され治績あり、後縣會議員として貢献せしことあり、性磊落放膽また能く談ず、晩年家業を整理して蓄財せるも大正五年俄かに病歿す、享年六十三。

草薙篁齋

通稱唯吉、號篁齋、文政十二年仲多度郡郡家村(又多度津)に生る、幼名助三郎と云ふ家世々農を以て業とせしも幼より繪畫を好み、二十才の頃丸龜に至り村田雲和、鮎川一雄に就き學ぶ、中年諸國を遊歷し研窮を重ね斯道益々上達し最も花鳥山水を得意とす、又測量術に達し筆硯を提げて巡遊の傍ら四國地方は悉く測量したりと云ふ、明治三十八年一月十五日沒す、年七十六。

草薙琴水

通稱勘三郎、名源與、號琴水、阿野郡岡田村の人、岸岱に學び龍虎を畫くに巧なり、明治二十八年十二月廿九日歿す、年六十八。

草薙琴泉

岡田村の人、本姓は西福寺盧田氏の子出でて琴水の嗣子たり、素より多藝にして養父に學んで岸派の畫を能くし、傍ら和歌、俳諧茶道等を能くし、明治十八年推されて村會議員となり令名あり、大正四年十二月十七日京都に於て病沒す、年五十六。

黑田綾山

名良甫(略して良とも云ふ)又應祥とも云ふ、字忠良、號綾山、高松田町の人、○畫初福原五岳に學び後林閬苑に學ぶ、最も人物に長ず、丹波笹山侯に聘せられ後備中玉島に住す、文化十一年四月沒す、年六十。○又歌も詠む、月下獨酌、月影のさす杯をく

む程は濁れる酒もすむ心地せり

黑瀨　敦

字士厚、號松渚、丸龜の人、藤川三溪に學んで詩文を能くす、安政頃の人。

黑木茂矩

諱は初重矩後茂矩、字子芳、通稱倉太郎、薫圃又蟬齋と號す、樛舍（クカノヤ）と稱す、家は世々吉野村大宮神社の社家なり、天保三年吉野村に生る、幼より篤學にして四里の道を遠しとせず、毎日櫛梨村に至り秋山巖山に和漢學和歌を、燕石に漢詩を學び兩氏の訓育を受け、勤王の志厚く尤も和歌に長ず、明治二年三十八歳の時高松藩講道館の教官となり、後上京して教部省の宣教師となり、神道教導職となり大いに敬神の道を說き又琴平宮の禰宜となり、後辭し高松に移居して私塾を開き此を盈科義塾と稱し育英に從事せり、明治三十八年九月廿六日沒す、年七十四、著書樛舍諄辭集二卷、和歌集一卷憲圃詩文集二卷あり。

○象　山

鵲象題畫嵐二樓宸。來入三名山一了三宿因一。長夜漫漫呼不起。遺篇一枕却驚人。

○筆　はしたなく書きな流しろ人心深さ淺さの見ゆる水莖

黑木欣堂

諱は安雄、字は武卿、欣堂又著園と號す、良野村大宮祠官茂矩の子なり、幼より敏悟年十三四歳にして詩文を作る、長して帝大古典科に入り、業を卒へて東京師範學校の講師となり、後香川縣工藝學校々長となり、後辭して東京に上り帝大及美術學校二松學舍等の講師となり育英に盡し、傍ら書畫篆刻等の藝術に從事しつゝありしが、大正十二年八月越中高岡に於て沒す、年五十八。著書、本邦文學の由來、讃岐史要、讃岐史談、日本史談、支那歷史、奉賀東京華燭慶典表、讃岐國十二勝景圖記、大日本史教授案。

化龍友

白鳥の俳人竹内氏。

化

川島の俳人、安政頃の人。

灌圃

白鳥の俳人武内氏。

ク號索引

黄龍（田中）　鶴渚（堀田）　鶴遊（福家）
關雪（横山）　華陰（良野）　快堂（合葉）
玩翠（寛　）　鶴洲、鶴嶺、寛濟（神崎）　頑石、空海、觀賢、晃全（木村）
虞　（赤松）　光範（片岡）　廣夏（鶴洲事）
快行（敎存）　黄山（菊地）　篁村（安田）
君田（美馬）　槐菴（玉楮）　光鑑（鴎盟事）
君山（中村）　薫　（村上）　擴齋（吉田）
寛翁（尾池）　黄陵（竹石事）　快鑁（龍泉）

○ヤ之部

安富家

安富家の先祖は元東國の人にて、本姓は紀氏にて從五位上民部太夫照之と稱す、此の人武門の譽高く足利の隨身に拔擢され、元享の初から延元年に至るまで數度の戰功あり、暦應二年足利尊氏より播州三ヶ月郷を賜ひ、同地に居りしが其の後應安の頃足利義滿のとき細川頼之に從て讃岐に移り來て三木、寒川、大内三郡の内十八ヶ村を領し平木の城主となれり、先是三木高長沒して嗣なきを以て安富氏に賜ふ、照之から盛長まで八代の間は平木に居城せしが、長祿年間盛長の代に至り寒川郡の北部を分割して領地を增加され、雨瀧城を築きて茲に移轉した、斯くて照之の後を相續した八代の城主は左の八氏なり。

左近將監照倍、玄蕃頭盛後、左馬頭運由、木工頭長景、圖書頭之盛、主計頭照孝、造酒頭盛範、此の盛範の子が盛長なり。

而して盛長の子盛正、其の子盛方、其の子盛定の四代を經て滅びたり。

盛長

山城守と稱す、盛範の子にして長祿年間に至り雨瀧城に築きて居る（志度に出城あり）應仁頃は細川勝元四天王の一人として京都に出で勢力を振ひ居たり、應仁の亂勘解由小路合戰記中七月四日頃に香川肥前守元明、香西備後守元資、安富山城守盛長を始として兵卒五萬餘人を以て八方を打圍み云々と見ゆ、盛長は長祿四年社家奉行として一宮神社の壁書に署名し居れり、因に雨瀧城は大川郡富田、津田、神前の三町村に跨りて海拔九百六十尺あり、此山の頂上に本丸の趾と覺しき地あり、周圍五十間ばかりありて松樹生茂り現今龍王祠を鎮座す。

盛保

盛保は盛長の子か又弟なるか此間系統不明であるが、時代は永享年間の人である。大川郡史、長福寺の條下に永享年間雨瀧城主安富盛保當寺の本尊を特信す云々とあり又長錄四年制定の田村神社の壁書にも盛長と共に此人が署名してあるのを見れば、兎も角相當な勢力家なりしと見ゆ。

元綱

は民部少輔と稱す、盛長の弟なり、石田城に居たり性勇猛にして活動家なりしと見へ細川勝元の倖臣となり、常に京師に在りて管領家の事を執行し畿内に采地を賜はる、南海通記には「元綱を讃岐の旗本として鴨部の城にあり」と記せり。民部少輔は應仁の亂には細川勝元に屬し、讃岐の兵士三千餘の兵將となり活動し遂に十月三日戰死せり其活動振は南海通記に據れば左の如し。

相國寺合戰記

大内介政弘大兵を率して上洛し、西の陣兵威强大になれば東の陣は構壘して固守す故に相國寺に築地を搆て塹を堀り、壘を高くして數ヶ處に樓臺を造り安富民部少輔元綱に三千餘人を屬し是を守しむ、猶も兵少ければ赤松、佐波、毛利、高松、宍戸吉川等の諸將を添て守禦を爲す、然る處に山名方より火を放ち僧房を燒拂ひ、畠山大内、土岐等の諸將其兵三萬餘人を引具し攻來る東の陣の諸將火災を避て混亂し、大敵を拒く術なく備前國の住人勝田次郎左衛門五百餘人を以て、眞先に進んで戰死す。次に讃岐の國の住人安富民部少輔元綱三千餘人を以て相國寺畑中に在て、大敵を禦き縱横に駈け破り奮擊して戰死す、元綱は執事勝元の倖臣にして太々の實檢使

を勤め數度の戰功を顯はし、高名の部將なれば東の陣の諸將不惜と云ふことなし。云々

盛正

は筑前守と稱す、盛長の子なり、此人は元綱の如き活動家でなかりしか又早世せしか事蹟の記すべきものなし、讃州府志に左の記事あり年代より推測すると此人ならんか永祿年間雨瀧城主安富又三郎は富田神社を厚く信仰し、大に社殿の造營をなしたりと云ふ。

盛方

初め筑前守と稱し、後豐公の號をさけ肥前守と稱す、盛正の子なり（西讃府志には元綱の子とあり之は年代に合はずいかにや）大永三年六月十八日安富氏は寒川氏の常憐城（長尾名池内にあり）を攻め寄來る兵士數十騎を討取る、是を俗に塩木合戰と云ふ。天文九年正月二十日安富肥前守一千餘人を率ひて富田、石田表に發向し、同四月二十六日長尾に於て合戰に及び、寒川氏の兵士大半戰死し殘卒本城を燒き書寢の城に入り三年間防戰せりと。天文二十年安富氏と寒川氏と和睦せり、盛方は結婚政略により勢力を張らんとして元龜元年阿波の篠原紫雲が女を納て妻とす、時に寒川氏とよからず因て大内郡を得んとす、是に於て紫雲に請て細川屋形に謀り寒川氏をして、大内郡を細川屋形に奉らしむ、遂に大内郡を取りて矢野駿河守をして攀山の城を守らしめ、虎丸城を盛方に與ふ、因て元龜三年盛方虎丸に移り其老臣六車宗湛をして雨瀧城を守らしむ、さる程に篠原氏屋形と隙あり、三好長治不意に其居城川島に押寄せ攻滅しければ盛方女婿たるにより三好氏と怨を結びし故矢野駿河守、安富氏を滅さんと圖る由聞えければ盛方安からず思ひ窃に、虎丸の城を老臣六車宗湛に委ね播磨に渡り黑田氏に依て織田氏に屬す、天正六年信長十河存保をして三好氏の後を嗣がしむるにより、盛方存保に從ひて國に歸り雨瀧の城に入りて居れり、十一年元親引田より軍を移して雨瀧を攻む、盛方破れて一子權左衛門を引連れて小豆島へ逃れ、其れより又播磨に渡り黑田氏によれり、因て其子を質として豐臣公に屬し自ら名を肥前守と改む。豐公南海征伐の後未だ封を復さずして、天正十四年十二月秀吉公の命を受け、九州島津征討軍に參加し同月十二日豐後の利光川にて討死す。一說盛方は黑田孝高の手に屬し天正十二年十一月淡州由良城を攻むる時戰死せり。（南海通記）

盛定

は權左衛門筑後守と稱す、少時豊臣氏へ人質となり、黒田氏の許に居りしが天正十四年黒田氏に筑紫の戰に從ふ、黒田氏此役に大功あり封を豊前中津(十二萬石)に受く權左衛門與りて力あり、因つて祿するに三百石を以てす、然れど陪臣たるを耻ぢて受けず、其の母は阿州篠原彈正入道紫雲の女にして、京都東本願寺に內緣ありしかば其の母に從つて東本願寺に寄食して世を終りしと云ふ。

安富右衛門太夫時氏

大川郡富田西村の城は時氏の築く處同氏自息又八郎貞正居之と古城史に見ゆ。

安富家の一族

安富家には左の一族あり

文明十二年十一月寒川氏が三谷氏を攻る時の記事中に、安富筑後入道知安は寒川氏が緣者なれば此事を聞て大に驚き云々とあり、盛範の事か又は其兄弟ならんか、長祿四年十二月細川勝元が制定した一宮神社の壁書に、嘉吉年中安富安藝入道、長祿年間に安富筑後入道智安、安富山城守盛長、林參河入道宗宣、安富左京亮盛保等の名が見ゆるが此中で盛長と林を除いた餘の者は盛長の兄弟か又は緣者ならんか。

應仁元年五月合戰記中實相院攻口讃岐諸將中へ安富左京亮の名見ゆ。

山地小內膳

香西氏の部下にして天正十年八月五日土佐軍進入の時天神廓を守りし人、同日同所にて敵多兵を殺して死す。

山脇圖書助

香西氏の部下にして天正十年八月五日土佐軍香西へ進入の時天神廓を守りし人、同日同所にて敵多兵を殺して死す。

山口平左衛門

山口平左衛門は三豊郡神田の城主にして仙石氏の臣なり。天正頃の人。

矢野駿河守（來寓人）

三武と稱す、三好氏の臣にして四宮氏の後を受け引田城を守り居りしが、天正七年十二月戰死して引田城主なし其の戰績左の如し。

天正五年三月二十八日伊澤越前守、細川掃部頭と謀て其主三好長治を殺す、三武是を聞て主の仇を報せんとし兵二百を率ひて阿波國伊澤城を襲ふ、城中不意に敵來りし故狼狽して城門を開き戰へどもはか〳〵しき働もなく數千の兵潰散す、駿河守鎗を揮ふて三人を突きふせ城に入て火を放ち遂に越前守が首を取る、世に駿河守が忠勇寡兵にて故主の爲に仇を報せし事名譽なりとて評しあへり。阿波にて二十日伊澤と云ふ故主を殺して後僅かに二十日にして亡びたればなり。天正七年十二月廿七日駿河守阿波の岩倉の城を攻て、元親が臣美馬藏人と戰ひ討れて死す。

山地右京進

はもと甲州人なり、細川氏に從つて來り多度、三野、豊田の旗頭として詫間に居城せり、後九郎右衛門なるものの代に至り三木郡池戸城に移り十河氏の麾下となれり、其祖先の讃岐へ來りしは應永の末年頃ならん。

山地九郎右衛門

は右京之進の後也、九郎右衛門の時に至り故あり城邑を失ひ、三木郡池戸城に移り十河氏の麾下となれりと、年代は永正頃ならん。

山地志摩守

三木郡池戸中城の城主、永正三年鄕内應神山妙福寺惠德院を再興し、八幡宮を尊崇せし人。

山田藏人正時

香川郡大野村北條の城主にして、天正前の人ならん。

山田彌七

羽床伊豆守同姓の臣にして天正七年春土佐元親が羽床氏を攻めし時、謀議に與り善後策を講せし人。

山内源吾（來寓人）

土佐長曾我郡元親の臣にして天正八年より同十年迄西庄城を守りし人にて、同十三年元親豊臣氏に降りしかば同年五月土兵を率ひて歸る。

八倉彈正

香川氏の臣にして三豊郡粟島城を守りし人なりしが、天正中敵兵(蓋し土佐方)に燒れて滅びたりと云ふ。

山崎宗鑑　(來寓人)

は佐々木隱岐前司義清の末裔にして江州支那(栗太郡常磐村)の人、初め支那彌三郎範重と稱し、將軍足利茂尙に仕へ信任せらる、延德元年三月二十六日義尙鈎里の陣中に薨ぜしかば無常を悟り致仕薙髮して尼ヶ崎に隱る、後城州山崎に移り油筒を賣り世を過しける、因て山崎氏を稱し同地に草庵を結び、對月庵と號し風月を弄び居れり、性滑稽に富み俳歌を好み殆んど寢食を忘るゝに至る、晩年西國に行脚し歸途(元和二年五月頃)此地興昌寺の僧梅谷(第三代住職曾て京都東福寺に在る時宗鑑と知己となれり)を尋ね來り、享祿元年此所に草庵を結び止住し、同好來訪者あらば與に遊び戲に壁に題して曰く「上は去に中は日暮し下は夜まで一夜泊りは下下の下の客」此を以て賓友を待するの法と爲す客を留る一夜を過さず、因て一夜庵と號す、此時享祿元年なり或時一童子來り一句を賦せん事を請ふ宗鑑聲に應じ筆を走らし、「滿まると出ても長き春日哉、と書き與へしかば童子大に悅び之を懷にし去る、明日復梅花一枝を持來り句を求む宗鑑賦して曰く「種(ウエ)そめし種子や一粒萬梅花」と書き示しければ童子感心して曰く佳哉一日君が手を貸し給へとて遂に辭し去り、明日復來り一卷の書を示せるに吾が書に少しも異ならず童子曰く、余は菅神なり自今子の書を藏する者は其家火災なし余神力を以て保護せんと遂に見へず、宗鑑愈々益驚嘆し屢々夢に佳句を得樂て風雅の吟懷を洩し居る事二十有餘年、偶々癰を病みて天文廿二年十月二日沒す、年八十九。沒年諸說あり西讃府誌は天文五年正月廿四日沒年七十二となし、滑稽太平記は天文廿一年八十五となし、俳家大系圖は天文廿一年八十九となせり、墓は一夜庵の側に在り著書、犬筑波集其他あり。

辭世　宗鑑はいづくへいたと、問ふならば、用が出來たで、あの世へといへ

一夜庵は大正三年を距る、實に三百八十七年前の建造物にて其後延寶九年寬保三年修繕を加へたるも、聊か舊体を損せずして現存せり、興昌寺寶庫には法師遺愛の足利家より拜領せる銅雀臺の瓦硯及び岩壺花瓶、自彫木像一軀遺墨、興昌寺本堂再建勸進帳一卷、小軸二幅短冊一葉等の什物を藏せり。

山崎氏

山崎氏は寛永十八年西讃に封せられ、多度、三野、豊田、那珂郡内の中府、鹽屋、津森、今津、田村、山北、金倉、櫛梨、佐文及び鵜足郡内の土居村を合せ五萬三千石を領し、丸龜に居城せしが家治の子俊家、其の子治賴の三代十七年で國除されたり、其小歴左の如し。

山崎家治甲斐守と稱す、寛永十八年九月肥前富田より當國丸龜城を賜ひ、多度、三野、豊田及那珂郡の内地方、柞原、中府、津森、今津、田村、塩屋上、金藏、櫛無上櫛無下、佐文買田、宮、追上、上脇、新目大口後山帆山生間鵜足郡の内土居等の各村を併せ五萬三千石を領す。慶安元年三月十七日卒す、享年五十五。子俊家其後を受く。

山崎俊家志摩守と稱す、慶安四年十月二十八日卒す、在職四年、享年三十五、子治賴繼ぐ。

山崎治賴虎之助と稱す、明暦三年三月六日卒す、在職七年、享年八歳、嗣なく後絶す。

丸龜城代として幕府より代官多々羅尾久右衛門、今井彦右衛門、目付下曾根十三郎仁賀尾内記等萬治元年三月二十五日まで山崎氏の舊治を管理す。（香川縣史）

八木龜女

小豆郡池田村の人、本村中山、八木正作の祖先にして紀州路より其の父其の夫と三人連にて本島に來り、同村字小屋谷に假小屋を建て假居せしが後ち現今の邸宅に移る。正嘉正元の頃諸國行脚の一僧來りて痢病に罹り四ッ堂に臥す。當時龜女既に父夫に死別し、佛門に志あり。其の子大藏と共に家に迎へて晝夜看護に努む、暫くして病癒へて去る。後一年を經過して鎌倉執權北條時賴母子を召喚す。驚き至れば即ち前年の僧なり。母子の意外云ふべからず、時賴厚く當時看護の勞を謝し、報ゐるに河山村（現今の中山）一村の地を以てせんとす、龜女固辭すること再三遂に同家の宅地を賜ふ後證念なるものと此地に關し爭ひを起す、因て再び鎌倉に至り時の執權時宗公に訴へ勝訴となり、下文並に刀大小を拜領す、歸途京都に立寄り落髪して尼となり、佛師に命じて己が木像を作らしめ四ッ堂に安置す。其後四百餘年を經て、寛文六年大阪町奉行の役人衣斐杢左衛門來り木像を見て龜女の由來を聞き十六夜日記の阿佛尼に比して念々佛と謚し、之れが緣起を作る、今尚同家に存す。（小豆郡史）

八代田四郎兵衛

小豆郡淵崎村八代田四郎平の長男なり、明治三十八年京都帝國大學理工科大學採鑛冶金科を卒業し、直に平金鑛山採鑛課長となり、次で別子銅山次長となる、同四十年職を辭し、亞鉛工業視察の爲めに歐米各國を漫遊し、歸朝後大いに之を實地に應用し、斯道に貢獻せんとするに際し、偶々病を發し京都帝國大學病院に於て治療を受けしも遂に壯志を懷いて逝く、時に明治四十一年一月十九日にして、享年三十歲なり、墓碑銘は文學士山内晋卿の撰なり。

保井錦江

號錦江、大内郡三本松人、○畫沈南蘋に私淑す、明治初年歿す。

安原枝澄

名枝澄、通稱宗平、號南谷又三江、香川郡安原村の人、壯年より高松に來り晩年紺屋町に住す、俳句狂歌に長ず又風俗畫を能す、明治十九年十月歿す、年七十一、○木村默老に私淑し馬琴風の戲作を能くし、燕石の金鄕春夕榮に序文をかけり又讃岐名勝圖會に盆踊圖かけり。

安田放庵

東讃の人、名は燮、字は公和、詩酒頽放、自ら放翁を慕ふ、因て放庵と號す、牧詩牛の友人にして詩を能くし、五山堂詩話近人小詩集に入る、竹石展覽錄に安田篤村あり或は同人か、○妻尾崎瓠また詩を能くす、詩牛輯近人小詩の選に入れり。

三多齋

清泉白石小籬笆、一徑半穿二花圃一斜、詩卷堆レ床書堆架、時人喚做二韻流濟家一

山下忠吉

小豆郡苗羽村の人、もと備前國邑久郡晨濱村の產にして、幼より劒道を好み片山順次郎に就て一刀流を學び、佐藤雄太に事へて關口玉心流を修め、遂に其の目錄を授けらる。池田侯の老臣伊木長門守に仕へて戶川忠左衛門と稱し益斯道を磨き蘊奧を極む、慶應元年長州征伐に從軍し、明治元年伏見戰爭に加はり共に戰功あり。同三年武村長と改めて武者修行として諸國を巡り、同八年同國上道郡金岡村山下家に入夫し。山下忠吉と更め各地の招きに應じて多くの子弟を敎養す。二女あり長女は本村炭山高麗七に次女は四海村一田喜之助に嫁す故を以て同三十三年本村に移住し、地方の壯丁在鄕

軍人及警察署員等に擊劍の術を授く。同四十年二月二十七日老死す、年七十三。

（小豆郡史）

山内作兵衛

○三豊郡和田村の生れ、性堅忍不拔、殖産に意を注げり嘗つて大庄屋宮武德三郎の物役たり、當時同村は人口增加の割合に耕地少なく村民次第に困難す、是に於て村民を說き大谷山麓開墾の大業を起し、中途種々の困厄に遭ひしもよく初志を貫徹し、收穫米百二十六石五斗二升五合を得るに至り村民の欽慕厚し、明治十一年二月八日病沒す。

山口彌八

○小豆郡大部村の人、彌八麥（大部麥、小豆島麥）の原種撰出者にして、天明八年本村字野間に生る、農を本業とし木挽を副業とす。勤儉にして能く孝養を盡す、後分家して現今の山口勘十郎の家を立つ、十九歲の時一日所有畑を巡視せしに一穗の麥非常に善く成育せるを見て大に悅び注意して採集し、翌年之れを原種として栽培せしに發育特に宜しく、實色黑けれども長大にして味よく收穫も亦豊富なりければ益其の有望なるを認め栽培に改良を加へて他人にも試作を勸誘したり。其後此の麥種は本村は元より他村他郡他國に迄及び大部村にては之を彌八麥と稱へ、他村にては大部麥他國にては小豆島麥と稱し廣く栽培さるゝに至れり。明治元年十月廿五日享年六十九歲にして歿す。

（小豆郡史）

山上紀望

高松の人通稱吉次郎、和歌を能くす。天保十年正月十一日於考信閑歌會列席者の一人。

ひな鶴も君と千とせを契らんと御殿に高くよばふもろ聲

山下石舟

行戒と云ふ、多度郡堀江村の產、山下虎藏の男にして、嘉永五年八月十五日の生れ。書を村田雲和に學び後三備讃豫を遊歷す。

山下桂岳

清吉は通稱、香川縣の人にして山下伊右衛門（號後凋亭）の男なり、天保三年九月生る明治四年より北派の畫を冲庸（號冠岳）に學びたり。

山下　鶴

字は千年、號茶溪、西讃の出にして文化頃の人、詩文に達す。

屏風浦

路白沙頭碧水涯。白鷗飛過夕陽斜。煙巳抹三漁鄉一盡。僅剩松間賣酒家。

山下宗範

字公彝號霧山、西讃雨霧山下の人、牧詩牛の友人にして文化頃の詩人なり。

山井竹村

名は敬、字子德、號竹村、通稱量平、本姓中村後山井と改む、琴平の人、家世々醫を業とし金光院に仕ふ、詩文を三井雲航に學び秀拔と稱せらる、年十六、三豊郡詫間村に至り、富山謙益に就き醫術を學び後浪華に遊び、緒方洪庵に從ひ洋方を學て居ること三歲にして業大いに進み其塾監となり、名望同窓福澤諭吉の上に出づ、後聘せられて肥前大村侯の侍醫となりしも同列の嫉視を受け、辭して歸り又金光院主の侍醫となる、後仁尾村に至り開業し、傍ら硯田に依りて生活を爲しつゝありしが、時恰も西南戰役の起るに會し、陸軍省の徵に應じて軍醫となり盡す所あり。亂平らいて後辭して歸り再び仁尾の地に開業し、公衆の治療に努め居りしが肺結核に罹り起たず、明治十六年三月一日歿す、年五十。翁日常、柳東と親交あり、其贈詩に曰く。

泰西妙理太精明。嘖々人稱才子名。滿腹文章皆蟹字。醫家上能橫行。

以て翁の才學手腕の人に超過したるを證するに足るべし。

山下三友

名利忠、字子敎、通稱善次、號三友又水雲、高松人、○畫山水四君子を能す、明治三十六年十二月歿す、年七十一。

山内水竹

名玄孝、號水竹、○醫暇繪事を樂む、山水蘭竹を能す、明治廿一年十月歿す、年六十五。

山地花曉

通稱初七右衛門、後卯三郎、三豊郡仁尾人、○畫を能す、明治四十年三月歿す、年六

十一。

山地屏岳

名徵仲、通稱由喜次、號晴雲又屏岳又徵月、○仲多度郡龍川人、彌右衛門の子、○俳及畫を能す、畫は肥前人琴岳を師とす、又後佛典を修め僧となり徵月と號し敎導職に列す、明治三十年八月歿す、年七十三。著書婦道訓あり、長子健雄繼ぐ。

山地綾西館

名健雄、號綾西館、龍川人、徵月の子、○幼より俳を能し、後五木庵湖水、花本芹舍に學び名著はれたり、歸鄉して吟社を設け檀姿社といふ、大正二年一月歿す、年五十五。

山崎祐之

名祐之、通稱尙象、天保頃の人、○歌を能す、○木村重成、橘の香しき名に五月雨のふりし昔の忍ばるゝ哉。

山崎宗存

名宗存、通稱茂七、天保頃三木郡下高岡人、○歌を能す。○木村重成、明日よりは花橘に思ひ出てたれか我が身の跡忍ぶらむ

山崎宗矩

名宗矩、通稱初正六、後才八郎、高松人、○友部方升に歌を學び頗る達者なり、明治十七八年頃歿す。○木村重成、聞くも袖も思ふ袂も露深し若江に沫と消えし其身を○著書、言葉の大抵。

山崎東屋

號東屋、文化頃東讃人、○短歌長歌共に能す。

山川元輔(孫水)

諱○、字子晋、通稱元輔、號孫水、元大阪の人、雄駿の子にして儒學及算數易學に達す。中年の頃高松大工町に徙居して儒業及算術を敎授しつゝありしが、文政十年高松

藩に於て鄕校を立つるに際し、孫水をして其れを主らしめ四十年間教育に從事す、慶應二年三月九日歿す、年七十八。著書、矩合適等、吟稿等あり。
○矢野氏を娶り五子を擧げ、伯を賀と云ひ季を愼と云ひ其の余は夭死す。

山川愼藏（號東渠）

孫水の五男にして名は愼、字子固、東渠と號す、天保五年五月十七日高松市大工町に生る。漢學、數學、音韻學、歷數、學を父孫水に學ぶ、後大阪藤澤東畡の門に入り學ぶこと九年、學業大に進み經史百家に通す、後衆生に推されて塾頭となる、學成りて歸り兄南岡を補佐し家學を敎ふ　明治の初め鴨部鄕校、庵治鄕校長となる、兄南岡より家學を繼承し明治三十三年十二月二十日歿す、享年六十七才。資性溫厚篤實勤儉家道を治む、歿するまで每夕後十時まで研學に勉めたり。詩文に長じ三土梅堂、久保蘿谷等は詩友たり（三土梅堂は父孫水の門生たり）一男二女あり章太郎家を繼く、醫學博士にして東北大學敎授たり、長女は內木氏に嫁し次女は植田氏（檢事正）に嫁せり。
○自題眞影、眼光炯炯著紗巾。此是東渠迂叟眞。非佛非仙又非隱。太平世界一閑人
著書日本日郭勃注莊子書入本等あり。

山川賀藏（號南岡）

孫水の嫡男なり、文政四年七月二十七日高松市大工町に生る。父孫水に從ひ家學を修め兼て數學天文方位音韻學を修む。孫水の業を繼承し書生を敎授す、來り學ぶ者頗る多し、性重厚寡言篤學にして文選を暗誦するに至れり。明治二十三年十二月十六日病を以て歿す。家を東渠に讓り別に家を起し長女貞に羽原家より波次を配し家を繼がしむ。現に明善高等女學校長是なり。

山本正繩

新左衛門と稱す、高松藩士大御番を勤む、和歌を能くす、慶應年頃の人。

卯花綴
先懸てわれきく山の時鳥うのはなおとし着けるかひにや

山本重隆

字は子茂と云ひ、北峰と號す、寒川郡津田の人、藤川三溪に學んで詩文を能くす、安政頃の人。

和三溪先生感慨

人間萬事是耶非、自レ古英雄宿志違、夜酌二玉罍一梅馥郁、曉吹二鐵笛一雪紛霏、詩無二俗氣一心如恍、畫有高風與所レ依、窮達由來任二天命一、不レ妨群小謾嘲譏。

山内元民

名修字叔督、通稱元民、那珂郡松尾人、○京都齊靜齋門人にして詩文を能くす。

山口義次

字元禮、號柳水、宇足郡川津村人、藤川三溪の門人にして詩を能くす、安政頃の人。

山本隆平

小豆郡池田村の人、文化八年八月二十二日本村蒲生に生る、家は代々醫を業とせり。幼にして穎悟單身大阪に出でて大に斯學を脩め居ること年あり、鄉に歸りて業を開く小兒科產科は最も得意とする所なり、故に蒲生の子供醫者の聲遠近に聞ゆ又本業の餘暇平時好んで本草學を研鑽し、造詣深く見るべきものあり、明治十四年四月六日歿す年七十。

（小豆郡史）

山村周徹

名寬、字は子居、抱節と號し、通稱周徹、小豆郡橘邑河野周索翁の二男なり、年少にして京都に遊び、大亮川越先生に從學す、業成り鄉に歸る後坂手村山村氏の養嗣となる、只老母一人あるのみ仕へて愛敬到らざるなし、孝名時の縣會に達し褒賞さる。吟詠を嗜み若干卷を作る。明治七年四月十九日老歿す、年七十有餘。

山田鹿庭

名汝翼、字政輔、通稱初政助、後正助、號鹿庭、高松藩儒員、父は町醫者山田玄又、○經學詩文に長じ書を能し傍畫に及ぶ、天保四年三月致仕、七年六月歿す、年八十一○著書、山田鹿庭日誌、○某書に蕉雨とあり、亦一號と見ゆ。

山田梅村

名亥吉、字乙生、通稱勝次、號梅村、鹿庭の子、高松藩儒、○學識鑑識を具し詩文書共に能し、餘技篆刻畫に及ぶ、明治十四年一月十日歿す、年六十七、著書、吾愛吾樓小田園、梅花書屋吾愛五樓、三聖庵、瘦竹盧等の別號あり詩書體解要壽筵小錄等あり

三聖庵壽醯小錄は其華甲に係る、○栗林公園碑は其撰文

山田梅屋

名敬吉、字一卿、號梅屋、梅村の長子、○詩書畫を能す、明治三十八年十一月歿す、年六十七。

山田晋香

名尙俌、字人甫、通稱初輔四郎、次俌之次、號初梅庭後晋香、梅村の次男、○家學を承け又豊後廣瀨青村に學び詩文書を能し、稀に芝石を畫く、明治四十三年二月十二日歿す、私謚孝宣、年六十九、○屋嶋秋月、源平遺迹世空傳。山色依然七百年。回首豈無懷古感。一痕秋月淡於烟。大正十一年二月令婿濱田機遺稿を出版せり。

功績

舊高松藩儒員にして明治初年より師範教育に從事し、又高松高等女學校設立に盡力す等功顯著なるより明治三十八年香川縣教育會名譽會員に推薦、後退隱して高松市部會長たり、文墨を娛み居たりしも遂に沒す。

山田呆呆

名讓、字舜耕、通稱玄純、號琊臺、古香、呆齋、又呆道人、高松藩侍醫、文化十一年四月歿す、○畫山水風韻あり又詩を能す、○茶山集に呆翁竹譜に題する詩あり、○閨怨聞鵑、寶鴨香消夢易驚。啼雲蜀魄亦關情。憑君傳與閨中恨。飛到郎邊不惜聲。

山田玉峰

名汝明、號玉峰、愛一郎と稱す、鹿庭の長子、○詩を能す、享和三年早く沒す、○夢遊月宮、床頭鸞駕穩。飛度廣寒宮、天路攀丹桂。雲梯蹈彩虹。絃歌聲髣髴。冠佩影玲瓏。娛樂猶無極。曉風吹夢空。享和三年遺命して栗山の對相四言を刻せしむ。

山田政典

名政典、通稱政平、高松藩士、○曾て郡長又石清尾社司となる、歌を能す、明治四十三年八月歿す、年七十餘、○寄松祝、深綠かはらぬ松にふく風はかねて千年の聲や立つらむ。

山田撫松

名有秋、字士穡、幼名禎次郎、通稱初純安、次純吉、後純安に復す、號撫松、又字有禮又審卿、高松藩醫山田景純の孫、父は三純、○學漢洋を兼ぬ、漢學は沖堂に受く、明治三十四年七月五日歿す、年六十三、墓銘は晋香撰す。

撫松官歴

明治四年藩命により英國に留學し、同八年歸朝し工部省の技師となり、小坂、阿仁面谷等の鑛山を監督す、同二十年辭職して古川鑛業所に入り、其理事兼鑛務課長となれり。

過米洲沙漠

荒漠春深不見花。盲風掠地捲黄沙。火車一日走千里。道上纔逢三兩家。

山田六龍

名清風、通稱禮作、號六龍、山田郡西植田醫、○俳を能す、天保二年十月歿す。○旅立はもうよい頃や挑の花、人間の腹や鯨のすて處

山口春谷

通稱盛藏、號春谷又長松、高松藩士大阪藩邸詰、○書を能す、明治五年歿す、年八十四。

山田佐七

豊山と號す、元江戸吉原の人、十三歳の頃親族に伴はれて小豆島に來り清瀧山に滯留す、後鹿島に來りて讃岐屋に寄食すること有餘、一先づ江戸に歸り更に十六歳の頃六部となつて亦鹿島に來り讃岐屋に寄寓す、人と爲り沈毅温厚寡言にして謙讓なり、兼ねて學才を有し獨學自究、佛法を念じ佛書を研鑽す、法力顯著にして座らから世間の出來事を看破し、世人をして驚嘆せしむ、三十歳の頃土庄町に一家を建て四十歳にして寺小屋を始め地方の子弟を教訓す、常に貧者病者を慈みて衣食を分ち、自ら赤貧に甘んじ數日食せずとも貪らず、嚴寒單衣を纏つて平然たり、又夏夕竹籔に入りて修法練行の際籔蚊に刺さるゝも追はず、却つて動物の殺生を禁じたり、朝夕掌に油を注いで燈心を浸し火を點じて、神佛の獻燈となせりと云ふ實に非凡の奇人にして、地方民の崇敬仰慕淺からず、天保八酉二月五日鹿島上谷の寓所に跌座永眠す、時に年七十五

上谷山腹に一塔塚を立て眞光豊山と刻し、所藏せし經文其の他の書類を塚下に埋め側らに庵を建設して佐七庵と稱し其の靈を祭る、毎年八月六日を例祭とす部内各地より多數の參拜者ありと云ふ。

山脇法瑞

小豆郡池田村の人、本村蒲生高田長八より出で、保安寺第十五世の住職となり、大阿闍梨慧實と稱す、衆人に德を施し同寺の興隆を謀りて大に功績あり、且書に妙を得たり、殊に三社の神號託宣を謹書せしもの幾百軸ありて實に美蹟なり。老て聾す、明治廿七年六月十日遷化す、年七十六。

（小豆郡史）

屋島燒

屋島にて製する陶器にして其製陶家の初代林造は、初め平木村にて製陶し居りしか寛政年中今の地に移り、京師樂吉左衛門が弟子清兵衛なる者來り、樂燒の法を林叟に傳へ後追々精功の品を製陶するに至り遂に藩の燒物師となれり、子孫初代より林造を稱し隱居後は林叟と改稱す、現今は五代目に分れて二軒となれり。○初代林叟は寶歷元年を以て生れ、嘉永元年壽九十八歳を以て歿す、（三谷林叟を見よ）

柳原元愼

字伯修、號章齋、阿野北、坂出の人、藤川三溪の門人にして詩を能くす、安政頃の人。

柳原紫峰

名春樹、字芳雪、通稱三郎、號柴峰、屋號佐久良乃屋、高松人、父は富春、先代小西氏を稱す、文政五年柳原に復姓す、○漢學は半村に受く、欵乃一聲集は春樹校せり、○詩に柳柳洲とも欵す、柳洲は一號なり、著書、古風歌、延喜式神祇卷、御代之皷腹等あり、

寄玉祝

天地のかきりあらめや皇神のうみたまへりし大御國はも　春樹

柳川竹堂

名成興、號竹堂、三豊郡上高瀨人、○初秋山惟恭、後豊後廣瀨旭莊、青村、林外に學び歸りて善通寺に塾を開く、明治三十二年歿す、年五十九。

矢原正敬

は幼名松之助、通稱初め理右衛門後理平と改稱す、號西湖、諱は正敬と云ひ那珂郡吉野村の舊家なり、頴敏にして文學を好み皇漢學に達し、詩歌俳句花道をも能くし畫は土佐流を能くす、大正九年八月十八日歿す、年八十。

矢野部傳六（備　吏）

高松藩の土木家、我が讃岐は田圃廣く開拓せられ、平野連るも大河湖沼なければ旱魃の憂多し、故に爲政家は早く此點に留意して施設する所ありき、矢野部傳六の如き是なり、傳六は高松藩祖英公の臣にして、經濟地利の學に長じ水利を起し、田畑を開拓する所多し、殊に跛池四百有六を築造し、從來の九百六十に合するときは一千三百六十六を得たり、時は後光明天皇の正保二年のことなり、是れより旱魃の憂を免かれ民その恩德を敬慕すること限りなし。

矢野信厚

名信厚、通稱初健次、次權左衛門、權七、又平、高松藩士、本伏石寺嶋彌平次男矢野伊六の養子、○文化十二年徒士目付、文政五年正月歿す、○著書、歸道訓。

矢野竹舌

號竹舌、○畫を能す、文化頃の人、新撰書畫一覽に讃岐人とあるに姑く依る、或は讃人に非すといふ、筆蹟を見ると南畫なり、恐らくは伊豫人ならん。

矢野信[illegible]行

字公義、號藻溟、寒川郡津田村の人、藤川三溪の門人にして詩を能くす、安政頃の人。

野　艸

先得亭と號す、引田の俳人、安政五年玉藻日記を著はし發行せり。

蓬帆にさゝ浪光る春日かな

一說伊藤南岳の子、川島で歿すと。

ヤ號索引

養　浩（青葉）（伊藤）　彌右衛門（根　本）　養　通（荒　木）
安　藏（小　橋）　野　水（晃全事）　瑯　臺（山　田）
養　存（德巖事）　楊　洲（河　地）　養　三（荒　木）
約　齋（竹　井）

○マ之部

松平家

寛永十九年常陸下館藩主松平頼重公東讃に移封され、大川、寒川、三木、山田、香東香西、阿野北、阿野南の全部及び鵜足（今の綾歌郡の一部）那珂（今の仲多度郡の一部）二郡の一部にて十二万石を領し高松に居城した。而して松平頼聰公は明治二年六月十七日に土地人民を返上して、高松藩は十一代二百十八年にして廢され、左の家祿を松平家に下附されたり。

一壹万五百七十六石

(1) 頼重

字は英、諡英公、號龍雲軒、官位贈正三位左近衛權少將、父は水戸頼房、母は水戸家臣谷ヒサ、元和八年壬戌七月一日生、幼名竹丸又八十郎又右京、水戸頼房の長子、内室土井大炊頭利勝女万姫皓月院、在職元祿八年四月十二日逝去、壽七十四歳。法名龍

雲院殿雄蓮社大譽孤峯源英大居士、歴代三十四年。○歌を能す、龜山八景歌あり、屋嶋秋月、諸共に憐は空に知られけり屋嶋に殘る秋の夜の月、著書麓塵集あり、大正八年十一月十五日贈正三位。

(2) 賴常

字齊民、號南山、南嶺、謚節公、官位從四位下左近衛權少將、父水戸光圀、母水戸家臣玉井氏、承應元年壬辰十一月廿一日生る、幼名鶴松、內室酒井雅樂頭忠清女松姫本壽院、寶永元年四月三日逝去、壽五十三歳、法號源節公、歴代三十一年、書畫を能す○元祿十五年十月三木郡小簑瀑にて詠す、初時雨とのも著てみる小みの哉

(3) 賴豐

字亨、號龍山、謚惠公、官位從四位上左近衛權中將、父賴重孫賴候、母樋口中納言信康女七姫、延寶八年庚申閏八月廿日生、內室正親町實豐女豐姫栴檀院、享保二十年十月二十日逝去、壽五十六歳、法號高林院殿眞蓮社廊譽了然源惠大居士、歴代三十二年。

(4) 賴桓（タケ）

字子撥、號鷲山、官位從四位下侍從、謚懷公、父賴重曾孫賴熙、母家臣佐野イヨ、享保五年庚子六月十八日生、內室惠公女春姫春光院、元文四年九月十六日逝去、壽二十才、法號泰岳院殿高蓮社登譽安然源懷大居士、歴代五年。

(5) 賴恭（タカ）

字子敬、號白嶽、鵬雲、菅山、龜陰、謚穆公、父守山侯家賴貞、母守山家臣松本タミ正德元年辛卯五月二十日生、幼名帶刀又大助、實は水戸賴房の孫、元文四年襲封、官位從四位上左近衛權中將、內室細川越中守宣紀女初花姫後八代姫清操院、明和八年七月十八日逝去、壽六十一歳、法號白嶽院殿性蓮社明譽巍光源穆大居士、歴代三十三年文學を好む、嘗て藩士に江樓納凉詩を賦せしむ、著書就封詩文稿あり。

(6) 賴眞（サネ）

字子實、號南海、官位從四位下左近衛權中將、謚定公、父賴恭、母細川越中守宣紀女初花姫後八代姫清操院、寛保三年癸亥正月廿三日生、內室紀州大納言宗直女初悅姫後

薫姫と改む永昌院、安永九年三月五月逝去、壽三十八歳、法號瑞麟院殿春蓮社陰譽義德源定大居士、歴代十年。

(7) 頼起（タキ）

字興孝、號蘭皐、諡欽公、父頼恭、母家臣鈴木ルセ、延享四年丁卯六月廿三日生、内室水戸治保女初豊姫後述姫と改む皐安院、幼名鼎之助穆公第四子、安永四年襲封、官位從四位上左近衛權中將、寛政四年七月廿八日逝去、壽四十六歳、法號蘭皐院殿天蓮社麗譽仙德源欽大居士、歴代十三年。

(8) 頼儀（ノリ）

字民則、號鳳陽、諡襄公、父頼眞、母家臣中山ハナ、安永四年乙未十一月十二日生、幼名雄丸、後玄蕃頭、内室松平加賀守治脩養女藤姫順正院備前松平一心齋治政女晴姫圓淨院、官位從四位上左近衛權中將、在職三十年、文政十二年八月廿五日逝去、壽五十五歳、法號濬德院殿鳳蓮社覽譽輝迎源襄大居士、歴代三十年、書畫を能くす。

(9) 頼恕（ヒロ）

字容民、號南溟、諡慈公、官位正四位下左近衛權中將、父水戸治紀、母水戸家臣中山八重崎、寛政十年戊午六月廿二日生、幼名熊之助又昶之助、内室襄公女倫姫賢正院文政二年就封、天保十三年四月六日逝去、壽四十五歳、法號源慈公、歴代二十二年、在職三十餘年、公書畫を能す、坂出墾田、永富池隄防、講道館大聖廟、雲井御所等の諸碑、歴朝要紀の編纂及賢大夫木村通明、寛政典の施政皆此世にあり、文物の盛なる想ふべし。大正八年十一月十五日贈從三位。

若菜　處女等かあかも引つゝ野邊に出てしたもえいづる若菜をぞつむ　頼恕

(10) 頼胤（タネ）

字舜民、號鳳岡、諡靖公、官位正四位下左近衛權中將、文化七年庚午十二月廿二日生父頼儀、母家臣藤本トキ、内室將軍家齊公女文姫靈鏡院、天保十三年襲封、文久元年辭職、明治十年十二月三十日逝去、壽六十八歳、法號高嶽院殿卓蓮社立譽善得源靖大居士、歴代二十年、和歌及書を能くす。

(11) 頼聰（トシ）

字知遠、號菉堂、藻海　諡慈公、官位從二位伯爵、父頼恕、母家臣淺田八重、天保五年

甲午八月四日生、內室井伊掃部頭女千代子、明治卅六年十月十七日逝去、壽七十歲、法號厚德院殿關蓮社溫譽知遠源懿大居士、歷代四十三年。

松平賴壽伯

伯は高松藩主にして水戸中納言賴房卿の長子賴重の後なり、爾來連綿十數世を經て故從二位伯爵賴聰に至る、伯は其の八男にして明治七年十二月十日を以て東京に生れ、同三十六年家督を相續して襲爵仰付けられ、翌年正五位に陞叙す、夙に學習院に學び後早稻田大學法科に入り卅五年卒業す、曩に貴族院議員に擧げられ又滿鮮地方を巡視し、前韓國皇帝より勳一等八卦章を贈らる、夫人昭子と呼び侯爵德川圀順の叔母にして女子師範學校出身の才媛なり。

松平賴剛

幼名賴母、靱負、諱賴考、次賴兼後賴剛と改む、明曆三年七月十五日生る（英公四男）元祿十年出府、同十一年五月廿五日分授五千石、外に幕府旗下更代寄合として五千石を受く、同十二年江戸にて沒す、年四十三、餘技として書を能くす。

松平賴章

童名萬吉、通稱圖書、諱賴章後賴候、寛文元年七月十五日英公の五子として生る、延寶四年四月二日五千石分授、支族大膳の祖となる、貞享四年六月廿三日高松にて沒す年二十七、餘技として書を能くす。

松平賴熙

英公の八男賴芳の子、幼名龜之助、通稱左近後志摩、隱居して一風と號す、賴桓の父たり、元祿十二年十一月廿五日生、同十七年二月廿一日連枝となり二千石を給ふ、元文元年六月朔日二の丸奧方へ引移同月十一日一風と改む、同月廿七日現米五百石銀三百枚家料として給す、同二年九月廿二日沒す、年三十九。宮村經弼に學んで經史に通ず、是より先、節公創むる所の講堂中廢せしを一風君屢々慨嘆し、公に告げて再興せりと云ふ。

松平賴貞

賴元公の子、穆公の生父大學頭從四位下奧州守山城主、元文五年十一月近衛權少將、

先是職を辭し剃髮して直指と號す、延享元年八月三日卒す、壽八十一、私謚して莊公と云ふ、餘技として畫を能くす。

松平賴昌

名賴昌、通稱直之助又大膳、號鶴皐、穆公第五子なり、支族志摩の家を嗣ぐ、○寶曆四年四月蜂須賀家の養子となりしを以て其跡を繼ぎ、大膳と改稱し祿五千石を給さる○餘技墨竹に巧みなり、　年沒す。

松平賴尙

名賴尙、通稱修理、松平氏の連枝、○畫及歌を能す。

松平左近

名は賴該、金岳と號す、通稱初隆之丞次道之助後左近、左近最も行はる、高松藩主松平賴儀の第三子なり、二兄皆夭するも故あつて家を嗣がず、幼にして江戸より高松に移り、後香川郡宮脇村に隱居し以て世を避く、天性沈毅宏量にして文武の才あり、特に佛典に精し夙に宗藩水戸齊照の風を慕ひ尊王の志甚厚し、天保十年京都に上り皇居の衰頽を目擊して慨歎措く能はず、爾來窃に四方の志士と交り皇威を挽回せんとす、元治慶應の際故ありて京師に上りしが、孝明天皇其忠誠を嘉し給ひ大納言坊城俊克に內詔あり中啓三柄を賜ふ、左近亦俊克に依り短刀來國俊作を獻じ以て天恩を奉謝す、平常勤王論者長谷川宗右衛門等を延て時事を論究し、又日柳燕石の徒と聲息を通じ志士の幕吏を避くるものを庇蔭す、即中山侍從忠光長州藩士高杉晉作、桂小五郎等の潛に我讃に入るや皆左近の庇蔭を受くと云ふ、文久三年五月十五日孝明天皇內詔を高松藩主松平賴聰に傳へ、一藩の軍事に參與せしむ、明治元年八月病て歿す、年六十。（香川縣史）

○天保十年上京、志士と交る、其書狀近松左平と署す、松平左近を置更へたるなり、著書、武門諫曉抄、大東蒙求、破難一品二半派之事、自我偈聞書（思之儘合本）不實諫曉抄、尋問抄、盲牛、內陣之鏡、五三桐春之舞衣、神道問答鈔等あり、○多才多藝、狂歌戲畫甚輕妙、されど大聖廟碑を觀るに、筆意謹嚴なり、○又號橘齋又如水庵と書けるあり、○宗敎は日蓮を研究す、俗に左近法華の語を傳ふ、○大正四年十一月贈正四位。

（小歷）　天保十三年八月四日祿二千五百石を給され、十月十一日左近と更稱す。

松平竹軒

名賴顯、通稱初廉之助、次主膳、後一樂、號竹軒、襄公の子にて賴該の弟、松平氏支族たり。○馬術挿花歌書を能す、書風溫雅なり、明治初歿す。

（小歴）天保十三年九月四日一千七百石を給され、弘化三年十一月廿二日主膳と更稱す、明治二年四月廿三日一樂と改稱す。

松平賴覺

字子德、通稱大膳、號芝岳、松平氏支族なり、○水戸藩尊攘說を尙ぶ、文久元治間、王事に勤め禁門を護る、○書を能くし大字尤も妙なり又歌を能す、慶應三年十二月二日歿す、年六十一。○若菜、今年より若菜にそへて君が代の千年の數もつまむとぞ思ふ。

（小歴）天保七年七月十日公族志摩卒す、その子大膳に祿二千石を給し公族となす、文久三年五月廿一日祿千石增加合せて三千石、慶應元年二月十一日告老。

松平賴續

名初賴賢、次覺賢、後賴續、字子功、通稱哲松、號松嶼、館號松籟館、賴覺の第三子兄賴利（志摩）子無きを以て其嗣となる、天資穎敏にして學文武を兼ぬ、夙に勤王の志を懷き元治元年父に隨ひて京師に入り禁門を護る、明治二年三月政務總裁となる、明治六年田村神社宮司權少敎正となり、明治十五年十二月正七位に叙せられ、明治廿四年三月香川縣敎育會長に推奬され終身其職にあり、明治三十四年三月廿四日逝く、年六十一、後敎育碑を建て德を彰す、○歌を能くす。

元治元年皇居を守護せし時の詠

思ひきや雲井に我は能はり來てすへ御こしをかくまもるとは

松平千代子刀自

刀自は舊彥根藩主伊井直弼の息女にして賴聰公の令室なり、才色兼備にして文武の道に堪能なる上平素謙遜深き婦德を備へ、殊に和歌に秀で現代の新派とは趣きを異にして美しい歌を作られてゐた、平素健全であつたが昭和三年一月六日八十三歳の高齡を以て東京染井の本邸に於て逝去された。

名所雪

ふりにける跡はうもれてしか山屋あはれをつくる雪の夕ぐれ

松平可正

名可正、通稱半左衛門、高松藩士、英公の臣、文武の才あり、遺稿和歌集あり、友安盛員の松林亭にてよめる。言の葉のいひも盡きぬに冬の日の早入相の鐘響く也、○屋嶋に可正櫻あり、寛文五年植て詠む、此寺の庭に櫻をうえ置かむ我後の世の花の形見に、○岡部拙齋と友たり。

（小歴）　慶安三年十一月源英公の冢老となる、○六百俵を給さる、可正は晩年屋島へ隱栖してゐて、寛文九年八月十五日同山にて歿す、法號實相院法山可正居士。

松風、村雨

塩飽の大領秦良式（或塩飽大領時國とも云ふ）の女なり、妹村雨と父母に事へて孝なり母歿し、繼母性頑狂之を遠けんと欲し、讒して之を殺さんとす、松風の傳某の夫牟禮右兵衛之を恤み之を隱くす、時國素より繼母の言を信ず、之を聞いて大いに怒り、郎從を遣して右兵衛の家を圍ましむ、右兵衛松風、村雨等を遁れしめ自ら鬪死す、二女遁れて船に乘り播州須磨に至り漁人の家に養はる、適々在原行平謫せられて此に在り二女を見て其家を問ふ、村雨左の歌を以て答ふ、（名女傳）

白波の寄する渚に世を過す、蜑女が子なれば、宿も定めず

然して行平は姉を松風、妹を村雨と名付けて召し仕ふ、後行平赦免せられて都に歸りて後は二女の終りを詳かにせず、只後世松風、村雨とて謠曲中の人となり以てその一斑を傳ふのみ。

松王小兒（コデイ）

香川郡圓座の城主中井左馬允繼豊の嫡子にて民部正が孫なり、容貌端正にして温和なりしかば平相國之を召し上せて十四歳の時、重盛の近侍となり寵遇を受けた、此兒の一身上に就ては一の悲劇が演ぜられ後世迄話題となれり、今其大要を記さんに應保元年（今より約七百八十年前）平清盛が攝津武庫の沖に海上三十丁歩の埋立を爲さんとし五萬の人夫を役して工事に着手したが二回まで風波の爲に浚はれて、さすがの清盛も困し果てゝ時の陰陽師安倍泰氏に占を立てさしたら、泰氏の曰くには海底に龍神が居りて其工事を妨ぐるものであるから其れをなだめるには、一丁に一人宛つまり三十丁に三十人の人柱を沈めねば工事の完成は望まれぬと云つた、清盛げにもと信じ生田の森に關所を設け三十人を捕へる事にした、さあそうなると捕へられたる本人は勿論其家族のなげきは一方でないから、さすがの清盛も實行に惱やんでいた、それを聞いた

松王は當時十七歳の美少年であつたがなか〳〵義俠心に富んでいて、さて〳〵三十人の者は不憫である、よし我れ一人が其の者等に代りて身命を投うつて人柱に立んと、其旨を清盛に願望した、悲しい願は聽き届けられ、罪もなき三十名は放免されて紅顏の美少年は生きながら海底へ沈められて行つた、今神戸島上町にある經島山來迎寺は松王の菩提を弔ふ爲めに立てられたのである。

松王小兒墓

香川郡圓座村の(南西上圓座)にあり、四十五坪ばかりの地に中井家代々の墳墓多くあり、其内に松王小兒廟所と彫つけたり。

小兒は左馬允が子にて民部正の孫なり、其裔後高松藩の士族となれり、元姓中田井なりしを明暦年中に故ありて田の字を省きて中井と改めしと云ふ。

眞部助兵衛守政

は木田郡向城の城主にして眞鍋五郎助光が後なり、天正六年正月十一日香西家臣諍鬪の時眞部助兵衛守政、眞部彌介(其比十七才)の兩人は香西備前に頼まれ、大隅を伐る大隅が近侍武藤武林と云ふ、劍術者常に傍を去らず武林卽助兵衛を伐る死せず、彌介武林を伐る、伐られて打かくる太刀にて彌介が耳を伐落す、着込にてかけ留め死せず云々。南海通記に見へたり。彌介晩年入道して林禿と云ふ。

眞鍋彌助祐主

は木田郡木太村向城の城主守政の子にして香西氏の部將なり、平素より武勇の聞えあり、其の戰績の一部を示さんに、天正六年正月十一日香西家重臣諍鬪の時は、香西備前に黨し其依頼を受け父と俱に香西大隅を伐りしに、其護衛の任にあたりし大隅が近侍武藤武林に反擊されしも、幸に着込にて受けとめ厄難を免ぬかれたりと。天正十年八月五日土軍香西に進入せしとき彌助も軍使として參加し、伊勢の馬場にて防戰せしが戰友植松緣之助主從八人討れて死せしも、此時彌助は身方の戰死にもかまはず手負ぞ〳〵と呼て引退く所に敵長追して來り、後陣の兵續かざるを見て取て反し鎗にて打合高名して引退く、彌介心速くして目の利きたる擧動幾度もあり剛の者也。

天正十五年八月生駒雅樂頭正規に祿二百五十石にて召し出されたる、眞鍋彌助は其子孫ならん。

(參照)　向城木田郡木太村にあり、神内城の東に在り相向ふ故に名づくと云ふ。眞鍋彌助祐主之れに居り香西氏に屬す、屢々武功あり其裔士庶となるもの多し、新居に

居るもの其嫡流なり、其先壽永中一の谷の戰に功あるものは眞鍋五郎助光是なり、字治右衛門、理右衛門治三郎等は其の後なり、氏に鍋の字を用ひ橘を以て家紋とす、祐の字なるは彌助の流れなり、眞鍋彌助の墓は木太村田中に在り、その田を東光寺地と云ふ、植苗の時田主必ず酒粢を此の墓に薦むは勇士の靈を祭るなり。（全讃史）

眞鍋權頭

元龜、天正年間香川郡鷺田村室山城主にして本國三河藤原詮清の嫡流なり、後香西氏の麾下となる。

松浦清左衛門

香西氏の部下にして勇士なり、天正十年八月五日土佐軍攻入の際、奮擊勇戰して戰死せり、子また清左衛門と稱し、天正十五年八月生駒正規に、祿二百石を以て召抱へらる。

前田賴母助成光

木田郡前田の城主なり、天正頃の人。（參照）前田城前田賴母成光之れに居る、土佐元親のために陷落せられ、城墟今藥師堂となる。（讃）

前田甚之亟

木田郡前田の住人にして武勇の名あり、十河隼人佐の麾下にして窃早業の名人なり。天正十年八月土佐軍と香西氏と協同して十河城を包圍せし時、甚之亟は十河城下に在りしが城代三好隼之佐の命を受け敵の首將親政を討取らんとし、夜中窃に敵陣中に潛み込み數人を伐ち取りしも流星長蛇を逸すで、親政を獲なんだので大に失望し、土佐方の運强きを感じ、隼之佐に此事を說き和平せしめしと又軍馬を窃み歸り村内へ匿しおけり、今も前田村に馬匿谷ありと云ふ。

丸尾五左衛門

五左衛門は塩飽牛島の人なり、代々五左衛門と稱し瀨戸内海の大船主、島嶼の覇王と云はれ殆ど德川時代の全期に亘りて、海運上の利權を握り巨萬の富を積みて、城廓の如き邸宅 邸址は牛島の北浦にあり）を構へたりと。而して其先代に就いては二說あり

（其の一）五左衛門は元肥前國の武士にして、往昔豊太閤の朝鮮征伐に從軍して功ありしが、其の後故ありて浪人となり、上方地方に至る途次牛島浦に假泊せしに、此の島は對岸の本島近く二三十丁に過ぎず、其の間海底深く天然の良港にして、海運業を起すに恰當の地なると、加ふるに風光又愛すべき地なるを以て、永住の心を起し、茲に於て運輸の業を創めたり。

（其の二）五左衛門は肥後の豪商なりしが、在國の頃藩政の令達其の商業に堪え難きものありて、此の島に隱退し通商運輸の業を創めしと云ふ。

二說何れにしても其の營業振の豪膽なるより察すれば、九州人の血筋を引いて居る人ならん。而して元祿年間に至り全盛を極め日本全國の至る所の港灣に五左衛門の船影を見ざることなく、又所有船中の千石以上のものを數ふる「いろは」四十八字を冠して記號を用ひたりしに、一順を終りて尙無記號のものありしと云ふ程の船成金なりしも榮枯盛衰は免かれぬものにて今より百餘年前衰運に傾き、爾後累年衰微し、近時その家全く滅び、今はその宅地に僅かに門の一部と礎石數箇所殘るのみと、船成金の末路實に憐むに堪えずと云ふべし。

曲垣平九郎

曲垣平九郎、諱は盛澄、調馬の名手なり、生駒高俊に仕ふ、吃訥にして飲酒を嗜む、寛永十一年正月將軍德川秀忠芝の廟に賽し、歸途愛宕山を過ぎ騎して山上の梅花を折り來るものを募る、旗下の士二三人その募に應ずるものあるも皆石磴を登ること少許にして落馬す、平九郎生駒氏に從ひて其の扈從中にあり命を受けて、石磴を上下すること平地を行くが如し、將軍その技を賞し黃金三枚を賜ふ、同十七年生駒氏國除さる後平九郎漂泊して、尾張名古屋にありて其の藩の馬丁たり、時に悍馬鬼鹿毛なるものあり、屢々人を咬む、平九郎之を狎して藩主の識る所となり、終に登用せられ祿九百石を給せらる。

（香川縣史）

前野助左衛門

生駒高俊の江戸家老（祿五千石）なりしが、專横にして高俊の暗愚を利用し政事向不當の所置多かりしを以て生駒帶刀より對決を申込まれ、辭に窮して寛永十七年七月江戸にて切腹を命ぜられ、其一族は悉く死罪又は職祿を沒收され浪人となれり、其經緯左の如し。

助左衛門は本但馬の國守前野但馬守長康（豊岡に居城す永祿年中に沒落）の長臣たりしに、彼家沒落以後牢々の身となりしに故一正より千石宛にて抱えられ家老格とな

り、追々加增して後五千石を領せり、併性辯佞我慾にして己れの立身を企み謀計を回し、自分の黨派を作りし爲め國中御爲方と逆意方と家中七三に別れ、御爲方を後退と云ひ逆意方を前退と云ひ、寛永十七年五月五日先達て立退き終に國家を亡ぼせし也。

前野治太夫

助左衛門の子にして祿千石を領し、鐵砲者三十人を預り居たりしが父と共に國政を紊せしを以て同時(寛永十七年)に死刑に處せられ、妻は大阪に逃げのび當時懷姙し男子を生みしも同所にて殺されたり。

增田光政

鵜足郡椎の尾の城主にして天正前の人、奈良氏の部下なり。

(參照) 椎の尾城岡田上にあり細川氏舊臣に增田右兵衛光政なる者あり、其子忠次郎氏繼萬助正義を生み、正義忠次郎某を生み、奈良氏に屬して邑を椎尾に食む、小笠原彦次郎長氏九世孫也、天正年間邑を失ひ栗隈に老し十樂と號す、其支屬寒川郡鴨部鄕に徙る乃ち、增田休意外祖の先世也。

增田忠次郎

本名を長茂と云ひ鵜足郡岡田村椎尾に食む、慶長十七年九月十一日沒す。其子彦次郎安光なる者あり、生駒正俊に仕て後免され寒川郡下莊に家す祝髮して行嚴と號す、三男一女あり長彦兵衛安慶農を業とす、次某一女崇心齋に配し二子を生む、長市郎衛門洛に行く終る處を知らす次は則ち太兵衛と云ひ雅居と稱し、晩に宗悅と號す、六男五女あり、長は雅宅次は武賢なり、其祖稱を襲ひ菊池八郎衛門と云ふ、○彦次郎は寛永十九年十二月九日沒す。

增田正宅

名正宅、通稱太兵衛、晩に崇悅と號す、武信の子、初め松平家に仕へしが免されて木太鄕に隱れ農を業とす、傍ら父の志を繼ぎ讃岐の史蹟を考檢す、享保十二年十一月廿三日沒す、年八十八。太兵衛は松平家に仕へ初め勘定手代を勤め、貞享三年奉行となりしが故ありて改易さる。子三人あり、長は雅宅次は僧となり雲晴と云ひ初池戸神宮寺に住し、後高松行德院主となる、季は菊池武賢なり。

増田雅宅

通稱太兵衛、晩に休意と號し又檀林丈人とも云ふ、山田郡木太人なり、武信、正宅、休意三代間讃岐に關する聞見の事を輯めて三代物語と云ふ、菊地武賢之を改訂して翁嫗夜話と名づく、穆公讃州府誌の名を賜ふ。明和五年五月十七日沒す、年九十一。

増田命休

名命休、通稱小右衛門、高松人、和歌を能くす、天保頃なるべし、○野霜、寐ぐら出でいつか小鳥のあさりけむ霜に迹ある野べの細道

前川正遠

名は正遠、通稱曾八、丸龜藩士國字を好む、著書、百人一首俚言、讃岐名義考の著あり、維新前の人。

前田春茂

養翁と號す、丸龜の醫師にして國書に通じ、和歌に工みなり、維新前の人。

霧中鹿

終夜啼音ほのかに聞ゆなりきり立こむる嶺のさをしか

前川市松（醫師）

市松は仲多度郡櫛梨村の人にして代々組頭役を勤むる、同村の豪家前川佐兵衛の一族なり。夙に醫學を修め業を開きて靈名ありしが後擢んでられて、丸龜藩の幼主高德公子の保育役を命ぜられ恪勤し、爲めに紋服を拜領せり、安政年間歿す。

前田隆次（航海家）

隆次は通稱常三郎と云ふ。天保六年九月二十八日擯飽佐柳島に生る、身体魁偉、豪放磊落にして家事を顧みず、嘉永五年十八歳のとき飄然家を出で江戸に至り、假名を濱田軍次郎と稱し、幕府の軍艦に乘組み時の艦長勝安房に知られ、萬延元年咸臨丸の船員となり勝艦長に從ふて大平洋を渡航し、米國に往復もせり、歸朝後も永く軍艦にありて航海上の技倆を發揮せりと。

増田正倩

高松の人、歌を能くす、明治前の人。

名所鹿　大江山あらし吹夜は啼鹿の聲もいく野をこえてゆくらむ

松下見林

名慶節、字諸生、號西峰散人、大阪人にして高松侯に仕ふ、元祿十六年十二月七日歿す、年六十七、見林半白の後高松侯に筮仕し、其の餼稟三十口糧を受く、猶京師に住す、侯之を優待し責るに職責を以てせず、志を著作編纂に專らならしむ、嘗つて偶懷の詩を作りて曰く、官途難レ遁レ跡。風雅未ニ心灰セ。舊識榮トシテニ鉛槧ヲ。新詩貯フニ別材ヲ。往年墳籍去ス。追日詠歌來ル。歎息ス疎慵甚ヲ。無レ由ニ百尺臺ニ。皆その實を記すなり。見林は元祿十六癸未十二月七日六十七歳を以て沒す、京都內野大雄寺に葬る、遺言して曰く「謹んで墓碣を建ること勿れ吾が後人に期する所は著述のあるあり、以て百世に朽ちざるに足れり」著述編纂するところ多し。前王廟陵記三卷、諸大臣執柄年表錄十二卷、將軍稱制年表錄八卷、國朝佳節錄一卷、補遺二卷、異稱日本傳六十五卷、拾遺二十卷、公事根源集釋三卷、詳賜神代卷二卷、童蒙先習一卷、神國言葉遺式二卷、職原鈔參考五卷、太玉命社記一卷、古林見宜翁傳一卷、運氣論疏鈔三卷、習醫規格一卷國朝諸禮分類八十卷、讀史隨錄三卷、神國字原考二卷、西峰筆記二卷、雜說考一卷又其の校刻する所の書數種三代實錄、古語拾遺等皆世に行はらる。

松下眞山

名慶績、字子節、通稱見樸、號眞山、本姓坂上、越前福井人、見林に學び、其家の學業を繼ぐ、延享三年九月十九日歿す、年八十。著述する所十四種三百卷に至る。右二人人物傳に讃岐學者としたれど、實は他にありて讃侯に仕へしのみなり、今假に加へて辨ず。男元明、字は昌林、秀山と號し、克く家業を繼ぐと云ふ。

松井霞松

號霞松、天保頃の人、〇書を能す、栗洞展觀錄にあり。

松原竹里

名は義質、竹里と號す、通稱は半藏、象頭山金光院に住す、詩文書畫を能くす、書名最も高し、嘉永四年七月廿一日沒す、年七十二。碑銘は燕石の撰になり左の辭あり。

書法端正。人品清高。嗚呼斯翁。實君子曹。

松原竹秋

名崇、字士功、通稱良助、號竹秋、竹里の子、琴平人、燕石と親しみあり、○昌平黌に學び詩文及書畫を能す、明治三十五年六月二十六日歿す、年七十五。○維新後內閣及び遞信省に仕へ後辭して高松野方町に住す。

松原竹江

名義長、通稱又一、號竹江、又竹巷とも俗に木曾屋といふ、高松の人、○馬嶺に學び後に一流を成し人物に巧なり、明治十八年五月歿す、年七十八。○款に竹江山人又は竹江山樵とあり。

松原竹坡

諱熊、字は子祥、通稱初熊次郎後勘五郎、號は竹坡、高松南新町の巨商、屋號阿波屋といひて文房具商なり。性恬澹、商利を好まず幼より文墨の道を好み、初め書道を國方逸民に、後南畫を兒島竹所に學び皆其の堂に入る、又詩文は片山冲堂に受けて得意とする處なり。明治の末年頃より店舗を他人に讓り、天神前に栖遲を營み此を間仙居と號し優悠自適詩畫を好み居りしが、大正九年十二月二十四日逝く、享年七十六。長男直次郎先沒し、次男善之助嗣ぐ。著書に墨禪要語、讃岐畫家人物誌等あり。

自詠

結三廬郭外一。日對三青山一。琴書在座。松竹繞レ園。優游自適。陶潛後身。遭二遇聖代一。一介逸民。

松尾北渚

號北渚、文化頃東讃人、○畫を能す。

松岡勘右衛門

通稱勘右衛門、丸龜藩士、狂歌を能す、○藩主大麻山に兎狩するに獲物なし、勘右衛門即詠、大麻山生野(イカノ)の道の遠ければまだ糞も見えず網の張立。

松岡李堂

名正臣、字琦伯、通稱衛門、號李堂、又松琴又殘月樓、多度郡吉原人、後丸龜藩士となる、尾池桐陽に學び又京阪に學び眼科を以て聞ゆ、業暇詩歌俳を能す、畫は春琴に

學び山水に長す、文久元年八月五日歿す、年七十五。

松岡　調

幼名米三、次信正、次春、祐次御、調、次調と云ふ、諱春祐、實は高松藩士佐野衛士の子、天性學を好み友安良介に從ひ皇典の學を研究す、後出でて松岡氏を繼ぎ、多和神社の祠官となる。明治維新神佛混淆を廢せらるゝや藩の命を奉じて管内の各神社を檢し、同藩皇學寮の開設に及んでは督學となる、事比羅宮禰宜となりては從八位に、國幣小社伊和神社宮司となるや從六位に叙せらる、氏は古典考證の學に精しく、傍ら繪畫を能くし且つ古器鑑識の明あり。嘗つて大古衣服考を編輯し東京大學に贈進す。明治十五年二月同大學は之を學藝志林第十卷に掲載せり。晩年多和文庫を住宅内に創建し、古器物古文書の蒐集多し、著述に古事記刪定、古語拾遺刪定、新撰姓氏錄刪定、大神宮儀式帳刪定、三部本記、國土考、讃岐國官社考證、日月考、齊明童謠辨、小乘涅槃論辨、伊豫國官社考證、陰名考、皇國古字徵、現存皇國古印譜等にして、明治三十七年十二月歿す、年七十五。晩年讃岐風土記を新撰せしも惜哉、完成に至らず其稿本は家に藏せり、其藏する所は大内郡二冊、寒川郡三冊、三木郡二冊、山田郡二冊、香川郡二冊、阿野郡二冊、鵜足郡二冊、那珂郡五冊、多度郡四冊にて三野郡、豊田郡小豆郡の三郡は脫稿に至らざるを遺憾とするのみ。

松岡正貫

通稱彦二、字正貫、號を芦村、仲多度郡吉原村の人、夙に香川克己の門に入り年長ずるに及び、大阪に遊び後藤松陰に從學し、後備中興讓館に寓し、坂谷朗廬の訓薫を受け其の都講となる、後四方に流寓し書畫を揮毫して自活せしが、明治二十二年六月十九日播州岡本某の家に客死せり。享年五十一。

松崎澁右衛門

名は佐敏、達齋又別號每友、松緣とも號す、高松藩の世臣なり、嘉永六年米艦の浦賀に闖入するや藩主松平頼胤幕命を以て芝の濱殿を警衛す、澁右衛門扈從し大に盡す所あり、文久元年世子松平頼聽の封を嗣ぐや深く國事を憂へ澁右衛門に命じ、京攝の間に奔走せしむ、是時高松藩宗家水戸藩と隙あり澁右衛門間に居り之を和解す、其京師に在るや水戸藩武田耕雲齋と常に尊攘の事を謀り以て大に爲す所あらんとす、元治元年四月藩主入洛す、澁右衛門之に扈從し尾紀水因筑豫諸藩の志士と相謀り大に其間に周旋す、同年七月長藩の禁闕を犯すや藩主本國寺に館す、澁右衛門知友水戸藩齋藤佐

次右門と相謀り長藩をして兵を解かんことを勸誘するも聞かず、是時藩主兵を率ひ支族松平大膳と共に禁闕を警衛す、澁右衛門殿たり時龍駕將に難を叡山に避け給はんとするの議揩紳の間に起りしに、澁右衛門の建議に依り更に高松藩の兵を以て禁内を守護し並に神器を奉衛すべきの命を賜ふ、爾後藩論一變し澁右衛門を獄に下す、明治元年六月朝命を以て獄を脱す、十二月再び藩政に參與し尋て執政たり、二年八月那珂郡滿濃池の工事を督し之を完成す、同年九月同藩異論者の爲め刺れて死す、年四十三、同三十一年正四位を贈らる。

慶應元年獄中の詠　君の爲國の爲には惜からじあだに積なむ命ならねば

（香川縣史）

（小歴）　松崎澁右衛門佐敏、佐盈の曾孫、元明元年四月六日賴聰公の家老となる、同年八月二十八日やむ、同年九月廿六日致仕。明治二年三月七日再び家老となる。明治二年九月八日兵隊長堀多仲、矢野織部、牛窪雅男等の爲に城内軍務局に於て刄殺さる。氏は明治二年長谷川佐太郎氏と共に滿濃池を修築せしを以て、人民其餘德を追慕し同池畔神野神社の裏に一社を建てゝ其靈を祭り松崎神社と號す。

松本柳齋

名良春、通稱和右衛門、香川郡太田人、○小澤蘆庵に歌を學ぶ、後出家して柳齋と號す、文化十一年十一月寂す、著書、文の反古あり。

松本萬年

名青公、字蒼夫、號萬年、文化頃の人、○印刻を能す、畫譜印部に出づ。

松本桂陵

名信虔、字子恭、號桂陵、文化頃高松人、○畫を能す、畫譜にあり。

松本小春

名小春、高松鈴木三橋の妻、文化頃の人、○畫を能す。

松村貞緜（フグ）

は高松藩士（濱ノ丁松村德次氏の祖先）與右衛門と稱す、公務の餘暇和歌を能くす、安政六年八月十四日歿す、年五十九。

八十島ねをきの見るめものとかにてなみよりはるは立そめにけり

松本貫四郎

貫四郎、諱は信富、幼名は要人、又久四郎と稱す、天保三年九月木田郡西潟元村に生る。柏原謙好の第二子、入つて松本理兵衛の養子となる、資性剛毅、貨殖の才あり且つ身を持する頗る儉、又武技を能くす、初め兵學を學びしも後殖産興業に盡瘁せり、卽ちその功業左の如し。

明治四年廢藩置縣の擧あるや權大屬を振り出しに香川郡長となること二回、此の間高松外國語學校設置に或ひは奬學に關して功獻し、後官を辭しては百十四銀行の創立に或ひは縣會議長となり、又自ら刻苦精勵幾多の艱難を排して、松本鹽田を初めとして各所に數十町歩の鹽田を開き、殊には在來の鹽田從業法を改良し、又は全國製鹽大會を興す等其の業績見るべきもの多々ありしも惜しむべし。明治二十四年六月三十日病歿す、享年六十、然して臨終に際して貧民の施藥料として金千圓を公益事業に寄附す、奇特と云ふべし。

松浦葛谷

號葛谷、天保頃の人、○畫を能す、栗洞展觀錄にあり。

松田米太郎

は香川郡上笠居村の人、明治二十年香西尋常校訓導となり、同二十五年同郡一之宮尋校訓導兼校長となり、同三十八年同郡下笠居尋高校訓導兼校長となり、敎職にある事前後凡二十年恪勤を以て稱せられ、其功績多大なり惜哉、明治三十九年四月十二日歿す、年四十一。

松田俊順

字は一音、南洋と號す、三野郡詫間村松田元俊の子にして、七歳の時元禪僧たりし元福の養子となる。夙に妙德寺に入り剃髮し、金倉寺弘順和尙の附弟子となり俊順と改む、後大阪に出で佛學を修め又臨池の業を習ふて共に上達す、其後備中に至りて住持す、弘化四年讃岐に歸り長尾寺に住し、明治七年金倉寺に轉ず、住務を帶び各地に至る毎に筆硯を伴ふて能く靈腕を揮へり、又法界に盡して德あり、克く衆生を道化せり明治十七年六月寂す、年六十三。明治四十年在世の法效により大僧正を贈補せらる。

牧東渚

名碩、字百穀、通稱周藏、號東渚又屏浦、白方村高嶋太左衛門本秀の子、石潭の養子○茶山に學びて經義に通じ詩書を能す、學舍を起し村童を敎授す、天保四年十月歿す年四十八。

牧　石潭

名匡直、字溫夫、通稱久兵衛、號石潭、象頭山人、○文政十年四月歿す、年八十、○書は皆川淇園に學び、晩年歌を小澤蘆庵小川莽流に學び、又物產學に通ず、○蒲生君平寛政十二年五月山陵訪求の爲來讃の時、石潭の家に來宿す、蘆庵の添書あり。

牧　詩牛

名驥、字德稱、通稱松藏、熊太郎、久五郎、藤兵衛、號麻溪、詩牛又栖碧山人、棲碧樓主人獨樹軒逸士癡眠齋、石潭の長子、胡麻谷の地に閑居したるにより自ら麻溪詩人とも稱せり、○菅茶山に從ふ事八九年、江戸に遊び五山に學ぶ後歸鄕敎授す、天保四年八月歿す、年四十六。○文政中病み聾す、此事茶山集に見ゆ、又號畏犧、軒號獨樹軒、○著書、若木聯珠詩格二十卷、明淸千家詩十卷、胡麻溪居詩話十卷、詩童易字四卷、樓碧山人詩集四卷、近人小詩初編四冊、同二編四卷、棲磐山人百絕一冊、癡眠齋隨筆二卷、詩牛鳴草一卷、

牧　野默庵

名古愚、字直卿、通稱直右衛門、號默庵又信天翁、本臼杵氏、牧野氏を繼ぐ、那珂郡苗田村人、象頭山に移居す○貧にして學資なし、茶山憐みて敎養す、事五山堂詩話に見ゆ、後江戸にて佐藤一齋に學ぶ、高松藩に仕へ江戸邸文學兼侍講となる、嘉永二年七月四日江戸に於て歿す、年五十四、○詩を好み五山、尾藤水竹、門田樸齋等と唱和す、○著書、尙書抄說、我爲我軒遺稿。

牧　野松村

名古哲、字保大、通稱初保次郎、中唯助、後唯吉、號松村又拙翁、默庵の子、○佐藤一齋、安積艮齋、大橋訥庵に從ひ、昌平黌に入る、歸て講通館敎授となり、世子侍講を兼ぬ、後塾徒に敎授す、明治二十四年一月十五日歿す、年六十九、○著書、拙翁獨語、松村遺稿あり。

眞鍋久左衛門

通稱久左衛門、佛生山刀工、○初吉光人嘉太郎に、後大阪人應諶の弟子助高に學び、技名頗る高し。

眞鍋彌太夫

眞鍋彌太夫は三豊郡仁尾村原の人、仁保村の里正たり、舊三野郡と舊豊田郡との境界決定に關して江戸に上り遂に仁保の勝を占め、山を墾きて一町六反歩餘の畑地を設け代々庄屋地となす等功績多し、年代は安政頃の人。

眞部義端

宗居と稱す、菊地武賢姉の夫にして向井元端に學で治療に秀でし、高松の醫師なり、法橋に叙せらる。

祠前松（岩清尾八幡宮）

萬代に榮へぞ增さる、神垣の、松は千歳を限るものかは

右は享祿九年九月節句に菊地武賢と石清尾に遊びてものせし歌なり。享保十二年二月三日歿す、年五十六。

米谷樸齋

名篤忠、字子貞、號樸齋、高松藩士、○詩書歌を能す、樸齋は池田弦齋の兄也、天保八年正月歿す、○謙谷の文を樸齋が書ける者多し、○恬齋集に、輓樸齋詩、墨痕雄逸似翔鸞云云と、其書を稱せり、○嘗て歷朝要紀校正總裁たり。子篤之、勘左衛門と稱し歌を能くす。

間宮武右衛門

諱は綱寛と云ひ世々高松藩奉行役を勤む、享保より寛保の頃屢々塩飽島並に備前日比利生澁川等と香西浦漁夫と大曾瀬爭論起り、享保十八年塩飽島と瀬居島鯛網代紛爭再發し、備前と爭論絶えず、綱寛元文二年春より翌三年秋に至るまで同僚と大阪に出張訴訟するも要領を得ず、遂に同四年高松其の他の漁夫と江戸に下り數年間滯在し、その間齋戒沐浴、閉目默禱手燈を點じ利刀の印を結び一意勝訴に期せんことを祈る、遂に同年八月我が勝に歸す、十一月藩に歸り知行五十石を加增さる、寛保二年十月朔日病死す。

松浦坐石（現代人）

（一夜庵、中興第二世）

は通稱佳雄、名は眞、字子省、自然窩と號す、文久二年三月德島佐古町に生る。明治六年十二歳の時親戚なる觀音寺町西山茂登彥に養はる、爾後學問の小歷左の如し。

明治七年入江源三郎に、同十三年伊丹町中村良顯に和歌を、同十四年より十五年迄秋山式部に國學、十六年より十九年迄德島市木內千尋に和歌を、十六年より十八年迄廣島市原玄吉、岡久翁に漢籍經書を、十八年より二十六年迄醫學修業前期試驗に及第、同二十四年より同三十三年迄國學研究、後俳諧に趣味を持ち俳聖宗鑑翁終焉の古蹟を存する、觀音寺町に斯道の廢絕せるを慨嘆し、其復舊に身を委ね機關紙國の華等を發刊し、燕子花嗇社を創設せり又大正八年以來內地は勿論朝鮮滿洲方面へ十數度巡杖し趣味の普及に盡瘁し爲に健康を害し、現時琴彈公園の東南に卜居し是れが回復に努め居れり。

俳祖山崎宗鑑翁一夜庵道統立机者六十二名內物故五名を除き現在宗匠

西讃　大喜多斧聲　西讃　井上　幽石　西讃　松尾　止石　大阪・濱田　樓石
西讃　曾根　心石　西讃　曾根　一石　西讃　筒井　其石　西讃　宇草　牛睡

西讃　長尾　琴邨　東京　矢野　然石　神戸　佐藤　燕石　西讃　岩本　鵲石
西讃　井上　天石　丸龜　芥　是石　西讃　近藤　溪石　西讃　有木　霧石
伊豫　清水　松翠　陸奥　大伴　湖南　陸奥　米內山木人　西讃　大塚　去石
伊豫　松永　魁春　伊豫　矢野　稻舟　伊豫　長野　松月　朝鮮　神吉　春水
高松　大熊　霞石　肥前　山下　烟石　肥前　黑木　梅石　高松　眞部　稻風
伊豫　岡田　鶴星　東京　橫田　不朽　丸龜　熊岡　碧湖　西讃　平尾　晚翠
東讃　岡　水穗　東讃　乙竹　節石　備前　土肥原幽水　西讃　武內　松堂
高松　北村　對石　但馬　松村　櫟村　橫濱　志村　櫻洲　東讃　天野　飛龍
伊豫　越智　橘堂　東讃　井上　慈圃　伊豫　三好　四更　大連　宮武　樟蔭
西讃　宮武　梅雅　西讃　大喜多賣山　東讃　樋口　此石　西讃　橫山　悟風
西讃　毛利　可人　西讃　秋山　秋石　東濱　松浦　介石　中讃　植松　陶松
中讃　增田　松翠　大阪　高橋　秀石　北海道　土井　彌石　橫須賀　安藤　光石
出雲　細田　不石

マ號索引

萬年（大原、菊池、溝口等）　松枝（鶴遊事）

○ケ之部

圭　吽

字は勸善、佛告と號す、南面山屋島寺主、藤川三溪に學びて詩文を能くす。

月　照（忍向）

名は初め忍海、忍鎧、忍介と云ひ後忍向又月照と稱す、月照尤も著はる、幼名を宗久と云ひ後久丸と改む、文化十年多度郡吉原村字下庄に生る。父は名を宗江、字を鼎齊と云ふ、鼎齊早く佛門に歸し、塩飽の高見島理正院及び備中諸寺に轉住す、後故ありて還俗し、大阪に移り醫を業とし茶道和歌を好む。月照幼より弟信海と共に出家し、其肉緣の叔父たる多度郡碑殿村遍照院牛額密寺の住職藏海の徒弟となる、藏海の京都清水寺成就院の住職となるに及びて文政十年月照信海共に此に移る、天保六年五月十二日寺務一條院宮より清水寺成就院住職を命せらる、月照深く佛學を究め傍ら勤王の志あり、嘉永六年六月米艦の浦賀に來るあり、翌七月には靈國の使節長崎に來る此時に當り尊王攘夷の論國内に沸騰し天下の志士東西に奔走す、月照才智慧敏夙に尊王慷慨の志を懷き憂國の至誠息まず、安政元年二月寺務を弟信海に讓りて、高臺寺春光院に寓し、三月九日歌道に托して近衛忠熙公に謁するを得たり、又同年天顏を奉拜す安政四年十月十三日弘法大師より嵯峨天皇に奉授せし、紺紙金泥阿字の御守を自書して孝明天皇に奉り、且其の當時寓居東福寺中卽宗院の山莊採薪亭に於て斷食五旬玉體安穩國家泰平外敵退散を祈る、青蓮院宮近衛忠熙公共に其の志を好し更に清水本堂靈前に於て秘法を修すべき旨を命せらる、則ち弟信海と議し之を行ふと雖も顯敎の道場密法を修するに便ならざるを以て、高野山に於てせんとて公に言して信海を高野山に上らしむ、重ねて内勅祈禱の命あり御劍及び御撫物を奉じて登山せしむ、修法畢るに及び夫々御感書御衣等の賞賜あり、月照常に青蓮院宮近衛家其他諸公卿の門に出入し、倒幕攘夷を唱へ頗る王事に勤む、西鄕吉之助、梅田源次郎、賴三樹三郎等と屢々往來論議す、水戸藩主源齊昭も其の臣鵜飼幸吉父子をして交を月照に入れしむ、安政五年鵜飼梅田賴等が別勅を申下す折月照力を盡し近衛家の老女村岡と謀り密に御局口より參内して其事を取計ひけれども、僧徒の事なれば怪しみ咎むるものもなし、老中間部詮勝上京して勤王の諸士を捕へ將に月照に及ばんとす、近衛公忍向の身を氣遣ひ西鄕吉之助有村俊齋等に托し命して難を避けしむ、月照は西鄕有村及び僕大槻重助と共に九

月十一日京師を發し、大阪に至り海路により十月朔日下關に着し、白石正一郎の家に投す、西郷有村は月照を北條右門なる者に托し前後して鹿兒島に發す、北條は共に博多に至る會々平野國臣來る、北條、月照を國臣に托す、月照國臣及重助と共に筑後川を下り久留米領若津より柳河領小保に抵り船に乘じ水股に着し、薩摩の米津番所を過ぎ野間原に至りて拒まれ、更に舟にて阿久根港に着し、十一月八日鹿兒島に入り隆盛と會す、時に島津齊彬既に沒し、薩摩の藩論一致せず爲めに月照を庇護する能はずして、而かも幕府の探究急なり因て意を決し十一月十五日夜半舟を浮べて出づ、月照懷紙をとりあげ

答ふべき限は知らじ知らぬ火の筑紫に盡す人の情に
曇なき心の月も薩摩潟沖の浪間にやがて入りぬる

大君の爲にはなにかをしからむさつまの迫門に身は沈むとも

の歌を書して西郷に示す、西郷徐に懷に納め兩人相擁して海に投ず、後西郷は蘇生したれども月照は終に蘇生せず、時は安政五年十一月十六日月照年四十六、僧臘三十六鹿兒島城下松原東林寺に葬る。明治元年十二月月照の靈を京都東山靈山招魂社に齊祀し毎年招魂の祭典を行はる。明治廿四年十二月廿七日靖國神社へ合祀せられ、同年十二月十七日特旨を以て正四位を贈らる。

月照墓薩摩東林禪寺にあり。同塚京都東山清水寺中成就院にあり。

月頂

號月頂、塩飽島人、○香川郡山崎に住し、句讀習字を敎ふ、書を能す、明治八年七月歿す、年六十五。

曉堂

名良輝、號曉堂、文化頃志度僧、○書を能す、書譜に字慈とあり、本は二字なるべし。

敎存

名は敎存、字快行號風牀、三野郡元山に生る小西松塢の弟なり、早く佛門に入り後備中倉敷觀龍寺の住僧となる、詩書を能くす、漆谷、漆園と親交あり、文政二年に三都に於て風牀詩抄を出版せり、文化文政頃の人、著書、風牀詩抄、續聯珠詩格、同補遺等あり。

清

敎淸又永德とも云ふ、大內郡松原村敎蓮寺の一代なり、一日出でゝ弘法大師の四國舊跡を巡拜し還りて敎淸ケ窟に入り、二十餘年窟に起臥して享保十年頃沒せりと云ふ。仙人めいた奇僧なり、敎淸ケ窟大川郡松原村海濱にあり、又永德ケ洞とも云ふ、安堵山の聳だちて北海に出たる處の岩穴を云ふ。

桂洞法印

法印は南紀伊都郡隅田の人、塙坂一澄の第四子なり、幼にして京師に入り、大覺寺に於て薙髮し灌頂を受く、法印性强記、果斷三學を兼通す、承應三年讃岐大旱雨を祈り大いに雨降り庶民喜ぶ、藩公もまた悅び田數百畝を寄附せんとす、辭して受けず、長尾寶藏院に居ること十餘年、その間寺堂を修覆し鐘樓を建つ、明曆三年九月朔日示寂す。

溪百年

タの部を見られよ。

玄叡

池田村の人、草壁村中桐貞齋の弟なり、幼にして佛門に入り、池田村保壽寺（八幡宮別當寺）にて得度し遂に同寺の住職となる、佛學の研鑽を積みて德高く識博し、餘暇畫を好み野呂介石に從ひ上達す。始星嶽と號し、後石窓と改む、本島畫家第一の人なり、弘化三年九月歿す。（小豆郡史）

蕙崖

姓筑後、名傳、字靈通、號雨岳、寒川郡石田村德勝寺住僧、○畫山水を能す、天保五年九月寂す、年四十六、○畫譜に僧傳とある是也、○牟村集に、題蕙崖畫詩あり。

芸蕙叢

號蕙叢、三木郡某寺僧、○畫を能す、嘉永六年寂す。

賢正院

松平賴恕公の夫人、備前一心齋の女、○歌を能す。

顯昌

名顯昌、號曉園又曉雨、舊弊翁、多度郡生野智光寺住僧、○畫山水人物獸類を能す、明治二十六年六月二十六日寂す、年七十八。

孝子現七

は安永年間圓座村に生る、家貧なるも母に事て至孝、母の求むる所供給せざるなし。常に一苞の米を蓄へ曾て之を欠がさす、人に語つて曰く若し余にして一朝死するあらば卽日より我親饑えん故に此の米を貯ふと、市祭り其他賑事ある時は必ず父を脊負ひて之を見物せしめ其心を慰めたりと、後此事藩主の聞く處となり錢一貫、田八畝歩を賜ふ、其の後父死し、現七も亦六十餘歳にて沒したれば、領主より料金を給して石碑を造らしめ、今現に香川郡鹿角七百二十五番地にあり、題して「孝子現七之墓」と云ふ。

月巢

豊田郡大野原庄司良助、嘉永頃の俳人。しほらしき曇りもかげて峰の花　月巢

玄々

安永頃大川郡松原村の俳人、麥浪の門人。

麥浪先師七回忌に
居ながらに眞如の月を待夜哉

ケ號索引

絹洲（阿部）　嶮州（岡井）　賢直（那須）　敏哉（宮本）
見林（松下）　敬藏（玉楮）　蕙子（富山）　元徵（揚）
獻卿（揚）　桂窓（岩井）　元宣（漆原）　景武（奥村）
景明（梶原）　元仲（菊地）　月頂、月照、顯昌、蕙崖、敎存、賢（妹尾）
景福（村岡）　拳石（玉楮）　桂花（長尾）　儉吉（中桐）
謙（長尾）　玄蒙（包山事）　源内（平賀）　元發（藤澤）
潔（林谷事）　桂陵（松本）　經弼（宮村）　謙谷（三野）
景親（村尾）　景敦（村尾）　景美（村尾）　元度（富山）
玄默（春野事）　絢海（中桐）　元益（長尾）　玄純（山田）
敬主（神崎）　敬之（神崎）　元茂（後藤）　桂巖（岩井）

桂叢（長尾）　弦峰（池田）　弦齋（池田）　研堂（村山）
玄卜（氷室祖父）　景毅先生（中村）　玄好（江川）　元密（三野）
弦山（吉成）　景允（梶原）　景林（梶原）　嗜齋（鎌田）
元達（千野）　元達（千野）　元琳（三野）　源英（松平）
雞林（深井）　景紹（梶原）　兼孝（岡井）　馨（岡井）
業宗、馨齋（吉本）　元陵（白木）　堯民（三谷）　謙篤（六車）
輗甫（横田）　解脫味（龍登）　景緝（村岡）　景輿（村岡）
敎海（空海）　元章（片山）　元輔（山川）　玄又（岡部）
桂舍（正木）　龜澤（　堀　）　元徽（竹石事）　敬尙（石窓名）
蕙園（黑木）　元章（長尾）　曉園（顯昌）　幻文（瀧）

○フ之部

藤原盛兼

は香川郡井原莊司にして源平戰爭のとき源氏に屬し、元曆二年二月十八日屋島に於て戰死せし人なり、墓は香川郡由佐村大字横井道傍にあり。

藤澤入道と新太夫道信

香川郡安原上村内場の城主なり、嘉應承安の間越後に藤澤入道なるものあり、威名傍國に振ふ、後此地に來り此地に築き居れり。其子新太夫道信文治元年二月源義經に屬し、屋島に奮戰して死す。墓は同村にあり。

藤原安右衛門

阿野郡陶村庄屋原（十龜山の西北にあり）の城主なり、蓋し瀧宮氏の部下ならん、天正頃の人。

藤田大隅守

仲多度郡垂水城の城主なり、位置は同村字中村にあり、今の淨樂寺の地即ち是なり、蓋し天正前の人。

藤井太郎右衛門

は香西家の臣にして大百姓なり、常に健者百人すくりて持つ大剛の者にて智謀百萬人に超へたり、伊賀守より渡邊の氏を許して親屬の緣者とす、此者天正十年六月土佐元親、香西へ攻入りし時、忍の者を使ひ敵狀を偵察し或は不意に敵に對して銃砲を發しなとして香西氏の軍勢を助けし人なり。

藤田四郎入道宗遍

宗遍は三豊郡大見村大見の城主にして天慶頃の人。

（參照）

大見城は藤田四郎入道宗遍之を城いて居れり、近江の人にして天慶の亂伊豫椽純友を誅して功あり、封を大見松崎に受く、故に山王を以て社とす。（讃）

福家氏

は香西家と同族たり、藤の太夫資幸（資村の兄）阿野郡福家村に城を構へて居る、其城は山上にあるものと村中にあるものと二ヶ所あり、遂に福家を以て氏となす、其子を三郎資俊と云ひ其妻女は資村の女なり、資俊は菅神を崇信し、前に香西資村の許にありし平賀氏に賜はりし神像を請得て、邑の來迎院に安置せしが後寺も兵火にかゝり、福家氏も亡びしかば其像轉輾して英公の手に歸し、遂に高松の大天神に祭らるゝに至りしと云ふ。

福家七郎

は福家資幸の末裔にして福家氏最後の城主なり、性温厚にして偏頗心なし、天正七年香西佳清其室羽床氏を離緣し、兩家爲めに確執を生じ戰端を開きしも、七郎は双方何れへも附かず傍觀的の態度をとり居たりしかば、香西家は是に關し邪推を抱き、七郎は羽床に同心せる者なれば事前に圖るべしとて、或日香西浦の大網見物に誘引し、三月初に海上に出して殺され、其子某は佐料に在りしが此れは舟中にて七郎が殺されるや否や、烟をあげ其れを相圖にして殺され、福家氏終に其嗣絶へたり。

陶村の大宮八幡宮は天文年間福家七郎今の地に移すと讃州府志に見へたり、然らば七郎は天文年間より天正年間の人ならん。

福家七郎左衛門

は福家七郎の末裔なり、天正十五年八月生駒正規に祿二百石を以て召抱へらる。

古川　齋

諱は元紹、名は齊、字は士厚、號は橘園又睡齊、高松藩士芦澤元直の男なり、出て那珂郡三條村古川氏を嗣ぎ、幼にして經史を學び長じて砲術を學び、又長崎に遊び醫術を學び歸りて醫業を開き名聲同隣に轟く、文久二年高松藩に召され塚原兵庫等の衛戍にあたる、明治二年四月居宅を以て學校に代へ郡中の子弟を教授す、明治三年十月歿す、年六十。

古川躬行（來寓人）

躬行は文化七年五月江戸に生る、幼より學に志し好みて國史を修め、古典に通せり。明治六年三月河内國牧岡神社小宮司に補せられ、同十一年六月再び大宮司に任ぜらる明治十五年八月金刀比羅宮の招聘を受けて來任し、諸祭の行事舞樂に付多大の助力を與へて、之を改善せしこと尠からず、明治十六年五月六日歿す、年七十四。

深井雞林

名興祖、字子虎、通稱喜八、又清左衛門、號雞林、高松人、○山鹿流兵學及儒學を以て惠公に仕ふ、明治四年八月廿六日歿す、年六十七。

深井松齋

名彪、字叔虎、通稱初喜兵衛、後清兵衛、號松齋、雞林の次子、○高松穆公定公に仕へ、山鹿流兵學を講ず、寛政六年六月四日歿す、年六十四。○著書、廢城考五十卷等あり、○漆谷の詩に深松齋とあり、是なり。

深井造齋

名彬、字季之、通稱藤太、號造齋、雞林の三男、兵學を專攻し傍詩作す、後柳川侯に仕ふ、寛政頃の人。

深井象山

名修、字太平、通稱太平、號象山、松齋の長子、○家學を承け又江戸に遊學し、文武を兼修す、襄公懋公に仕へ、天保九年考信問總裁となる、同十年十月十八日歿す、年五十七、○著書、軍譜十五卷、石清尾八幡宮御奉納詩歌御寫、小笠懸詩歌等、○又歌を能くす。

深井松窓

名彰、字子明、通稱初兵藏後太平、號松窓、本今村一充の子、象山の養子、○昌平黌に學び、又兵學を山鹿素水に受く、後講道館總裁たり、明治十五年六月十一日歿す、年七十四。私謚良賜、墓は飯山撰文、○妻は象山の妹なり、歌を能す、○著書に武學あり。

深井飯山

名寛、字栗卿、通稱太一、號飯山、松窓の長子、○冲堂に學び文を能す、慶應三年江戸昌平黌に遊び、後講道館教授となり、明治三年再東遊、重野成齋の塾頭となり、後會計檢査院に奉職し、後部長となり高等官一等從四位に叙せらる、明治三十六年十月三十日歿す、年五十八。

深井安齋

名公信、號安齋、實は大納言三條公廣の季子、○高松英公の時儒者、食祿百五十石。

福家大有

字大有、通稱才右衛門、高松人、或は福大有といふ、福は姓の略、年代は文化前か、○經史該博、諸儒に越ゆ、人憚りて用ゐず、大有亦仕を求めず、生涯酒を以て樂となし終日醉臥す、○詩、三閭大夫不欲醉。彭澤先生不欲醒。一醉一醒君莫笑。英魂千歲空飄零。

福井魯齋

號魯齋、又百福、又青松老人、○髹飾彫刻俳及畫を能す、明治十九年歿す、年七十。

福家鶴遊女史

名は松枝、坂出町の人、父を宮崎駒吉(號巴陸)と云ふ、文政九年六月十日の出生なり書を辻鳳山に學び、後京阪、大和、伊勢、伊豫、阿波、土佐、備後、讃岐等を探勝して研究得るところ頗る多かりき、後川津村福家辰三郎の妻となる、明治十八年十二月廿四日歿す、年六十。

福江六山

號六山、俗稱嘉十郎、香川郡圓座村の人、○書を能す、木内龍山習字の師なり、文政九年四月廿七日歿す。

福田則雄

名則雄、天保頃香川郡由佐人、○歌を能す、栗洞展觀錄にあり。

福家安定

は陸軍少佐にして舊高松藩士なり、初昌平黌に學び、明治の初年より陸軍省に出仕し累進して砲兵中佐となりて、大山陸軍大將の陸軍大臣たりし時其の秘書官たり、常に勵精を以て聞ゆ、明治二十七年八月征清の役起るや第二軍參謀副官を以て、大山陸軍大將に從ひ十月十六日宇品港を出發し、二十四日清國盛京省華園口に上陸す、其出發前より既に病魔の侵す所となれり、然れども堅く秘して之を人に言はず、偶々從僕之を知り書を以て東京なる家族に知らしめんとす、安定之を見て勵聲叱咤其書狀を取り寸斷し病を勗て戰地に赴く、其華園口に達する時病勢益々加はり起居苦痛を感ずること甚しきも無事安着のことを家族に報し、一言の病に及ぶなし、既にして其病益々重く遂に十一月二十二日華園口に歿す、于時年四十。安定の陸軍部内に在るや敏捷精緻能く其職を盡し計畫する處多かりしと云、又鄕土の事業にも陰に陽に力を致し、第百十四銀行や糖業會社の起るに當つても盡力する處ありしと云ふ。

福家梅太郎

氏は本縣農界の恩人にして、萬延元年三月十五日香川郡中之村に生る、夙に農事教育に心を寄せ、東京に出て中等科の學を修め、明治十四年九月年齡(廿二)駒場農學校に入り螢雪の功を積み、同十九年七月同校を卒業し、同二十年四月滋賀縣農事巡回教師となり盡す處あり、同二十二年一月本縣に轉任し、農事改良の衝にあたり傍ら師範學校教諭となり農科を生徒に授け、又多度津測候所長となり氣象上の智識を宣傳し、明治三十二年四月農事試驗場の設立さるゝや君其場長となり、農事の改良に盡瘁せり爲

人温厚篤實能く人を容る故に部下悅服せり、惜哉明治四十二年三月十一日四十九歳を一期として逝けり、同年十一月香川縣會は生前の功績に酬ゆる爲め全縣一致を以て追賞金五百圓を遺族に贈呈せり、而して歿する時の官位は高等官五等從六位勳六等を有したり。

福本彌平

彌平は香川郡直島村宮の浦の人なり、弘化元年十二月一日を以て生る。父を清右衛門といひ、嘗つて俠心を以て生鯛を岡山藩侯に献じ嘉賞されしことあり、常に清廉を旨として子弟を訓ゆ、彌平この庭訓を守りて家業に努力せり。

適々明治十六年一月三十日雇人松下芳松と共に備後鞆の津に赴き、歸途兒島郡下津井村に至り翌三十一日拂曉直島に向つて進行中、同郡澁川村沖に至るや天色俄に變じ波浪山より高く航行困難となれり、時に水程二十四五町を距てゝ激流の中に隱見出沒せる船休を認め熟視するに、難破船なることを確めたり、因つて身命を賭し遂に救助を全ふせりといふ、後この功により明治十七年七月一日紅綬褒章を賜はりて賞されしとなり。

船越晴涯

號晴涯、文化頃東讃人、○畫を能す。

藤井嬾齋

名臧、字季廉、號嬾齋、又伊蒿子、高松人、○少時父と俱に京師にありて醫術を岡本玄治、儒學を山崎闇齋に受け、業成りて久留米藩主有馬侯に仕へ、後辭して京西鳴瀧に隱居し、米川操軒、中村惕齋等と交る、寶永年間京都に歿す、年九十餘歳、墓は京都鳴瀧泉谷西壽寺にあり、○先哲叢談に筑後人とあるは久留米侯に仕へしを以てなり本高松眞行寺了現の子、初眞名部(眞鍋)忠庵といへり。子象水あり名理定、字叔觀と稱し、菊潭子と號す、兵を好み詩を能くす、曾て鳩巢と唱和す。

藤井半雲

名澹又香澤、號半雲又梅仙或は陳舜香と稱す、志度醫、壯時長崎に遊び醫術を學び、傍ら業暇畫を學び後浦上春琴に私淑し、著色花鳥を能す、明治三年十月歿す、年七十三。

藤井裕齋

名は裕、字德基、通稱初馬之進、中頃は淺造、後裕と改む、もと香川郡圓座村遠藤家に生る、後山田郡坂上村大字上田井の藤井氏を繼ぐ、文は冲堂、漢詩は篁山に學び、又俳句は期日庵一瓢と號し各其堂に入れり、明治四十三年八月中旬の頃より風症に罹り、同年九月三日沒せり、享年七十三。

藤川東園

名は東園、本姓赤松則祐の裔なり、家本大内郡東山の住、○父正益、浪華に醫業す、東園浪華に生る、古醫道を修む、○菅甘谷は物門にて浪華にあり、東園其學を受け、山田郡三谷に歸り之を城山に傳へ、城山之を東畝に傳ふ、讃岐徠學系統かくの如し、○東園一時吉田氏を冒せり、因て吉元中とも云へり。

遊伏水桃山

春風軟滿武俊源。々上烟霞擁樹繁。移荷欲尋舊時事。桃花流水兩無言。

藤川南凱

名南凱、東園の從子にて其後を繼ぐ、○亦儒醫を以て聞ゆ、天保二年四月歿す、年四十三。

藤川蘭齋

名洪隆、字周南、號蘭齋、文化頃高松人、○篆刻を能す、畫譜印部に出づ。

藤川黑齋

名操夫、字善卿、通稱舜藏、號文綺堂、黑齋といふ、象谷の弟なり、○象谷と別居して藤川氏を稱し、存清蒟醬法を專業とし、亦技名あり、明治十八年十一月歿す、年七十八、○蒟醬をキンマといふは外國語、本安南邊の果實の蜜漬としたる物、漆器に蒟醬手といふは其果を盛る器よりいふ、終に漆法の名となる、縣史、人物傳共に醬に艸を加へたるは誤。

藤川將監

名は忠猷、字は伯孝三溪と號す、通稱初め求馬、能登と改め、後將監と改む。文化十三年十一月廿四日山田郡三谷村に生る、父は南凱、母は鈴木八重と稱す、少時中山城

山の門に入りて學を受く、嘉永四年江戸に行く。輪王寺宮一品法親王召して侍讀とす將監江戸に在りて大橋訥庵、藤森天山、松本奎堂等と友として善し、安政元年夏門人岡本監輔を伴ひて蝦夷に航し其の地を探る。是の歳平野國臣、高杉晋作、日柳耕吉等と共に皇運を挽回せん事を謀る。文久三年將監、松平左近を說き鄕兵五百人を擇びて龍虎隊と名づけ自ら其の長となり、西洋銃陣の法を演習せしむ。而して策を中山大納言忠能に獻じ又書を一橋刑部卿、水戸中納言及び松平藩主に上り時事を陳ず。藩の猜疑に觸れ獄に下る、獄に在ること前後六年其の間書を著す。明治元年正月鳥羽伏見の役高松藩の兵賊軍の先鋒たりしを以て高松藩朝敵となり、官軍として土佐兵等高松に入る。高松藩罪を謝す。此に於て正月廿日將監終に獄を出ずるを得たり。因つて直に京都に上り澤爲量に仕へて家司となる、四月朝廷左大臣九東道孝を奥羽鎭撫總督となし、澤爲量を副督として奥羽を征討せしむ。將監も亦四月九日奥羽鎭撫府軍役を仰付られ、後隊を率いて繼ぎ發す。同月廿三日新庄の督府に至る、副督大に喜ぶ次で同月廿一日奥羽總督府日誌局長となる。次で副督の命に依り江戸に行き援を大總督府に請はしむ、將監命を受け路程に就き千辛萬苦せしも、賊兵の爲めに道路梗塞して達する能はず空しく新庄に歸る、副督酒を賜ひて慰勞す。同月廿七日奥羽鎭撫府軍事役に任せらる。副督將監に命じて曰はく「秋田に抵り佐竹中將を說き速に兵を發し來りて我を迎へよ」と。五月朔日秋田に抵り强硬なる談判をなし百方說破して命を奉ぜしむ。遂に副督を秋田に迎ふ。次で副督將監にに命じて曰はく「今秋田の形勢を察するに三面敵を受け西方則ち絶海、船なくしては濟るべからず。若し急警あらば官軍一人の命を逃る者なし。汝速に松前に航し松前志摩守德廣をして洋船一隻を傭ひ之を秋田に置き以て緩急に備へ、而して後函館より海路江戸に航し援を大總督府に請ふべし」と。六月六日孛漏西船に乘じて函館を發し、十一日江戸に抵り大總督府に詣りて援兵を請ふ。次で三條實美に謁し其の旨に從ひ京都に上り大政官に至り援兵を請ふ。六月十七日岩倉公將監を召し更めて奥羽鎭撫府軍監と爲し公と共に參內し天顏を拜す。又大和錦軍服及び金二百兩を賜はる。將監副島種臣と共に京都を發し、獨り高松に至り出兵の事を謀りしも、官命により直に肥前に至り副島種臣と會し、兵を募り秋田の船川港に到る。將監官軍の一隊長となり他の官軍と協力して、秋田庄內の賊兵を太平山及び豊島驛に破る、督府賞して菊章旗及び金五十兩を賜ふ。進んで庄內城に迫る城主酒井忠篤降る。十月三日奥羽監察使となる。十四日東京に抵り參朝して平定の事を奏す。十七日更めて南部監察使を拜す　官軍南部城を降し、十一月十日將監城に入り其兵器彈藥を收む。十二月二日東京に抵り、南部美濃守利剛及び其子彦太郎利恭を軍務官に致す、官特に二百兩を賜ふ是月京都に抵り居を黑谷に卜す。明治二年六月二日戊辰の

戰功を賞し金二百五十兩を賜ふ。高松藩主松平頼聰亦年金二百五十兩を贈る。三年東京に上る太政官權少史に拜す。幾もなく之を辭し帷を神田佐久間町に下し子弟を敎授す、七年五月廉澤學舍を創設す。八年八月修史館三等協修に任ぜらる、十二年十月宮内少輔山岡鐵太郎に依り維新實記を宮内省に獻じ、乙夜の覽に供す。十三年十一月治安議議五卷を著し宮内省に獻ず、廿一年大阪に赴き水産學校を興し子弟を敎授す、二十二年十月廿二日病を以て大阪の僑居に歿す、享年七十有四。東京青山の墓地に葬る三溪著す所凡そ十七部三百五十卷あり。傳へ聞く維新前高松藩にて屋島山下に砲臺を築きありしが、此は三溪の設計になりしものなりと云ふ。大正四年十一月正五位を贈らる。藤川三溪の著書次の如し。

杖頭囊(西遊記)二冊、海國急務一冊、捕鯨圖識三冊、水産圖解二冊、水産製造新編三冊、蘆中漁唱(大阪流寓中の詩集)一冊、漁撈新編二冊、海錯帳一冊、春秋大義二冊、三溪詩集五冊、櫻鴈日記(奥羽征伐記)五冊、弟子則一冊、維新前記(德川家定家慶家茂慶喜四代の記)五十冊、維新實記(今上新政の記)百冊、皇國千字文一冊。

藤川貞世

名は貞世、通稱は文左衛門、幼名門吉郎、高松人、○天保六年考信閣出仕、後勘定奉行格となる。○歌初五松後方升に學び能くす、明治二年八月歿す。

谷ふかくいりにけるかな樵夫のうたもかすかにとほさかるまて　谷樵夫

藤川貞賢

名貞賢、又薫世、通稱三太夫、貞政の子、貞世の父、高松藩勘定奉行、○江戸にて岡田眞澄に學び歌を能す、文政三年正月歿す、著書百人一首註釋あり、○歌に瓮廼舍(ミカノヤ)といふ、又挿花の技名を桃李窓芳國といふ。○屋島眺望、やしまねの西の高根の影友ゆやには廣らに國のほもみゆ

藤川貞富

名貞富、通稱初三郎兵衛後三郎次、貞賢の子、○歌を能す、明治四年四月歿す、年六十四、追號美風軒貞富居士。

藤本遁齋

名居敬、字仲簡、通稱達助、號遁齋、庵號不繫舟庵、高松人、父は藤本常八、○漢詩文和歌を能す、龍山の親友にして金岳公子の記室たり、慶應三年二月歿す、年五十三、

○由良神祠に遁齋撰碑文あり。

弟野口承藏、親卿と稱し、是又南岳の高弟にして詩文を能くす。著書詠史浦藻集あり

本邦及支那の英雄百六十名を和歌に讀み込みしものにて慶應二年の著にかゝり、藤澤南岳が其の序をかけり、何れ本書を刊行する積なりしも、翌年歿せしかば其事を得遂げずして歿せし事は同情の念に堪へぬ次第である、且此原本は先年松島の古物屋にて私が見出し入手したものである、其中八首を錄す。（竹軒）

護良親王

うきくもの立へたてずは秋月さやけき影をなほもみましを

楠正成卿

あふくにもなほ社あまれ赤坂にさゝげし旗の高きいさをは

楠正行朝臣

垂乳ねに立もおくれずかくはしき名を社なかせ菊の下水

楠正儀

つらなれる枝さへをれしくすの木の心細くも殘る一本

新田義貞卿

わたつ海の神のみやしるおり立て汐干いのりしふかき心は

脇屋義助

いとゞよに北風そふく伊與の海の磯へに君がふねはてしより

新田義興朝臣

思だによらぬ矢口のあだ浪を神と成てやうち返しけん

名和長年

おきの海にひそみし龍もなわの浦に天つ雲をそおこし初ける

藤木日精

初め勇進と稱し、生れは長州であるが高松に來り藤木立正に養はれ金岳公子の直弟となり、學成り京都北野常願寺の住職となり、後大阪中寺町本覺寺の住職となれり、其略歷左の如し。

藤木日精、字は勇進、事圓院と號す、天保九年八月八日生る、讃岐國高松本典寺日良上人に就きて得度す、明治十九年大阪本覺寺住職を嗣ぎ二十四世たり、爾後在職廿七年法職を徒弟日事に讓る、明治三十四年僧正に累進し、同四十四年五月大本山妙蓮寺第五十二世歷祖に任せらる、明治四十五年六月廿八日遷化す、享年七十六。

藤本源七

小豆郡池田村の人、諱は健、字は伯順、栢谷と號す、小名は宙吉、長じて源七と稱す平井好清の第六子にして、池田村濱村の人なり、世々農を以て業とす、性孝悌にして慈惠膂力人に過ぐ、最も武事を嗜み其の術を善くす、又農に生れて耕種の道を知らざるは恥づべきことなりとて、農業全書等を讀破し、その要領を摘み之れを用ゐしと云ふ、後池田村藤本勘三郎の養子となりその女を娶り又農を業とす、恒に孝を盡して鄉里に賞せられ、或ひは人の危難を救ひて困乏を賑ふせし等算ふべからず、寶曆十一年六月八日生、天保十一年十一月二十七日歿す、年八十。墓碑銘は山川黃の撰文なり。

藤江松濤

名貢、字綾又松濤と號す、會津の人、或は旗本の次男とも云ふ、詩書を能くす、隷書最も妙なり、維新前志度に來り寺小屋を開き子弟を敎授す、明治七年の頃同地にて歿す、年六十餘歲、明治學校の敎授、南呂望月、秋は唯今宵のみとてまつものを無良くとおくほそき月かげ

藤本冨市

氏は香川郡安原上西村の助役なり、明治二十七年同村助役に推薦されし以來、村長を助けて村治の改善、納稅整理其の他土木、衛生、勸業方面に盡瘁し、遂に同村をして模範村とならしめしは、同氏の努力與りて力ありし結果なり、然れども惜哉大正六年十一月廿四日歿せり。

藤村王民

名は熊藏、王民又麗澤と號す、亭號を能遷亭と云ふ、三豐郡和田濱の人、今是の兄にして子なきを以て今是を嗣子とす、春水、空石等に學んで詩文書畫を能くし、尤も草書を好む兼て理財術に長じ國產砂糖、綿等を國外に輸出し同家の財產を殖せしは此人の力なり、文化十四年古稀に達したれは全國有名なる文士に檄を飛ばし詩文を募集し此を藤翁古稀善頌と題し、木板に彫刻し親戚知友に頒ちたり、此書の序文は岡內綾川の作りしものなり、詩は熱心に作りしものと見へ著書王民詩稿、麗澤老人詩稿、能遷亭詩集等あり、文政九年五月四日歿す、年七十九。菊が餘程好きであつたと見へ邸內に菊花壇を設け陶後園と稱して居た。

藤村今是

名直弘、字毅順、通稱乙九郎、號墨雨、澹齋、今是、今是よく行はる、和田濱人、暢襟樓、蟾如齋と號す、王村の弟にして其嗣子となる。書畫及俳を能す、家古書畫を貯へ客を愛す、暢齋海屋諸人、前後交遊す、安政二年十二月歿す、年五十九。○俳句は蒼虬門、月ひとつかついて夜たゝぎ鉢たゝき

藤澤東畡

名は甫、字は元發、昌藏は通稱にして東畡と號す、香川郡安原村喜兵衛の子、六歳能く書を讀む、夙に中山城山に從ひ其高足たり、文政三年西國長崎邊迄巡遊し歸りて、一時高松福田町にて學塾を開きし事あり、其師城山これを守泊庵と名づけ其記あり、居る事數年にして文政八年大阪に至り帷を下す從學の士太だ多し、諸侯にあつても松平飛彈守(豐後岡藩主)松平遠江守(攝津尼崎藩主)等東修を門下に行へり、曾て原聖志を著はし孔子の志四海をして一君たらしめ、萬古之を更らさらしむるに在ることを詳論し、本邦の尊きことを知らしめ思問錄を著はし、孟子勤王の一事は亂倫の魁にして孔子の志と相背馳することを論じ、專ら尊王奉公を以て學問の正脉とす、高松藩擢て中士と爲し使番に班す、元治元年二月將軍德川家茂謁を二條城に賜ひ、高松藩に內訓して幕府の儒員たらしめんと欲するも、議合はざるを以て病に托し辭して大阪に歸る同年十二月十六日沒す、享年七十一。○著書、原聖志、思問錄、泊園家言、東○文集等あり、明治三十三年故鄉に彰德碑を建つ、大正四年十一月十日正四位を贈らる。墓は大阪市生玉寺町齡延寺にあり。

藤澤南岳

諱は元章、字君成、通稱恒太郎(又略して恒の一字を用ゆ)晩に香翁と稱す、藤澤東畡の長子なり、號を南岳(後通稱となれり)家學を承け漢學に達し、少壯高松藩に仕て大阪に居りしが、維新の際本藩の朝敵となるや元年正月十二日突然藩に歸り、佐幕派の藩論を說服し同藩をして勤王に歸順せしめしは世人の知る處なり、後又大阪に出て泊園書院を開き、儒敎主義を宣傳し多くの子弟を薰陶せり、其勳功により大正四年十一月正五位を賜はりたり、爾後大阪市南區東平野町の邸に於て優遊文墨に親しみつゝありしが大正九年一月卅一日七十九歳の高齡を以て逝けり。子元造及章次郎あり克く家學を繼ぐ。著書頗る多し其重なるもの左の如し。

新編林園月令、七香齋類函、文章九格、制度考韻雅、修身雜語、遊展餘痕、萬國通

議、弘道新說、韓非子全集、自警蒙求、聖勅衍義、大學講義。

藤澤元造、黃坡

氏は黃鵠と號し、南岳翁の嗣子なり、父に學んで詩文を能くし、家塾泊園書院の經營者たりしが明治四十二年桂内閣當時舊門人から推されて代議士となり、南北朝問題で世間を騷し辭職した、其後大阪醫大講師の囑託を受けたこともある、其後家塾は次弟章次郎に讓り、鶴橋の自邸に悠々自適の身であつたが、大正十三年九月十九日病沒せり、享年五十一。

章次郎は黃坡と號し、詩文を以て世に知らる、今は大阪南區清水町に於て私塾を開き父の衣鉢を繼ぎ、漢學を敎授し居れり。

藤田玉洲

通稱傳兵衛、號玉洲又靑江齋、丸龜人、○畫を能す、明治四年沒す、年七十。

藤田板屋

名節、通稱甲平、號板屋、又湘軒、又石田、寒川郡石田人、○畫を能す、安政四年正月沒す、年七十四、○畫譜に、藤田甲とあり此人なり、又印刻す、同譜印部に出づ。

藤田花齋

號花齋、天保頃の人、○詩を能す、栗洞展觀錄にあり。

藤田南巷

號南巷、大內郡引田人、其家痲屋といふ、畫を竹處に學ぶ、明治二十四年十二月沒す。

藤田三平

三豐郡豐田村の人、性溫厚、母に事て孝、學を好み香川克齋翁に學ぶ、而して同情心に富み常に窮乏者を賑はす、始め新田村戶長、豐田村長並に學務土木等の委員となり公共事業に盡す處多かりしも、明治三十七年十二月十日沒す、年六十。

藤田苔石

名は敬、儀三郎と稱す、號は苔石後台石と改む、多度津町の人、藤田傳兵衛(號玉洲)の男にして天保十一年十月廿八日生る、畫を父に學び三府、備前、備中、安藝、伊豫、

土佐、阿波、淡路、和泉、近江等を遊歷す、苔石の苔の字後台石に改め、明治二十年以來大阪に移居せり、大正四年九月十五日大阪に於て沒せり、年七十六。

藤田苔巖

俊輔とも云ふ、多度津の生れにして藤田儀三郎(號苔石)の男にして、畫を父に學び後京阪、大和、周防、安藝、阿波、土佐等を遊歷して得る處ありしと、後奈良に住す。

僧佛朔

小豆郡苗羽村の人、名は廣育、佛朔、又朔道人と號す、龜甲山八幡宮の別當、元八幡寺の住職夙に佛學に長じ書を善くし、又俳句に巧みなり、嘗て書を以て聖護院の宮に奉仕し、狩野山樂の筆花鳥の襖元桃山城にありしもの四枚を拜領して歸り、之に拜領の記を自書す、以て入木道に於て自ら信することの深きを見るべきなり。所々に建設せる高祖大師一千年忌塔の揮毫の如きは其の美蹟推賞に値すへし、曾て京師に於て八宗兼學所の招牌を書せりといふ、其の能筆知るへきなり、天保十四年十二月五日沒す

（小豆郡史）

世　山陰やつゞく聲なき小夜千鳥

不染

名不染、文化頃東讃僧、○畫を能くす。

文江

大川郡津田町素封家(板屋)漲谷の子、安藝氏、文化頃の人。

耳順賀　廿日すら花の富貴を此よはひ

文竹

棣花庵と號す、金比羅の俳人。

風石

大野原の人、平田氏、南無庵四世、嘉永頃の俳人、住の江や松より多き春の人。

フ號索引

復齋（吉本）　文山（合葉）　文岳（合文）　分流（三木）
文海（西原）　福内鬼外（平賀）　佛朔（廣育）　冬海（大鐘）
文哉（手塚）　文輔（中村）　文暉（長町）　撫松（中村）
文蔚（中）　風月翁（宮本）　不重（小倉）　文濤（神崎）
文山（佐々木）　分橋（揚）　分潮（揚）　文昌（植松）
文龜（森）　不二道人（岐陽）　文庵方秀（友部）　風來山人（平賀）
武保（菊池）　武賢（菊池）　文啓（國方）　武信（菊池）
風石（平田）　文淵（井後）　武矩（菊池）　撫松（山田）
武幹（菊池）　武修（菊池）　武章（菊池）　文蔚（三井）
文撰（狩野）　文川（狩野）　文齋（合葉）　風牀（敬存）

○コ之部

弘法大師

（空海を見られよ）

近藤出羽守國久

三豊郡麻城の城主なり、天正中滅ぶ、古城記には國久は大平伊賀守國祐の弟なりとあり。

近藤但馬

三豊郡神田城の城主なり、天正頃の人。

近藤藤右衛門

香西佳清の臣にして大力の剛の者なり、天正十年八月五日土佐軍香西へ進入の時天神

郭に於て敵數十人打亡して戰死す。

小早川三郎左衞門

香西氏の部下にして阿野郡國分の城守なりしが天正八年春土佐元親に降る、或曰く綾歌郡西庄天王の城主なりしと、天正頃の人。

是竹萬五郎

香西氏の部下にして是竹に居りし人、天正十年八月五日香西伊勢馬場合戰に參加す。

小龜城太郎

鵜足郡炭所東村金丸の城主にして南朝の忠臣源少將の部下なり、正平十七年少將戰死せし時小龜氏も此れに殉す。

後藤資盛と子孫

資盛は阿野郡山田上村の城主なり。

（參照）後藤城山田上正木にあり後藤石見守資盛之に居る藤中納言家成十二世孫也後藤山に居る、因て後藤を氏とす、其子資遠、其子資章、其子資弘、其子資知、其子資方、其子資興、其子資家彈正と曰ひ三谷の役に功あり、其子備中守國資、其子是兵衞資治、其子四郎右衞門資堅に至り邑を失ふ、後生駒侯に仕へ朝鮮役に從ふ、其子是兵衞資兼、其子傳七資正、生駒侯國除の後英公節公に歷事す、傳七死し子猶幼なりしを以て祿を失ふ、其長女公孫修理君に侍し寵ありしも不幸にして早死す、次男西讃に之き僧となり光譽と云ふ、末子政之介、栗隈の農五助なる者に寄食し、後惠公に仕へ元老となり後藤主膳久明是也、同上城墟を後藤林と云ふ小祠あり。

後藤主膳久明

正德三年二月十三日高松藩の家老となり、祿三百五十石後千石に至る、享保十四年正月十一日大老となる、祿五百石を加增し、併せて千五百石を給さる、元文元年六月廿一日致仕し閑應と號す、後玄蕃と改め再ひ老臣の事を視る、延享元年十月十六日沒す。

後藤久包

名久包、通稱初大膳後主膳、久明の子、高松藩老臣、○詩を能す、寛保三年八月八日沒す、嗣なし、家祿は父閑應に返與さる。○小簑瀑、連山西折眺望偏。白日彩虹巖壑

懸。不到簑峯奇絶處。誰看飛瀑落天邊。

小早川式部能久

毛利元就の八子、小早川秀包の第三子なり、小幡景憲に從つて兵法の奥儀を得、甲州流の兵法家なり、正保三年十一月源英公に聘せられ大番頭となり、軍學を藩士へ教授せしが後病で沒し、嗣なく家絶す。南海通記の著者香西成資は能久の門人なり。

兒嶋正卿

名正卿、字玄照、大内郡三本松人、○寶暦十二年齋門姓名錄にあり。

兒島周原

號周原、文化頃の畫人、○或は倪島周原とも書けり、同人なり。

兒島竹處

名蘅、字久芳、通稱久三郎、晩に大五郎と更む、號竹處、又个个、又靜園、居處號、小書禪室、迺吾盧、有竹書房、市陰亭、高松人、○雲屋に六法を受け、後清人愈敬亭及倪董の筆意を參へ、畫氣韻あり、明治元年閏四月十七日沒す、年六十二。墓表は山田梅村撰並書。

兒島竹外

名久外、號竹外、通稱九平、竹處の子、○茶事に精し又畫を能す、明治二十六年五月沒す、年四十九、○明治四年久成會主にて、竹處追悼會を老松園に開く。

兒林象賢

名象賢、文化頃東讃人、○詩を能す。

兒玉三谷

通稱初玄藏、後圓藏、名呂胤、號三谷、高松家老大久保一學賴裕の與力、祿百石、○甚奇人なり、衆藝を好み、最も書を嗜み大字を習ふに藁筆を用ゐたり、安永寛政間の人、沒年八十八。

兒玉美穗

名葉光、兒玉千之助政慈の妻、高松人、○歌を能す、明治十四年二月沒す、年八十三○雪中鶯、うくひすの雪の古巣を出がてにまだ打ち解けぬ程ぞゆかしき、○通稱みをといへど短冊には美穗とあり。（穗はほなり）

合田德甫

小豆郡七庄村の人、幼にして學を好む、父は播州綱干に居住し鍛冶職を業とす、父に從つて彼地にあり、後學優れて建部侯に仕へ、侯に從つて東武に適きし後も日夜勉强せりと云ふ、病を以て侯を辭して後は栗山、精里の門に遊び後又昌平校の助教たりしこともあり、晩年又建部侯に召されて勤仕せしも天保七年八月二十九日病沒す、年七十有餘、著す所、朱文公集註ありしも世に傳はらず、尙德甫の後は土庄町合田與市なるもの緣故あるを以て北山高橋善兵衛の三男にして跡を繼ぎしと云ふ。

古鏡

古鐘は寛政元年丸龜に生る、俗姓は松村氏、字は月珊と稱す、臨濟宗京都西山の妙心寺の高僧なり、幼より敏達、夙に出家して備前宗藏寺の松峯の弟子となり、長じて四方に出遊し、相摸の了義寺に關道を訪ひて敎を禀け、後尾張の總見寺に卓洲を尋ぬ其の法を嗣き國淸寺に住し後妙心寺に歸る、安政二年四月九日壽六十七を以て寂す。

合田新左衞門

新左衞門は豊田郡豊濱（當時姫の江郷）の產、資性豪胆、仁俠にして機略に富む、巨万の富ありて名聲近里に聞ゆ。而して荒蕪地を開墾せんとして溜池（今の新左池廣袤五町餘）を築き、又姫之江の住民に生業を與へん爲め海中を埋立て塩田を創め最初は許されしも業半にして讒せられ財產を沒收し追放の身となる、然れども子孫豫州櫻井に住し繁榮せりと。

合田榮吉

は三豊郡豊濱町の人、性剛毅果斷なり、初め東洋捕鯨會社の重鎭たりしが明治二十七八年頃朝鮮沿海の漁業に着目して、朝鮮出漁團支部長となり、大いに遠洋漁業のため貢獻せり、大正五年十二月二十五日浦塩附近に於て鯖群を發見し、二號網を發動機船に曳き操縱中沖合遙かに漁船の遭難を發見し、之れが救助中狂風怒濤のため遂にその所在を失し、海底の藻屑となつて沒せり、享年四十九歲。

小松信周

名信周、通稱初乃太夫、後乃七郎、高松藩士、○諸禮家なり、式繩（シキナハ）は力丸半右衛門の高弟、歌は方秀に學ぶ、明治初年沒す、年七十餘。

楠　公　　信　近

いまもなほ世にこそ匂へよし野山殘す言葉のはなの色香は

小島コノ子

高松藩士某の女にして筆札及び歌を能くす、舊藩主某公に仕へしと聞く、明治前の人

鶯の聲ものどけき久かたの雲井の春は千代もかきらし

小橋道寧

名道寧、字初定夫後子靜、通稱初伊三郎、次渡、後安藏、號靜學、又西原、香川郡圓座人、其先は浮田秀家の臣、故あり來讃す、○儒學を菊池萬年、三野元密に、書を菊池高洲に劒術は富永忠誥に受く又昌平黌に入り栗山精里二洲に從ひ後京都に歸り馬淵會通齋門に儒學を吉益南涯に醫學を修め、又和歌山に抵り華岡隨軒に外科を修む、文政八年五月沒す、年四十七。著書數種あり、○亭號來鶴亭、○水亭聞蛙、茅屋池塘上窓前水氣淸。鳴蛙幽草裏。長嘯不相妨。

子男子四人女一人あり、長安藏家を繼ぐ、次龍山木內家の嗣子たり、三男儔醫師となる、四男橋陰東都に出て儒家となる、女箏丸龜村岡竹所の室となる。

小橋安藏

安藏幼名は友之輔後安藏と改む、諱は以文、字は伯友香水と號す、道寧の子なり、性豪放にして時事に通曉し、常に大義明分を明にするを以て自ら任す、嘉永以降天下騷然此時に當て窃に皇室の式微を憂へ、子弟を鼓舞し親戚を奬勵し自ら資產を抛ち力を國家に竭し將に大に爲す所あらんとす、文久三年八月大和行幸の議あり、越後人長谷川鐵之進と與に之に赴かんとす事齟齬し、高松藩の嫌疑に觸れ獄に下るも歲餘にして免さる、元治元年甲子次男友之輔京師堺町門に戰死す、慶應元年又高松藩の嫌疑を受け再び獄に繫がる、明治元年正月官軍高松に入る此時幽囚を解かる、同二年六月俸十口を給し高松藩の士籍に列す、九月松崎澁右衞門橫死の事あるや又獄に下るも彈正台令して之を免さしむ、爾後晴耕雨讀以て老を養ひしが同五年六月病で沒す、享年六十五。大正四年十一月十日正五位を贈らる。

（附記）香水は小時家庭に學びし外大内郡馬宿村伊藤宗介に學びしなり。

遺　詠

人間唯要存公忠。天地有神何不通。幾度幽囚身乃活。生前今尚沐皇風。

晩　年　述　懷

父子致レ身子克終。殘生垂死恰如レ聾。自悲六十四年日。送二得光陰一無二一功一。

小橋　儔

名惇又儔、字叔德、號柳泉、通稱留助、道寧三男、〇初家業を承く後醫を備前難波立愿に學ぶ、安政五年九月沒す、年四十三。

小橋橘陰

名勳、字季績、通稱多助、號橘陰、道寧の季子、以義の叔父、初め父道寧及綾川に學び、後江戸に上ぼり藤森弘庵其他の大家に就き學び詩文を能くす、業なつて安政五年頃江戸に於て帷を下し子弟を教授す、學事の傍ら幕府の政事問題を密偵し潛かに香水及龍山の許に報し勤王黨の進退を過らざらしめしと云ふ、明治十二年二月十九日沒す年五十六、墓は東京谷中にあり。漫遊非獨爲風流。廟略兼觀勢遠籌。斗出環彎三百里砲臺處々禦蠻舟

小橋友之輔

名以義、通稱友之輔、安藏の次男、幼にして叔父順二に學び、後安政三年叔父橘陰に從ひ江都に行き橘陰及び藤森弘庵に學ぶ、後歸鄕して父と俱に勤王を唱ふ、文久三年長谷川强庵に從ひ阿州祖谷に至り土豪に勤王を勸說せしも要領を得ずして歸る、文久三年八月御親征の擧に加はらんとして京都に上ぼりしも、朝議一變せしを以て七卿に從ひ長州に行き招賢閣に入る、元治元年七月十九日長軍に加はり京都堺町門に於て戰死す、年僅に十九、大正四年十一月十日正五位を贈らる。

友之輔十三歳の時江戸に遊び同地より父の許へ送りし書翰の端へ、左の和歌を書添へて送り越したりと。

父上の御事を思ひて

たとい身は千里の海を隔つともいかで忘れん親の恵を

小橋以義墓、京都鞍馬口上善寺

（附記）招賢閣といふのは大觀樓附屬の建物で物置場や道場に使用してゐたものだが文久三年八月の　變以來、諸藩脫走の志士が亡命の七卿を中心にこゝへ集つた、で

毛利家が急に手入をして志士の旅館に宛てたもので、七卿はこの大觀樓に一時起居してゐた。元治元年七月の蛤御門の戰には招賢閣にゐた脫藩志士は別働隊として忠勇隊を組織して、長藩の家老益田右衞門介、福原越後國司信濃等に從ひ君側淸掃の爲め京都に上つた。

小西友鷗

名可春、通稱小八郎、號友鷗、本姓柳原、京師住、父正春岡山に移り、小西氏と婚す可春因て小西と稱す、廷寶中高松侯に仕ふ、歌を能す、享保四年三月沒す、○玉藻靈士、○著書、玉藻集あり。

小西富春

名富春、通稱千本、春芳の子、柳原第四世、高松人、○詩歌を能す、文化元年八月歿す、○社頭祝、咲く花の白ゆふかけてあまみつる神も幾世の春に逢ふらむ、○新正作一夜挽回菅廟春。梅開松茂報佳晨。自今不乏獻詩策。東歳儒臣館接隣、この時菊池武雅講道館に來れるを以ていふ。

小西松塢

名貞遊(游)、字從之、通稱元四郎、號松塢、三野郡本山人、○京都に寓し醫業す、業暇浦上春琴に學び其の高足となり、山水花鳥に長ず、畫室を硏丹壁石居と稱せり、詩文は尾池松灣に學び書も能くす、梅隱詩稿は游の校する處なり、弘化二年二月十五日歿す、年四十九、○人物傳に、諱は游とあるは片名なり。

小西松琴

名廉、號松琴、松塢の男、○畫を能す、文久元年歿す。

小西松籟

名貞穀、字士享、通稱元太郎、號松籟、松琴の男、○醫暇詩畫を能す、明治四十二年七月十日歿す、年四十一。

小西行敬

名行敬(ユキヨシ)、通稱嘉平、本廣瀨長美の子、三木郡氷上村小西行明の養子、○歌を能す、明

治中歿す。○楠公、かき濁す人しあらずば湊川還ぬ水の沫と消めや

小西蒼山

名臺造、號蒼山、香川郡佛生山醫。流達の子、○詩書を篁山に、畫を愛山に學ぶ、山水を能す。明治三十一年二月歿す、年四十一。

小泉保敬

名保敬、通稱將曹、本京人、○國學、歌を能す、天保八九年頃來高し、友部方升と考信閣に同勤す、後天保五年夏歸京すといふ。○木村重成、五月闇鳴きて別れし一聲の高く聞ゆる山郭公

小西秀行

字伯實、號南岳、三木郡氷上村の人、藤川三溪の門人にして詩を能す、安政頃の人。

小西葭邦

理天と稱す、三豊郡仁尾の人にして南宗の書風を能くす、嘉永二年十一月朔日生る。小西久五郎の男にして明治十一年より畫を三好金江、木下橋巢、松本秋帆、名草逸峯等に學びし人。

小西甚之助

氏は大川郡長尾町の人にして政界の名物男として知らる、明治十五六年頃本縣が愛媛縣と合併時代に縣議となり、伊豫議員を向ふに廻はして侃諤の議論を吐き、分縣運動に就ても努力した、又明治十二三年の交には板垣伯と國會開設請願運動を爲し、奏効空しからす其開設を見るに至つて、初期(明治廿三年)撰ばれて自由黨代議士として第十一回まで出馬し其功績が多かつた。引退後も縣下政界の爲め活躍した功勞者であつた、又文藝にも趣味を有し溪香と號し歌を作り、各地を遊歷し其紀行文を香川紙上に投書してゐた。氏は平素健康體であつたが頃日來病臥中の處、昭和三年六月廿八日七十四歳を以て逝けり。

後藤芝山

通稱初幸八郎後彌兵衞、諱は世鈞、字は主中又竹風、別號玉來山人、享和六年生る、友貞の子なり、性謙和にして逸凡の風あり、初守屋義門後菊池黃山に學ぶ、藩主賴恭其

顯悟なるを聞き資を投じ昌平校に學ばしむ。彌兵衛亦其知遇に感し鞠躬報を圖り、終始怠らす曾て藩學講道館を創建する其規畫皆之を草定す、延享寶曆の間一再韓使の僚屬に接伴す、彼等每に其才鋒に服すと云ふ、學和漢を兼ね著す所左記の如く數十種あり、就中其四書五經訓點所謂後藤點なる者世に大に行はる、年十八にして江戸の國學に入り林大學頭正懿の門に遊び、年三十三にして始めて高松藩に仕へ、六十にして致仕し、天明二年四月三日病で歿す、年六十三。諡敬思と云ふ、門下有名の士頗る多し就中柴野栗山尤も著はる、墓は高松市萬日にあり、日野資愛卿の題、栗山の序、大塚孝綽の銘、漆谷の書、宅は九番丁後八番丁、同所に大柿樹あり、俗に芝山柿と云ひたり、著書、四書五經訓點(後藤点二十一冊)元明史略四冊、官職知要、穆公遺事、後藤芝山先生詩文集、宮祠一百首、壺井職原抄、雲圖抄、雲圖抄裏書、朱子讀書要、職原抄考證、服飾抄、芝山先生遺稿、日光道の記、日札、芝山印譜、水主石風呂記、苗字集、和漢年鑑等。

和歌

氣ふよりの千とせの春を君か代にかさ禰てにほへ宿の梅かえ　守中

後藤默齋

名師周、字元茂、通稱彌右衞門、號默齋、芝山の長子、○家學を繼き藩儒たり、文化十二年九月歿す、年五十七、○芝山文集は栗山師周と輯す、○芝山宮詞百首は師周注す、○末に清默齋の印あり、默齋は其略なり。

後藤厚甫

名師張、字厚甫、通稱小三郎、芝山の季子、○芝山歿後兄默齋に伴ひ京に入り、栗山に學ぶ、厚甫儀容詳雅父に似たり、人小芝山と呼ぶ、天明六年四月五日栗山の堀川家塾に歿す、年十八。

後藤師曾

名師曾、芝山の次男、號徵とあるは此人のことか、○栗山集に、芝山先生手製茶匕、爲先生次男師曾題、竹風亭畔竹。乃此一枝分。憶昔清風夕。閑撩芝山雲。

後藤剛齋

名師邵、字伯雍通稱三之助、號剛齋、默齋の子、父に繼ぎ藩儒たり、○西山拙齋、柴野碧海に學ぶ、文政十二年三月歿す、年四十八。○文化六年父默齋其三子に命名せし

記、今池田氏に存す、其三子の中長子三之助敎忠とあるは剛齋なり。

後藤漆谷

名苟簡、字子易又田夫、號初木齋、後漆谷、俗稱勘四郎、保果の子、高松人、屋號袋屋、○雞林芝山二人に學び、又栗山に知らる、詩書共に巧なり、天保二年五月歿す、年八十三、墓四方寺にあり、五山撰文。○八十三の時公命を奉し、飲中八仙歌を書す筆力雄健、公甚歡賞す、暢齋賀詩に、腕力縱横老善書。風流今日有誰如。自公新賜傳家寶。未必恩榮滅二疏。○賴山陽が人を送る詩に、先訪詩人漆谷翁の句あり、梅村も漆谷を吾讃文人之巨壁と稱せり、蓋高松風流の化多くは漆谷、竹石二翁に賴る、○隱栖は老松園或は老松精舍ともいふ、○落欵或は滕苟簡とす、滕は後藤の藤を支那風に書けるものなり、○漆谷號は其別莊地名(山田郡新田の漆谷)に因る、漆谷山房落宴詩茅齋新構漆溪隈。霽日春風好唧盃。迎客何妨乏甘脆。當軒衆壑獻奇來とあり、此日栗山竹石等六七人會す、碑は萬日にあり、碑銘は五山擇文、大窪詩佛書なり。

○題木齋漆谷山亭　秀峯

丹崖雲霧ノ窟。幽卜出レ塵ノ清。亭ハ結金蘭ノ交、谷ハ存ス膠漆ノ誠。詩鵬迎ヘ瀉水一。茶鼎起ス松聲一。憐ム汝耽ヲ丘壑ニ。能忘ヲ倚頼カ情一。

後藤迂齋

名弘基、號迂齋又李軒とも云ふ、漆谷の子、○畫及茶和歌を能す、文政天保頃の人、人呼で天狗と號す。

後藤丹竈

名魯直、字愚侯、號丹竈、文化頃高松人、○采風集に滕魯直とあるは此人なり、詩書畫を能す。

後藤竹里

通稱仲助、號竹里、山田郡六條醫、○畫を馬嶺に學ぶ、明治二年沒す、年六十八。

後藤香浦

名崇美、號香浦、香川郡香西町の人、○俳句を能くす、又文昌に學び著色畫を能す、明治十七年六月沒す。こからしに骨を折磯のちどりかな

固淨

名固淨、號友松軒、香川郡三名村來光寺十二世なり、了寂の子、○佛典及和漢學に通じ歌俳狂歌を能す、享和二年十二月寂す、年五十九、○深く西行を慕ひ、其集を注釋し年三十六より十年に亘り之を完成して、名づけて增補山家集抄とす、近頃梅澤某之を山家集詳解と改題し東京に於て出版す、○寛政元年西行六百年追善の爲、社中十八人と歌三千首詠み、固淨之を點し、水莖岡西行影前に供す、其内自詠二百九十五首、○著書、山家集詳解、西聖人追福集、慈鎭和尙其の他追善和歌集、古今狂歌享和集、伊豫紀行、あきたづの記等あり。

宏宗

覺庵と號す、別號を啐啄と云ひ伯耆國の人、少壯京師に上り、山城國宇治興聖寺回天和尙の弟子となり、修學の後安政二年正月十一日入山し、高松市見性寺第三十五世の住職となる、師尤も書を能くす、明治八年三月廿一日沒す、年七十餘才。

宥彦

高松石清尾八幡宮別當、五智院主、歌を能くす、萬延頃の人。

扣關

名仁寂、號扣關、文化頃國分寺僧、○畫梅花を能す、畫譜に出づ、余嘗て七十翁扣關と款せし梅の畫を見しことあり、されば七十餘歲まで存命せしことと思はる。

晃全

晃全寛永四年讃岐に生る、字は版橈野水と號す、後に勅賜應安萬國禪師と云ふ、禪門越前永平寺の三十二代の高僧なり。幼より穎悟、薙髮して曹洞宗に歸し泉岳寺に留る延寶四年五十二歲にして誓を立て、釋迦牟尼佛の二千七百年忌の際法恩を報ずるため一業を起さんとし、高僧傳を編纂す、それより刻苦精勵一百五十卷の稿を終り僧譜冠字韻類と云ふ、後龍松寺二十八代となり、轉して永平寺に移り元祿六年二月廿四日沒す壽六十七。

梧屋

號梧屋又蘇岳、文化頃阿野郡人、○印刻を能す、畫譜に讃州龍光院僧とあり。

松平欽公夫人、初豊姫後遊姫、歌を能くす、水戸治保女、文政十一年五月十二日卒す享年七十六。

皐安院

琴陵宥常（篤行家）

宥常は幼名を篤丸と呼び、通稱は繁之助又盛定とも稱せり。宥常は落飾後の法名にして南海とも號す、父は宇和島藩士山下與右衛門と云ひ其二男なり、幼時金毘羅大權現の社人山下周磨の養子となり、十一の時佛門に入り金光院宥然の附弟子となり、安政四年十月金毘羅大權現別當職を拜して金光院に入り、權大僧都法師に任ぜらる、明治元年別當職を廢するに當り復飾して琴陵氏と稱し、金刀羅社務職となり後宮司となれり、神社の改革を計り或ひは學館（明道館）を建て國漢學を教授し、敬神尊皇の道を講じ、軍資其他國家的事業に巨多の金圓を献納し、明治二十二年水難救濟會を設け、博愛仁慈の道を講ずる等事蹟顯著なるを以て、明治二十二年黄綬褒章を賜ふて、其の赤誠を表彰せられたり。明治二十五年二月十五日沒す、年五十三、歌を能くす。

銅像除幕式

昭和三年四月十二日擧行された其時の景況は左の如し。

帝國水難救濟會創立者故琴陵宥常氏の銅像は海上鎮護の靈神として船乘りの信仰特に深き讃岐金刀比羅宮の神苑旭ヶ丘に建立されたが、いよ〳〵四月十二、三兩日除幕式を擧行した、當日は本部役員をはじめ地方委員たる全國府縣知事正會員八百餘名を招待し、各種餘興の催し物を行ひ全國からの參拜客のため讃豫線では臨時列車を運轉するなど空前のにぎはひを呈した。

琴陵氏が水難救濟を思ひ立つたのは黒田清隆伯が特命大使として歐洲へ派遣されて歸朝後出版した「環遊日記」の一節にロシアの救難事業について記してあつたのを讀んで感奮したのが動機で、莫大な私財を投じ金刀比羅宮に祈願をこめ寢食を忘れて盡力した結果明治廿二年十一月三日金刀比羅宮社務所に本部を置いて帝國水難救濟會を創立し二年後英船ノルマントン號が紀州熊野灘で坐礁し乘組員の大部分が遭難したにかんがみ同所へ避難所を設けたのを事業の第一歩として、全國に救護所を設け年を閲すること四十年昭和二年末までに遭難船舶九千七百餘隻、この見積り價額七千八百五十万圓の財貨と尊い人命五万四百餘名を救助し經濟上、人道上多大の功績をあげてゐる、氏は事業やうやくその緒についたばかりの明治廿五年病沒したがその功勞を不朽に傳へる銅像は高さ廿一尺工費四万七千圓を投じたものである。

琴陵保子

名保子又千滿、大納言廣橋胤保二女にて、琴陵宥常の妻、○歌を能す、明治四十四年十二月沒す、年五十八。

琴陵瑞枝子

は琴陵宥常の長女にして母は保子、光熙君の令室なり、幼より穎悟にして琴曲茶道、挿花、裁縫、細工物等の諸手藝に達し殊に和歌は夙くより母の君の手引を受け、又塚田菅彦、大口鯛二兩氏の敎を受け後更に佐々木信綱の門に入り造詣深かりき、明治廿八年三月八日光熙君と華燭の典を擧けられし時左の詠あり。

妻といふ名のもとにふつゝかの身を置く幸を吾と見出てぬ

爾後琴瑟相和し家事にいそしみつゝありしが不幸二豎の冐す處となり、遂に大正十三年二月十四日壽四十八を一期として身まがりぬ。

君は愛國婦人會香川支部幹事又日本赤十字社特別社員に列し、社會事業に盡す處あり賞勳局香川縣より數度褒狀を下賜されたり。

琴陵重鑑

は舊常州牛久藩主子爵山口弘達の四男なり、明治廿一年一月東京に於て生る、長して學習院に入り其高等學部を經て、更に東京帝國大學文科大學に轉し、同四十五年七月十日業を終へ文學士となりしも、更に進んで帝國大學院に入りて國史殊に戰國時代に於ける諸家の民政を攻究しつゝありしが、大正二年四月十一日子爵前田利定の媒酌を以て金比羅宮々司金陵光熙の養嗣子となり、養女文子に配す爾來夫妻相携へて上京し研鑽を續けつゝありしか、大正八年二月流行性感冒に犯され同年八月二十二日僅かに三十二歳を一期として逝けり。著書に武田氏の民政、長曾我部氏の民政、讃岐國滿濃池に就きて、南島服屬の年次及ひ事情等あり。

近藤正義

字は伯訓、敬齋と號す、宇足郡河原村の人、藤川三溪の門に學び詩文を能くす、安政頃の人。

近藤甘谷

赤彦は通稱、元那珂郡田村に生る、近藤泥(號男建屋)の男にして、明治元年六月十九日の生、書を藤田苔石に學びし人。

近藤梅外

通稱長松、號春嶺又梅外、那珂郡榎井人、藤井高尙に國學、藤澤東崖に漢學を學び、○畫山水を能す、明治十八年沒す、年七十九。

近藤安清

名安清、通稱初莊右衛門、後清友、高松藩士、○歌茶劔術を能す、天保頃の人。○木村重成、哀今日花の盛は二十日草散ても世々に匂ひける哉

近藤墨儕

名は謙吾、字は勝季、友松軒、自牧稜峯等と號す、もと大川郡引田村の人、後同郡鴨部下庄村字松ヶ端に轉住す、明治維新頃私塾を開き敎育に盡瘁す、附近の子弟其敎を受くる者多し、性酒を好み醉餘好んで草書及南畫を揮毫す、明治の中年歿す、年六十餘歳。

駒井心山

駒井心山諱は窮、的庵は其號のなり、江州人、嘉曆中其先尾張守山の內氏賴從五位上に叙せられ、近江守滿高始て駒井城を監す遂に駒井を以て氏と爲す、滿高の後若干世にして可次なる者に至る乃ち君の考なり、可次初め舅松田某に鞠はる遂に姓を冒して松田氏となる、初水戸公に仕へ公子讃岐守封を受け國に之く群臣陪從す、考亦與る是より遂に讃州に仕ふ、君多病を以て職を嗣ぐに難し乃ち業を醫に改め、洛に遊び林一之進を師とし尤も其術を究む、又學を三宅道乙に受く既にして親を省し遂に居る頃之ありて妻逝き子夭す鬱々として樂まず、益世に求むる無く退隱獨居心山居士と號す、元祿五年正月二十一日病で沒す、年六十三。西方寺に葬る、碑文を伊藤東涯の撰文。

後藤太平

後藤太平は高松市の人、健太郎の二男にして嘉永二年生る、幼より技工の才に富み夙に讃岐に代表的產物無きを憾みとして之れが製作に苦心す、適々彫刻の技を學ぶに至り大いに悟るところあり、因つて之を研究し遂にその技に達す、それより益々工夫を凝らして讃岐漆器の方法を案出し遂に後藤塗の名を馳するに至れり、時に朝廷に献上

せしこともあり、大正十二年六月廿五日壽七十五を以て沒す。氏は明治十五年頃より漆器を始め實業功勞者として縣から表彰されたり。

小西平作

氏は高松市西瓦町の人、生前有名なる社交家として知らる、夙に漢學に長じ舊高松藩講道館の教師たり、廢館後香川郡太田村の小區長となり、殊に明治二十一年香川縣再置に就いては小田氏等と共に盡力する處多く、後市會議員、水利委員より市學務委員長となり久しく市教育のため盡されし人なるも、大正六年十一月俄然腦溢血を發して七十六才を以て永眠せり。又氏は早くより時代の進運に伴ふ報道機關の必要を感じ、香川新報社の創立に際しては大いに奔走盡力する處多かりし一人なり。

五蕉

丸龜の俳人、齋田氏、南無庵五世、明治の初年頃の人、（齋田氏を見られよ）

江山

積善舍と號す、丸龜の俳人。

孤竹

青松軒と號す、讃岐元山の俳人。

湖中

得月樓と號す、三豊郡上高瀨村の俳人、明治前の人。

壽賀

代は耳に任すや園の名取草

コ號索引

五山（菊地）　五松（中村）　孤山（廣田）　控關、五峰（揚）
黑齋（藤川）　小平（入谷）　五峰（田中）（長曾根）　公敦（大久保）
五蕉（齋田）　興恕（犬塚）　湖山、克堂（久家）　梧屋（蘇岳共）
弘基（後藤）　苟簡（漆谷名）　坤臣（龜井）　興暢（中澤）
十輔（田岡）　高麗麻呂（春野事）　興三（中村）　國倫（平賀）
今是（藤村）　古愚（牧野）　興（三好）　小馬藏（村山）
古香（山田）　娛庵（五山事）　興（河田）　恒心山人（三谷）
厚（島村）　五岳（勝田）　公明（谷）　固淨古松（河田）
孤川（河田）　行（赤澤）　梧竹（榛名）　梧竹（日下）
弘齋（揚）　古學道人（市河）　厚伯（龜井）　克己（杉野）
興孝（松平）　後琴（石原）　興祖（深井）　厚保（狩野）

○エ之部

慧曉法師

慧曉字は白雲、三野郡の人、貞應二年生る、幼にして穎悟群童を拔く、夙に佛學に志し比叡山に上り行泉法師に就いて法華玄義を學び、天台教を研む、更に泉涌寺の明觀律師に律宗を學び、又當時の高僧なる聖一國師に禪を問ひ入室八年造詣頗る深し、文永三年渡宋し瑞巖寺に於て修禪徹理する所あり、留ること十四年にして歸朝す、正應五年大亟相藤原氏東福寺に住ましめ、聖一國師の跡を嗣がしめ、見性成佛の教風を宣揚す爲に禪宗大に弘まる、永仁五年十二月廿五日栗棘庵に於て寂す、行年七十五、佛照禪師と謚す、偈を書して衆に別る、曰く「來、也如ㇾ此、去也如ㇾ此」と更に如何と問ふに答へて曰く「如是如是」と著書に語錄二卷あり。

惠湛

惠湛は天和二年豊田郡に生る、俗姓米谷氏、字は象海と云ふ、幼より穎悟敏達妙齡の